

正義冒險譚

現魅 永純

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

泡沫の夢の続き。

暗黒期に英雄が現れ、不殺で死者を出さずに終えた夢物語の中で、“自分”に憧れた少年が“自分”とは別の道を辿る物語。

※今作は『盤外の英雄』の続編作品となります。一応見ずとも分かるような説明にはしますが、「どうしてこんな世界線なのか」というのを知りたい場合は、下のURLから飛んでそちらを先にご覧下さい。原作からかなり離れた話になりますので、個人的には見るのを推奨します。

h
t
t
p
s
:
/
s
y
o
s
e
t
u
.
o
r
g
/
n
o
v
e
l
/
2
2
8
6
7
9
/

目次

夢の続き

1

争奪戦の結末

17

家族

31

肉体改造

45

家族愛

61

和の頂点

75

絶対悪（笑）

90

英雄候補

103

正義冒険①

124

正義冒険②

142

正義冒険③

161

正義冒険④

184

正義冒険⑤

201

正義冒険⑥

229

正義冒険⑦

249

正義冒険⑧

271

デートという名のパトロール

299

風のような笑顔

336

夢の続き

——下界は絶望に立たされていた。あらゆる悪は街を滅ぼし、被害を甚大にする。死者が出た。建物は崩れた。希望は、段々と薄れていった。

でも諦めない。正義は存在して、脆いながらも足掻き続け、やがてその街には『英雄』が現れた。彼は宣言する。「もう死者は出さない」と。そして彼は成すのだ。真正正銘、『不殺の英雄譚』を。

その脚は速い。自爆覚悟で突っ込む「悪」さえ助ける様に、その自爆装置を取り上げながら駆ける。その末に強大な敵ともぶつかるが、勝利の鐘の音と共に放たれた一撃が敵を撃ち返す。

そして、二度目の戦。英雄の意思は伝搬し、多くの者はその意思を受け、自分も、次は自分もと立ち上がる。でも、たった一手で戦況はひっくり返った。なんと神様が喰われたのだ。不思議と神の力を使用できる、神を喰らった怪物は、その権能を余す事なく使う。多くの怪物は比にならないほど強くなり、英雄の意思を受けた者達も心が折れて

いく。

けど、英雄の意思を受けた正義は決して折れない。立ち向かい、勝利し、必ずや英雄に繋げて見せると宣言して見せ。やがて流れる『勝利の鐘の音』に背を押され、立ち向かう。

英雄も一度は折れた。立ち向かう術などないのだと。一人では無理だと。その時に味方が現れて、笑いながら頼み込む。力を貸してくれと。仲間との協力を経て、『英雄』は怪物を倒し、神様を助け出す。『英雄』は文字通り、誰も殺さず、誰も悲しまず、苦しまず、笑顔の終焉を迎えたのだ。

「……この英雄は、ほんとうにいたの？」

「ああ、居たとも。まあこの物語を終えて何処かへと旅立ったが……彼に助けられた者、勇気を与えられた者は、数多く『冒険者の集う街』にいる」

「いっぱいヒロインがいたのに、どこかに行っちゃったんだ」
「そうだな」

「このヒロインたちは、いまも『冒険者の集う街』にいるの？」

「ん？ ああ、殆どは其処にいるだろうな。或いは——」

白っぽい銀の髪を揺らす女性は、白髪紅目の少年の頭を撫でながら、その質問に答え
た。

「英雄の卵に寄り添って生きている……かもしれないな」

◇◆?◇

「——死ぬかと思ったわ！」

「……自業自得だ。単身で深層に突っ込む馬鹿がいるか」

赤髪と黒髪の女性は対比の感情を見せながら話し合う。一人は嬉々としながら、一人はゲンナリとしながら。

黒髪の女性が文句を垂れる様に疲れた様子で放てば、赤髪の女性は片目を閉じながら文句ありげに口を尖らせながら反論した。

「私よりもバカはいるわ！」

……そうそうおらんだろう。黒髪の女性の率直な感想を言えばそうなるのだが……
そう、いるのだ。他ならぬ目の前に。赤髪の女性が背中に乗せている少年。白髪で紅
目。かつての英雄を思わせ、事実かつての英雄と瓜二つの顔と体格を持つ人族^{ヒューマン}。
兎の如き容姿。それを認識した黒髪の女性は、深く、ふかーく溜め息を吐き、納刀し
た刀をその少年に思いつきり振るう。

鈍い音。間違はなくタンコブが出来たであろう衝撃。少年を抱えていた赤髪の女性
は浸透した衝撃に「ぐふっ」と声を漏らしつつも、自分への罰混じりだろうかと言句は
言わずに受け入れた。

少年は激痛に頭を押しさえながら飛び起き、刀を振るった姿勢の黒髪の女性を認識し、
恨みがましい目で見ると、

「いっく〜！ 何するんですか輝夜さ——ひっ!？」

……恨みがましい目などなんのその。怨念でも込められているのかと問いたくなる
ほどの鋭く冷たい目つきで睨みつける「輝夜」に、少年は文句も言えず子兎の様に震え
る。

「何を……？　此方の台詞だぶあーかめツ！　良いか、レベル3はギリのギリギリ基準値を満たし、その階層域のモンスターを“何とか”倒せるだけのポテンシャルがあるとは言え、ソロで深層に行つて良い許可とは別物だ！　そんなのは自殺行為と変わらん！」

「うぐ……け、けど……」

「けどもクソもないわけ！　依頼だったから？　救出依頼だったから時間が惜しい？　それで死んだらタダの無駄骨だ！　自分ができる範囲を間違えるな！」

輝夜は言い終えると、縮こまっている少年に短く溜め息を吐き、キツと隣を睨みつけた。

「そして団長も団長だ！　レベル5とはいえ単身で闘技場コロシアムを突つ切るバカな頭はこれか！？　一回記憶喪失となつて教育を叩き込んでやろうか！」

「……みんなとの思い出が無くなるのは嫌だわ！」

「ならば少しは落ち着きを覚えろ……団長は兎も角、私とリオンがいなければ、この馬鹿者は死んでたぞ？」

馬鹿者と指差された少年は「う」と心を穿たれる様に声を洩らす。自覚はあったか。ならば何故だと再びジト目になるが……答えは決まってる。少年の願いを思い返した輝夜は額に手を当て深く溜め息。

やがて近寄って来た足音に反応し、輝夜はそちらに視線を向けた。

「リオン、依頼の者達は？」

「衰弱しては居ますが、命に別状はありません。発狂されても困るので、取り敢えず睡眠薬で眠らせました……」

「ああ、良い判断だ。比較的安全なペースとは言え、下手に暴れられてはダンジョンが牙を向く」

「……貴方の声も結構大きかったです」
「……」

呆れた様に言葉を吐くリオン……リユーに視線を合わせない様、輝夜はプイツと横を向く。リユーの言ってることは正しいけど、同時に輝夜の説教も間違いではない。何より心配していたのは目に見えている事。あまり責める事でもないと判断したリユーは、赤髪の女性へと視線を向けた。

「アリーゼ、一先ずコロシラムの方は魔法で天井を壊して落石させ、入り口を塞ぎました。例のモンスターが出るには……」

「ん、全然平気。ウラノス様から聞かされる限り、何階層かに盛大なダメージを与えない限りは現れないって。削る程度なら問題ないわ。尻拭いさせちゃってごめんね？」

「……私は構いませんが、輝夜は」

「公衆の面前で土下座五時間で許しを請うわ！」

「私への罰ゲームだろ、それ」

輝夜は頭痛がした様に顔を顰めて呟く。

「……さて、クラネルさん」

「ひうつ……は、はい」

「……輝夜から散々に怒られたでしょうから、私からは多く言いません。取り敢えず――」

――貴方が無事でよかった」

「あ……う……う……」

顔をボンツと赤くした少年……ベルは、リユウの笑みを直視出来ずに顔を俯かせる。
 ……相変わらずだと苛立つた輝夜は、足蹴りをベルの尻へと放った。

◇ ◆ ? ◇

アストレア・ファミリア。今や最強派閥の二角、ロキ・ファミリアとフレイヤ・ファミリアに次ぐファミリア。団員構成はレベル5が三人にレベル4が八人。そして唯一無二のレベル8。全てが第二級以上の冒険者で構成されているファミリアだ。

正義の派閥とだけあって、そのファミリアへと入団を希望する者は数多い。改宗コンバージョンをしようとした者もそれなりにいる。……のだが。

——下心が丸見えだ、戯け。せめて自分の正義を確立してから来い。

——街の巡回、孤児院へのボランティア、ガネーシャのとのこと協力して時折警備員、幅広い技、戦闘に限らず出来ることを増やし、かつ戦闘能力は高く。四年以内にレベル3まで上げてこれらをマスターするなら文句無しだな。じゃないと足を引つ張るだけだ。

前者は男性に、後者は主に女性に。ファミリアトップ2の厳しさを持つ輝夜とライラコンバージョンによる面接での見極め。これにより全ての冒険者は落ちている。改宗組は基本的に

都市外からの申請が多く、その殆どはレベル2以下。で、外でのランクアップというのは迷宮都市に比べてかなり厳しく、四年以内に条件をマスターしつつレベル3まで上げるといのはかなり無茶と判断されてしまう。

そういった理由で、主に都市外から来て冒険者になる人や改宗する者は弾かれる。無論ここは迷宮都市。探せば第二級冒険者はそれなりに居るし、正義の派閥へと入りたいと思う者も多いだろう。

しかし、意外な事にもそれを望む冒険者はいない。ハードルが高いとか主にダンジョン探索をしたいからとかではなく、それぞれが願望を胸に抱いているからだ。

そう、願わくば。またあの正義の派閥に、英雄の姿を置きたいと――。

白髪と紅眼は英雄の象徴であり、鐘は勝利を示す栄光の音。それが迷宮都市の共通認識であり、近年の誇りだ。そう、故に。

「――おい君ッ、ウチのファミリアに入らないかい!？」

「いや俺だ、俺のファミリアに入らないかッ!？」

「ふふふ、この結末は神のみぞ知る……だが神が関与すれば全ては崩れ去る！ その白髪少年、我がファミリアへ！」

英雄と瓜二つの少年に關心が集まるのは必然的だ。少年は周りの猛烈な勧誘にオロオロしている。最初は伯母の言葉もあつてフードを深く被つていたのだが……深く被つていた事が災いし、喉が渴いた時にフードを少し上げて水分を取ったら、白髪がチラリと周囲の目に映つてしまったのだ。

そして不幸な事に、慌てて路地裏へ駆け込もうとすると強力な風が彼を襲う。駆け込もうとしていたからフードを掴む暇はなく、バツと顔が現れた。そしてそこには英雄と同じ姿。当然注目は集まるだろう。

ただ、その少年がかつての英雄でない事は明白だった。幾ら恩恵が若さを保つ事を出来ると言つても、未成熟のまままでいられる訳ではないから。かつて童顔だった英雄は、七年も経てば青年と呼んで良い年齢となる。少年とは呼べない。ただ、目の前の彼は真正銘、あの時の英雄と全く変わらない“少年”の姿。

故に多くの人は別人として彼を見て、しかし白髪紅目というかつての英雄と同じ容姿を持つ彼を縁起が良いと認識して勧誘している。
その上でだ。

「少年！　名前は何と呼ぶんだ!？」

「べ、ベル・クラネルですッ!？」

神威と迫力に圧された少年は思わず名前を名乗ってしまった。ベル。姓は兎も角、その名前はかつての英雄が偽名として名乗った名前。正確には英雄自身が偽名と明言した訳ではなく、アストレア・ファミリアの主神、女神アストレアが偽名として明言させた名前だ。故にその真名を知るのはアストレアただ一柱……とされている。

勝利の鐘の音を鳴らした『英雄としての名』には相応しいし、かつての英雄が多くの名を有していた例はある。だから特には疑問を抱かれていない。ただまあ、この場に於いては『英雄の名前』というのが重要であり、姓に関しては特に疑問視されず。

「よっし連れて帰るぞー！ 攫え攫え！ 来たばっかなら恩恵は無いはずだ！ レベル2の力もあれば行けるだろー！」

（誘拐!? う……いやでも、レベル2なら何とか）

ベルの伯母は言っていた。「オラリオの連中の勧誘を受ける真似があれば、追い払え。奴らはゴキブリみたいな生命力だから死にはしない」と。

装備はある。ただ獲物を使うのは傷付けさせるのと同意だから、素手で払ってなんとか逃げ出すのが吉か……。そう思考して脚を一步下げて跳躍する準備。しかし。

【福音】
ゴスベル

一つの詠唱が聞こえた途端、ベルは反射的に耳を塞ぎ伏せた。聴き慣れた超短文詠唱。ただ聴き慣れた詠唱より少し遅めに紡がれた詩は、ベルの周りに群がっていた多くの神、冒険者たちを一網打尽に地に平伏させる。

倒れ伏す多くの神、冒険者達の奥に立つただ一人。銀髪の女性を見て、ベルは嬉々とした表情で近付いた。

「おぼ——」

ドゴオツ——と、とても人から鳴ってはいけない音を鳴らしながらベルは倒れ伏す。折角魔法を回避したのに無念。だが自業自得である。

ピクピクと全身を痙攣させるベルに、銀髪の女性は一言。

「私の事は……」

「お義母さん……！」

よし、そう女性は肯く。

「この数日で鈍った……なんて事はなさそうだな。安心した」

「……いやまあ、8歳の頃から受け続けてたら流石に反射的に」

「愛故だな」

「身体に染み付いた恐怖だよ」

うんうんと肯く義母に対してベルは半目で見つめつつ、周りに視線を移して問い掛ける。

「これ、大丈夫なの？」

「ん……安心しろ。レベル8へと至ったお陰で、シレンティウム・エデン【静寂の園】による魔法威力削減効果

は飛躍的に上昇させられた。精々三半規管が揺れた程度だ。簡単に言えば酔ってるだけだな」

そう。オラリオ唯一のレベル8。アストレア・ファミリアに身を置いているのは、ベ

ルの伯母。アルファイアだ。かつてヘラ・ファミリアに所属していた才能の権化。一度悪としての立場を経ていた彼女だが……同じく悪に位置していた【暴喰ほうしょく】と共に、再度オラリオの冒険者として活動している。

アルファイアは一息。

「さて、では私のファミリアへと行こうか」

「ふふーん、漸く『私の』と言えるようになったわね！ いつもいっつも「私に正義は似合わない（シヨンボリ）」って言ってるから、団長の私としては嬉しいわー！」

「……シヨンボリはしていない」

ベルに手を差し伸べたアルファイア。その背後から聞こえてきた声に、ベルは目をパチクリとさせる。団長……アルファイアが所属しているファミリアの団長だ。つまり、これからベルが所属するファミリアの団長とも言える。

アルファイアは溜め息を吐くと、ベルの手を取って歩み始める。ベルは困惑しながら問いた。

「あ、ちよ……この人は？」

「気にするな、ただの雑音だ」

「え、音!? 生物ですらなく概念的な扱いなの!？」

耳障りだと言わんばかりに顔を顰めるアルファイアの言い草に、赤髪の女性……アルファイアが所属するアストレア・ファミリア団長、アリーゼ・ローヴェルはガンと効果音でも付きそうな表情でショックを受ける。

「……まあ煩わしいのは否定出来んがな」

「輝夜までえ……」

「わ、私はアリーのそういう所を気に入ってます……いやでも時折面倒なのは否定出来ない……」

「ちよつとは取り繕ってよりオン!？」

——あ、金髪エルフだ。ベルはリユウの姿を見ると全身を硬直させ、呆然と思考する。やがて顔を真っ赤にして慌てた。

リユウは不思議そうな表情でベルを見つめ、一步前進。ベルは一步後進。リユウが二歩前進、ベルも二歩後進。——避けられてる。何故だ。リユウはオロオロ、ベルは目

をグルグル。

アルフィアが一息吐くと、ポツリと眩く。

「……やはり性癖は矯正すべきだったな」

取り敢えず一発頭を叩いた。

争奪戦の結末

「……はい。改宗完了よ」

「ありがとうございます」

ベルは目の前の神、今日から自身の主神となる女神アストレアにお礼を言い、上着を下ろす。アストレアは一息。ベルの背中に刻まれていた刻印[□]を思い出して、ベルに向けて呟いた。

「それにしても驚いたわ。まさかゼウスから恩恵を受けていたなんて……」

「あはは……僕も8歳の時に聴かされて驚きました。お祖父ちゃんが神様なんて、そんな威厳全然感じなかったですし」

「……存在感じや無くて、『威厳』なのね。という事は相変わらず？」

「相変わらずの認識なんですわ……。はい。お義母さんに何度かセクハラを仕掛けて、

返り討ちに遭ってました」

「よく天界に還らずに済んだわ」

アストレアは呆れた様に溜め息。

確かにとベルは頷いた。壁にめり込んだり、森の中に放り投げられたり、水の中に顔を突っ込ませて頭を押さえ込まれたり……。最早神の力無しに神の領域にいるのではないかと疑う生命力だった。ベルは思い出を蘇らせながらしみじみ思う。

「貴方がレベル3へと至っているのは、ゼウスの恩恵と……アルフィアの訓練かしら？」
「はい。8歳の時から……。お義母さんには、「脚以外の才が無い」なんて断言されちゃいました」

アルフィアという才能の怪物は、（張り切りすぎて急がなければ）教える事に掛けても人並み外れた才を有している。それは一度見ただけで技術をトレースできる能力がある故の、圧倒的理解力から生まれる技術の理論構成把握。他人が出来るやり方を教えられないのだ。

だからアルフィアの特訓について来られるだけの胆力が有れば、一年でのランクアッ

プはかなり現実的な範囲となる。

しかしレベルは、アルフィアの特訓についていける胆力がありながらも、この五年間で上げられた成果は、ランクアップ二つのみ。強いて挙げるとすれば、後は一つの魔法と一つのスキルを習得した事くらいだろうか。

通常で考えれば、五年間掛けて漸く上級冒険者となる人物は多い。そういった意味では充分早いペースでランクアップは出来ているのだが……常にアルフィアという訓練相手があり、常に上位経験値を稼げる相手と訓練していながらと考えれば、遅いと認識しても仕方がない。

レベル2に至るまでに二年。レベル3に至るまでに二年。そして一年の時を経て稼いだ経験値は基礎アビリティに昇華されており、唯一「敏捷」だけはBにまで至っている。冒険者としての才能が無い訳ではないのだが、才能の権化とまで言われたアルフィアと比べれば天と地ほどの差だ。

「……取り敢えず、冒険者登録に行きましようか。リユーに頼むわ」

「へ？」

「さあさあ、入団した以上迅速に、よ」

リユーに頼んでベルをギルドにまで連れて行ってもらおう。……相変わらず出会った当初と変わららず、リユーと一緒にいると顔を真っ赤にしているが。ただまあ少しは前進したと言わなければならないか、同じファミリアに入る以上覚悟を決めたと言わなければならないか。取り敢えずは並び立つくらいは大丈夫になった。

アストレアは肩を竦めると、部屋にアルフィアを呼ぶ。

「……アルフィア、貴方はどうしたい?」

「どう、とは?」

「飛び抜けた敏捷と、満遍なく平凡な基礎能力値。貴方曰くレベル1とレベル2の最終更新時は、敏捷Sとその他B……同レベルを相手にする分には間違いなく強い部類に入る。ただ、スキルがサポーター向きだわ。これは貴方も知っていた事でしょう?」

そう。ベルに発現している一つの魔法と一つのスキル。正直に話せば、この二つは戦闘ではなくサポートとして使うのが一番効力を発揮する能力だ。

魔法は「キリエラル・ノイズ」^{エンチャント}。アルフィアの音への印象が強く現れ発現したと思われる魔法。これは万能型の付与魔法だ。その効力は三つに分けられており、『増幅』『強化』『遮断』それぞれの詠唱を放つ事で効力を発揮する。「九魔姫」^{ナインヘル}の持つ三段階に分かれた

魔法とは違い、三つの魔法が一つとして現れていると表現している。

そしてスキル【完全記憶】。アルファイアが訓練を施している時に、才がないと判断した彼女が放ち続けた「先ずは記憶しろ。相手の動き、相手の予備動作、体幹やブレや角度の全てを記憶し、自分に適応させろ。成長という部類で劣る以上、覚える事がお前の技術を飛躍させる」という言葉に従い、結果スキルとして発現した能力。

本来のアルファイアの意図とは異なってしまうが、このスキルはサポーターとしてあまりにも有能過ぎる。ダンジョンの構造はもちろん、時間やタイミングを正確に測れる能力の為、一人いるだけで攻略難度に差が出ると言っている程だ。

そして溺愛する義息子むすこともなれば、アルファイアは今までの訓練を「自衛の手段」と称してサポーターとして起用する可能性も頭にあるだろう。愛する息子の願いだ。強くなる為の手助けはするが……それでも死ぬ確率が高い選択を取らせるわけにはいかない。13歳の現時点ではかつての英雄よりは強いものの、これから先の成長力は間違いない。13歳の英雄よりも遥かに劣る。

それを把握したアストレアだからこそ問う。「貴方はどうしたいの」と。

「あの子への想いで、病気の効力を相殺するスキルを発現する程だもの。本当は危険な冒険はさせたくないでしょう？」

「本当ならば、な。だが冒険者になりたいと……全てを救える英雄の様で在りたいと願ったのは、他ならないあの子だ」

私の心配で夢を阻んで物扱いするつもりはない。アルファイアがそう断言すれば、アストレアは聖母の笑みを浮かべながら「そう」と相槌を打つ。

「ふふふ」

「……………？ どうした、急に笑い出して」

「いいえ。まさかヘラの眷属で、『才禍の怪物』とまで言われた貴方が、甥への可愛さでここまで人間らしい所を見せるのがね」

「……………神アストレア、一応私も人の子だ。人外みたいだと言われるのは流石に傷付く。その台詞は人外を喰らう様な元好爺の眷属に言ってくれ」

「あら、ザルドも可愛い所はあるのよ？ 貴方に負けてお酒を飲んで酔っていた姿はともね。ロキの介錯を頼まれた時はどうしようと思っていたけど、珍しいものを見れたからプラマイゼロかしら」

——唯一無二。オラリオに於けるレベル8はアルファイアのみだ。そんな彼女がレ

ベル8へと至ったのは、かつて戦争遊戯に於いて三つ巴の戦闘で勝利を収めたからに他ならない。

そう。実は三年前に一度、オラリオに於けるレベル7三人の中で誰が一番強いのか……という話題になり、悪ノリした周りの神が神会デナトウスの時に提案して通ってしまい、異例ながら対価は無しにアルフィア、ザルド、オツタルの三人による戦争遊戯が開催されたのだ。

その戦争遊戯に於いて、アルフィアはオツタルとザルドの二人を倒し……結果、レベル8へと至った。とは言え、二人に関しては本来であれば対策を持っていたはずのアルフィアの「音」に対して対策せず挑んだ戦闘だ。ファミリア単位で行おうものなら、アストレア・ファミリアの人数の少なさもあり、確実に負ける。

ただまあ三人とも露骨なまでの対策は立ててないフェアな状態で二人は負けたのだ。オツタルはフレイヤに膝枕をされるという珍しい光景があり（フレイヤ・ファミリア幹部だけが知る事実）、ザルドは感情的に豊穡の女主人で酒を飲み続けて、己の現主神であるロキ共々酔うという始末。シルに用事があつたりユーがその光景を見て、絶句し、私たちでは無理だと頼まれ、アストレアの神威で目を覚めさせた……というのが事の端末である。

聞いたことも見たこともなかった光景を聞かされて呆けていたアルフィアだが、その

説明を受けて、失笑した。

「この地上で最も強い胃を持つだろうザルドの酔う姿か。一度この目にしたかったものだ」

「傷口に塩を塗り込む様なものだから止めてあげてね？」

「……………善処しよう」

「了承じゃないのね…………」

まあとは言え、アルファイアも飲めないわけではないが、流石にザルドを酔わせるほど耐えられる訳ではない。そもそも手段が無いから、「やれない」と断言していいものがあるのだが。

——と、そんな談笑を二人が交わしていた、そんな時である。

「おいアルファイア！ いるか、居たな!!」あの馬鹿、登録したてのソロで深層までの救出依頼を受けやがった！ つか団長までソロで慌てて行きやがって——今はリオント輝夜が速攻準備して向かってるけど、アンタの方が早く着くぞだろ!!」

「…………この短時間で何をやっているんだ、あの馬鹿息子は」

ギルドまでの距離、ギルドで登録する時間などを考えれば、残っていたのは十分そこらだろうに……。そうやって溜め息を吐くアルフィアに、彼女を呼んだ声の主、ライラはギョツと目を開く。

「お、落ち着きすぎじゃねーか？ アレまだレベル3だろ？」

「……ああ、安心しろ。ベルにはダンジョン50階層までの情報は全て叩き込んである。生き残るだけならば簡単だ。明日には帰ってくるだろう」

つまり、生き残る為には有能なマジックアイテムやスキルを持っているのだろう。そう察したライラは一安心と言わんばかりに息を吐き、だがアルフィアから溢れ出る冷たいオーラにビクリと肩を跳ね上げた。

「だが、帰ってきたら説教だな」

「お、おお……」

——音の嵐の中で土下座させ続けて頭を叩いてやると言わんばかりの形相だけど

本当に説教で済むのか？ ライラは一瞬そう言いそうになったが、悪霊も恐怖で天に召されそうな庄を放つアルフィアに物言う勇氣は流石になく、南無三と両手を合わせた。

◇ ◆ ? ◇

「……ん？」

「ア？ どうしたよ、フィン」

「いや、親指が少々疼いてね。危険感知ではないようだけど……ああ、そうか。そういえば今日だったな」

「今日……？ アア、【英雄再誕^{グランド・ベル}】か。アタシにとっちゃ苦い思い出がな……」

薄紅の髪色をした女——かつて闇派閥として活動していたヴァレッタと話すフィン。【英雄再誕^{グランド・ベル}】というのは、かつてこの地に現れ暗黒期に事実上の終焉を告げた英雄を祝い、今日一日の間に何度か大鐘楼を鳴らすという……祭とまでは言わないが、そんなめでたい日。

顔を顰めて呟いたヴァレッタに、しかしフィンは困ったような笑みで答える。

「シー……そつちではないんだけど、まあ間違つてはないか」

「……？ おいフィン、チェックだ」

「はは、勝利が近付くと焦る癖は無くした方が良いと言つてるだろう？ はいチェック」

「げっ……」

「何処に動かしても、次のターンでまたチェックは掛けられる。後何手かあれば逃げようもなくチェックメイトかな？ さて、今日も書類整理を頼むよ、ヴァレッタ」

「チツ……あいあい。つたく、人使いの荒い勇者様だぜ」

フィンは駒を一つ動かし、先の展開を想像して終了を宣言。同じ動かし方に行き着いたヴァレッタは、これ以上は足掻きようもないのを悟つて駒を倒し、席を立った。

報告書類を手に取り確認しているヴァレッタを横目に駒を片付け、フィンは外を眺めた。

「“再誕”という言葉も、ある意味では正しいか」

一人の少年の姿を思い浮かべながら、フィンは笑みを浮かべながらポツリと呟いた。

◇◆?◇

「……来たわね」

「は……ベル・クラネルですか？」

「ええ。まだ淡く未熟で、定めた何かが無意識の状態だけれど……本当に、真つ白で綺麗な魂」

「……申し訳ありません。あの戦争遊戯で、俺が勝てていれば」

「いいのよ。他人の求愛よりも、家族愛が勝った。それだけの話よ」

それに、と。フレイヤは言葉を紡いだ。

「あの時の落ち込んだ貴方は可愛かったもの」

「……傷口に塩です、フレイヤ様」

へんなりと萎れた耳に強面の落ち込む表情。オツタルの姿に似合わない雰囲気、フレイヤは少女のようにクスクスと上品に笑った。

——かつての戦争遊戯は対価は存在しない、ただの最強決定戦。そう、表向きはだ。

悪ノリした周りの神達も対価には然程興味がなかったもので、取り敢えずお祭り騒ぎが出来るなら良いと気にしていなかったが、各ファミリアの主神達は裏で口合わせし、報酬を決めていた。そう、ベル・クラネル争奪戦である。

元々フレイヤがかつての英雄を手に入れようとしなかったのは、アストレアから直接「彼は未来から来ていて、いつ帰るかも分からない不安定な存在」だと知らされていたからだ。元々この世界にいるベル・クラネルならば、フレイヤが眷属に迎え入れても良い。とは言え子供達も気にかけているだろうから、自分も眷属に迎え入れるつもりだけだ。それがかつて釘を刺しに行つた時の『約束』だ。

それで負けたのだから仕方がない。何なら珍しい姿を見れたから機嫌が良いくらいだ。フレイヤは鼻唄混じりに窓から外を眺め、白髪の少年の姿を見つめて、名残惜しうに呟いた。

「ねえオツタル、ベルセウス【万能者】に頼んで彼そつくりのドール人形つて作れないかしら。着せ替え放題タイプの」

「……無茶です。社会的に死にます。フレイヤ・ファミリアが」

本物を問答無用に攫つて試さないだけマシになったのだろうか、オツタルは静かに

思う。

家族

ゴオン——大鐘楼が鳴り響く。都市に響き渡る、勝利の鐘の音。一年に一日、数回に渡つて響く英雄の跡。都市の人々はその腕に紅玉のブレスレットを付け、祈りを捧げる様に手を合わせた。

というのが昨日の出来事であり。人々は再びブレスレットを装着しながらも、都市に響き渡る、先日よりも小さな鐘楼の音を聞いて首を傾げた。【英雄再誕】グラント・ベルはあくまでも1日の出来事。連日で行う例はないし、少なくとも昨年までは一日だった。

そして何よりも、回数が非常に多い。本来であれば10回も鳴らせば終わる筈が、数えるだけでも20回は超えている。英雄が戦い抜いた期間と思えば連日でも納得がいくし、元々この大鐘楼は五分間の間無数に鳴り続けた音だ。多い分には問題ない。

ただ、この鐘の音を鳴らす事を担当しているガネーシャ・ファミアも、現在困惑している。鐘を鳴らす指示など出していないし、唯一やらかしそうな団長の妹も、現在は団員と共に行動している。

ガネーシヤ・ファミリアの団長、シャクティ・ヴァルマは主神に問いに行つた。

「ガネーシヤ、あの鐘は我々の所有の筈だろう。鳴らすな、とまではいかないが、鳴らすには我々の許可を取る必要がある。誰かに許可を出したのか？」

「むう……俺は出した覚えはないぞ！」

「ならば何だ、この音は……」

「……そうか！ この鐘は、ガネーシヤか！」

「違う」

ガネーシヤ・ファミリアの所有にある以上、ガネーシヤの眷属は自由に出入りできる手筈だ。他派閥に許可を出していないならば、眷属がやったと思われる。グランド・ベル「英雄再誕」が先日行われた以上、同じことはやらないだろう。眷属がやったならばガネーシヤを祝つてるのか——そうやって考えを巡らすガネーシヤに、シャクティは首を横に振つた。シヨンボリするガネーシヤを放つて置き、シャクティは思考。

（大きな問題ではないが……伝令も無しに行うのは困つたな。今からでもギルドに行つて、今回のグランド・ベル「英雄再誕」は連日開催とでも言うべきだろうか。でないと困惑する）

シヤクティは団員に留守を頼み、自分は護身用に武器を装備。ギルドに向かおうとホームを出て——そして妹、アーデイと会う。

「あ、お姉ちゃん……」

「……どうした、珍しく苦い笑みを浮かべて」

「あー、うん。この鐘の音の事でね。ちようど良かった。ギルドへの報告は済ませたから、行かなくて大丈夫だよ」

犯人がわかった？ ならば何故未だに鳴り響き続けているのか。流石のアーデイでもある程度の規則は守る。【英雄再誕^{グランド・ベル}】はあくまでも一日開催。犯人が分かれば止めるだろう。

ならば何故だと目で訴えれば、アーデイは頬を掻きながら視線を逸らして答える。

「えつとね……私達の所有している鐘の場所には誰もいなかったんだ。近付いても音が近付かないからなんとなく察してたけど……それで、音を頼りに原因の場所に向かつて」

「……ああ、もう読めた。ご苦労だったな、アーデー」

シヤクテイが溜め息を吐いてそう告げると、アーデーは苦笑を深めた。

「全く、一応は正義の派閥なのだと自覚してくれ……【静寂】」

◇ ◆ ? ◇

【福音】
ゴスベル
シヤット

【遮断】！

ゴオン——今日何度訪れたかも分からない、音の嵐。その中でベルは魔法を発動しながら両腕で顔を隠す。

小さい頃から今まで何度も経験した魔法だ。対処法はしつかりと把握している。幾度となく受け続けた影響で発展アビリティの【魔防】は既にGへと昇華されているし、何よりベルの魔法によって“音”に対する耐性はほぼ100%と言っている。アルフィアの魔法最大の効果である『脳を揺らし、鼓膜を破壊し、三半規管を惑わす』その全て

から守れているのだ。

ただし、そこから残るは単純な魔力。音という特性を無くしただけの、レベル8の魔力だ。例え発展アビリティで軽減されようとも、レベル3程度の耐久ならば容易く貫き、ダメージを与えるのは簡単だろう。頭なんかは直撃したら気絶するのは明白だ。

だからベルは腕で頭を庇い、ダメージを最小限に。腕にはローブを巻いてある。全身を隠せるだけの大きさだ。纏えば薄くて大した効力は発揮しないが、腕という一部分に限れば分厚さは出る。

何よりこのローブはアルファイアが調達した物の良い素材で作られた装備だ。それぞれの耐性に特化した「火精霊サラマンダー・ウールの護布」や「水精霊ウンデイトーネ・クロスの護布」程ではないが、それぞれの属性への耐性を保有し、かつ斬撃に対しても効力を発揮する。

とは言え、ある程度だ。強力すぎる攻撃に対しては簡単に負ける。しかし属性が消された純粋な「魔力」に対してならば、簡単に破れる事はない。

もちろん衝撃は腕に駆け抜けるが、何も対処せず受ける事に比べれば天と地ほどの差が現れる。痛みはあるが使う分には問題ない。

音の嵐を掻い潜ったベルはアルファイアの前に踏み込み、アルファイアは右手に持ったナイフに対して二つの指を出す。掴みの姿勢。それは既に知っている。踏ん張りは甘くなるが左足を地面から離して、右手のナイフは囨に蹴りを放つ。でも当然読まれる。そ

れも知っていた。

ベルは捕まれそうになるナイフを手放して投擲。そしてアルフィアがそれを掴むのを知っている。左脚を受け止めて手刀を首に叩き込むのも読んで、その次の蹴りも――

「う、ぐ……ッ」

「……一度攻撃を受けた時に思考を途絶えさせる癖を無くせ。でなければ次も当たる」

読めてはいても、その対応に身体が追いつくかどうかは別だ。アルフィアの蹴りを食らったベルは苦痛に顔を歪ませ、思考が止まる。アルフィアは次の攻撃を寸止めし、アドバイスを送る。

痛みや疲れで思考が止まるのは当たり前前の反応ではあるので、アルフィアの発言はかなり無茶振りとも取れる。しかし、痛みや疲れの中で思考できるのであれば、それは有利に持っていける一つの術となるだろう。

ベルは肯くと、再度ナイフを構えて。

「ベル――ッ!!」

真後ろから突撃される。背骨が折れたのではないかと錯覚するほどの衝撃。恐らく恩恵がなければ死んでいただろう勢いで飛び込まれ、ベルは顔から地面に突っ込む。

「ぶふえっ!？」

「あ、ベル……受け止めれなかった？」

「……しゅ、集中してたので」

こんな事もあつたなど、そう思い出すベル。体勢を仰向けにして、押し倒す様に地面に手を着く少女にベルは視線を向ける。長い金色の髪と透き通った瞳。かつて英雄に「加護」を授けたとされる、都市にいる四人のレベル7の内の1人。

「お久しぶりです、アイズさん」

アイズ・ヴァレンシユタインに向けて、ベルは微笑んだ——そして顔を真っ青にさせた。彼の視線の先にキョトンとした妖精^{エルフ}を発見したからである。ベルは慌てて釈明に入った。

「あ、ちつ、違うんですリユーさん！ アイズさんは何と言いますか、幼馴染っていつか！」

「幼馴染？」

というより、何を慌てているのだろうと。そういつた意味を込めて首を傾げるリユーに、ベルは続きを紡いだ。……頬を膨らますアイズを腹に。

「えっと、僕が8歳の時に、おば——」

バシンっ、と。拳で掌を叩く音。次に言おうものなら拳骨をプレゼントしようと言わんばかりのジェスチャーと視線に気圧され、ベルは冷や汗を垂らしながら喋る。

「……お義母さんが連れてきました。それ以降何度か会ってたので……ずっと一緒に居たという訳ではないんですが、幼い時からの知り合いという訳です」

「なるほど」

出会った時はレベル4だったというのに、レベルが上がる程に稼ぎづらいついて言われる上位経験値を稼ぎ、ベルがレベル3に至ったこの五年の間でレベル7に至った少女。それを思い返すと、本当に凄いなとベルは思った。

まあ二つの意味でベルのお陰ではあるのだが、当の本人がそれを知る由もあるまい。

「五年前、急に彼女が変わったのも領けます」

「……？」

「いえ、此方の話です」

リユーはアルフィアと同じくらい、現状を認知していると言っている。かつてアイズが本当に「人形」と化していた事も、英雄の事も。だからこそ推測できるアイズ・ヴァレンシユタインという少女の変化。

ランクアップ期間三ヶ月などというふざけた記録を残した理由は定かでは無いものの、恐らくアルフィアと同じく「想い」による——と、そこまで思考したリユーは呆れた笑みを見せた。

（例え道が違えても、クラネルさんはクラネルさんのようですね……。まあ大半は彼の

責任でしようが)

相変わらず人たらしだと、そう笑った。そんな笑みにベルが見惚れている事に、リユーは気付きもしないが。

「……エルフの耳って売ってるかな」

「え、何で急に怖い事言い出すんですかアイズさん？」

「だって……」

ジト目でベルを見つめるアイズ。その視線に戸惑うベルがアルフィアに顔を向けると、アルフィアは微かに思考。アイズの主神ロキと他の神との会話を思い出し、答えを出した。

「あるぞ、【戦乙女】ヴァルキューレ。確か……『こすぶれ』と言うものだったか。お前の主神が一枚絡んでる店に置いてあった筈だ」

「ロキに聞いてくる」

「うわっ……」

即座に起き上がり即座に去る。クールな外見とは裏腹な行動力の化身で天然な少女に、アルフィアはふと失笑を溢した。

「文字通り風の様に来て風の様去っていったな……。まあ、見てられん程に落ち込んでいた六年前に比べれば遙かにマシか」

アルフィアがその言葉を洩らすと、ベルはそれに同意する形で思い出す。そう。ベルが初めて出会った彼女はこんなにも明るくはなかった。まるで、一度見た希望から絶望を見せられた様な。そんな心の無くし方。仕方ない。アイズ・ヴァレンシユタインという少女は、かつての暗黒期に於いて唯一、救われたが見放された人物と呼んでいいのだから。

最初はその表情に戸惑い、容姿に身惚れたベルではあるのだが、それ以上に依存する様な形で抱きついてきた為、そういった感情は消え去った。あるべきでは無いのだと悟った。

良い関係か悪い関係はさて置き、寄り添っていないと壊れる人形に寄り添う様に、ただ近くに居た……。それが出会うの日。

「……それより【疾風】、何か用があったのではないか？」

「ええ。アーデイからの伝言です。「音を抑えてくれ」と」

「音？ ああ……紛らわしかったか？ すまない。私とベルの訓練は日課の様なものだから……」

「都市中に響き渡る程の大きさでは無いので、大きな問題にはなりません……私達のファミリアがファミリアですので、あまり迷惑にしない様にお願ひします」

「分かった。次からはダンジョン……いや、人造迷宮グノッソックスの方が良いか。其方でやらせて貰う。それでいいか？」

「申請さえ済ませれば問題ありません。鍵が無ければ開けるものでも……いやまあ、貴方なら開けかねませんが」

「……流石の私でも【ジェノス・アンジェラス】の使う時は考える」

人造迷宮に速攻で入りたいからと使うほど短気ではないぞと、そう言うアルフィア。心外だと言わんばかりに首を振ったアルフィアは訓練の中止を指示し、ナイフを納めたベルに向かって言い放つ。

「さて、ベル。昨日はダンジョンに入り浸りで行けなかったが……今日こそ向かうぞ」

「……………？ 何処に？」

「私とベルの家だ」

◇ ◆ ? ◇

北西と西の間の区画。其処に隠された教会へと訪れたベルは、アルフィアに問い掛けた。

「もしかして、気を使ってくれた？」

「ん……………？ ああ、そうか。いや、そうじゃない」

急に大勢の女性と半ば同居生活みたいな形になるのを避けてくれたのか。そう問い掛けるベルに、アルフィアは疑問を覚えるも察して否定する。それを思えば丁度良いかと考え、続きを紡いだ。

「単純に、お前とここで暮らしたいと思った……私の我が儘だ」

「……大切な場所なの？」

「ああ。妹の……お前の実母の、愛した場所だ」

「僕の……。そっか」

清掃は施し、資金はあるのである程度の建て直しもした。出来るだけ見た目は変えずに、生えていた雑草を取り、軋む扉も変え、六年前から迎え入れる準備を済ませている。実際に生活するのはここにある隠し地下ではあるが、見栄えを良くする分には良いだろう。綺麗な方が妹も喜ぶ。そう想い環境を整えた。

「……さて、今日からここが私達の家だ。そして家族の挨拶は大事だと、そう思わないか？」

「えつと……ただいま、お義母さん」

「ああ、お帰り、ベル。そして——」

アルフィアは日が差す教会の奥へと足を進め、目を開けて微笑み、言葉を紡ぐ。

「ただいま、メーテリア。家族の大切な場所を、私達の大切な場所にさせて貰うよ」

肉体改造

「……ふむ、やはり小柄だな」
「うぐっ」

身長162C成長期の中だと思われる為、原作一年前の現在では本来より3C低いベルの前に立つのは、210を超える巨躯ヒューマンの男性。茶髪に灰色の瞳、顔に複数の傷がある——かつてアルフィアと同じく、「悪」としてオラリオに立ちはだかったゼウス・ファミリアの生き残り。【暴喰ぼうじよく】のザルドだ。

ザルドは六年前の英雄の姿を思い返し、改めて思う。アルフィアに鍛えられている分、体格は悪くない。素質が極めて低い事を考えれば寧ろ出来過ぎと言っていいだろう。

だが、やはり小柄だ。それは決して欠点とは言わず、寧ろ俊敏性に優れたステイタス

を考えれば特化した能力だと捉えて良い。だがかつての英雄と違い、ベル・クラネルには大火力が無い。切り札と呼べる魔法もアルフィア程の威力を持つ短文詠唱では無く、魔法威力は底辺に等しいだろう。それは大型モンスターに対して不利なステータス。

モンスターを倒す手段は主に二つ。活動を停止させる程のダメージを与えるか、魔石を破壊するか。だが短剣では魔石に届く程のリーチがあるかは定かでは無いし、大きなダメージを与えるのは難しい。小型なら有利だが、大型には圧倒的な不利となるのだ。

「その辺りをお前に聞きたいのだがな、ザルド」

「難しい問題だ。体格に関しては生まれ持った素質がかなり影響される。無論多少ならば何とかなるが……」

「それでいい。要はベルが大型のモンスターに致命打を与えられる『武器』を持てれば良いんだ。こればかりは私^ずで解決出来るものでも無いからな」

「えつと……お義母さん、この人は？」

新しい家に案内された当日の夕方。来客があつたので対応し、案内したところ、自己紹介も無しにベルは「小柄だ」と言われたのだ。当然困惑は必須。ザルドとアルフィアは分かり合っている、ベルは知らない。何やら決まり事があつたようだが、何も知ら

ないベルは置いてきぼりだ。

アルフィアは遅れて気付いたように「ああ」と声を上げ、口を開き。

「あ、もしかしてお義母さんの恋人さん？」

「違う」

「やめろ、やめてくれ。その勘違いはダメだ、頼む」

答える前にベルは察したように言葉を紡ぐ。残念ながら大外れ。アルフィアは冷たい目で否定し、ザルドはベルの肩を強く掴み震えた眼で懇願する。

思わずベルが足を後退させて「そんなに強く否定する事？」と疑問に思えば、それを察知したように話し始めた。

「俺までヘラの所に出したとは思われたくない……いいか、俺はお前の爺と違って美人だからと見境無しに襲う男じゃ無い。人は選ぶ。あのメンヘラ女神の所にゼウスの眷属れが手を出したなんて思われたら流石に死ぬるぞ……!?!」

「(ズ)めんなさい?」

メンヘラ女神。ベルがアルフィアから直接聞いた、アルフィアの以前の主神の事だろう。しかしベルが聞かされたアルフィアの前主神というのは、アルフィアの妹……つまりベルの実母であるメーテリアの病気を治そうとしていた、優しい女神としか聞かされていない。

思わずベルがアルフィアに視線を向けると、その意図を察したアルフィアはプイツと顔を背ける。

「仮にも病弱の妹の面倒を見てくれた神だ。あまり悪い所を言うべきではあるまい」

「本音は？」

「……多くの情報を与えてヘラに興味を持ち、会いたいなどと言われても困る。仮にも眷属の子だ。ゼウスではなく私の子に……などと言われでもしてみろ。神老夫婦の決戦が始まるぞ」

アルフィアの癖は記憶にある。先程の言葉に嘘はないが、明らかに説明を減らしている発言だ。それを理解したベルは問い、コイツに隠し事は無理かと悟ったアルフィアは、隠す事を諦めて理由を話す。

……別に隠したからと言って後ろめたく思う程の事でもないのだが。要は『過保護』

という事だろう。ただ隠す事そのものは正しい。事実あの女神ヘラに眷属の子供なんかを紹介でもしたら、私が面倒を見ると言ってもおかしくは無い。

「……ベル、コイツはザルド。お前の祖父……ゼウスの眷属の唯一の生き残りだ」

「お祖父ちゃんの……？」

「まあ、そうだな。ある意味では“家族”と呼んでいいだろう」

「……えっと」

「ん、呼び方か？ 好きにしろ。呼び捨てでもさん付けでも構わん。お前が呼び易い名で——」

「じゃあ、ザルドおじさん」

「おじ……ッ!? いや、いや、そうだな……確かにもういい年齢か……51だもんな……身内的な存在にそう言われるのは結構くる……」

ベルの現主神、アストレアの眷属であるアリーゼが、現在ザルドの所属するロキ・ファミリアの眷属、ガレスに対して「ガレスおじさま」と呼んでるのを思い返し、そう遠くない年齢であるザルドも「そんな歳か」と遠い眼で天井を見上げた。

アルフィアは口を手で隠しながら笑う。

「さて、話の続きをしよう。ベルの体格は大剣を万全に扱うには少々小柄だ。使い方は教えたが、上手く扱うには体格リーチが小さい。それをお前が何とかする……と言ったが、手段を聞かねば私も安心出来ないからな」

「なに、心配せずともやる事は普段と変わらん。少し量が増える程度だ」

「……訓練に関してはかなり厳しくしているが」

「ああ、それに関しちゃ俺も文句なしだ。だから別の部分。身体を作り上げるのに大事な要素の一つ——」

ザルドは、これこそ自分の専売特許と言わんばかりの自信満々な笑みで、親指の先を自分に指しながら言い放つ。

「食事だ」

「モンスターを喰わしてお前の特性スキルを覚えさせるなんて言ったら、躊躇なく「ジエノス・アンジェラス」を放つぞ？」

「……普通の食事だ」

……確かに自分が言い放つ「食事」には信憑性が薄いかと。アルファイアの指摘に対して反論の余地なく納得したザルドは、あの決戦の場ですら「自分を巻き込みかねないから」と封印していた魔法の使用を躊躇なく宣言したアルファイアに恐怖を覚え、訂正した。

◇◆?◇

「……ちよつと気になるんだけど」

「ん?」

「ザルドおじさんの身体つて、普通の義肢とは違うよね。全体が……っていうよりも、所々足りない部位を繋ぎ合わせるような……」

かつて鎧に包まれていた身体は、現在公開されている。出会った当初から疑問に思っていたが、ここはオラリオだ。義手や義足の冒険者はそれなりに多い。故に問わずに居たが、改めて思えばザルドの身体は少々歪だ。

基本的なベースは人間の肉体に間違い無いのだが、例えば腹回りなんかは、シャツで隠されていても分かる「金属」の膨れ上がりが見えるし、肩や肘、他にも細かい部分的

な所が金属で出来ている。本来ならば腕一本、足一本といった丸々新しい義肢にする形を取るだろうに、ザルドはそうじゃない。

それを改めて疑問に思ったベルが、デリケートな問題かもしれないと思いながら小声でアルフィアに問う。

「俺に直接聞いても良いんだぞ？」

「うえっ？　　れ、レベル7の聴覚でも聞こえないくらいの声量のつもりだったんですけど……」

「ベル、そいつの聴覚……というか五感は、獣人のそれよりも優れたモノだ。六年前以前に比べればかなり落ちてはいるが、それでもロキ・ファミリアホーム内の事情ならば大体感じ取れるだろう。つまり団員同士のキャツキャウフも盗み聴ける」

「おいバカやめろ、それだと俺が変態になる」

「親は子に似る、と言うだろう？」

「……そうだった、ゼウスもロキもその方面に対してはダラしなかったな……っ！　だが断じて否定する。俺も精密な五感のコントロールが効くようになったからな。戦闘外では少し耳が良いだけだ。ファミリア内の情事など俺は知らん」

「ゼウスの時には聴いていたと言っている様なものだぞ、その発言は」

「……」

ザルドは視線を逸らす。アルフィアの最後の言葉を聞けばその意図は明白だろう。五感が鋭いのも困りものだ。再び遠い眼で空を見上げた。

「えっと、ザルドおじさん。その身体は一体……う？」

「……ああ、そうだな。何処から話したのか。まず始めとして、俺の身体は腐っ
てい
な」

「へ？」

「凶悪なモンスターを倒す為に毒を喰らった事で、対異常では防ぎきれない猛毒を持
た。ある薬のお陰で抑制程度にはなったが、そう長くは続かん。一度生かされた身だ、
何としても生きてやると思ったが……俺は一度死んだ」

「……へっ？」

死んだ？ え、じゃあここに居るのは死体？ 幽霊!? ……そんな風にベルが身体を

震わせながらアルフィアを見れば、そんな訳あるかと言わんばかりに失笑。しかし、死
“ の事実自体は否定しない。つまり死んだ事は事実であり、だが今生きていると言う事

は。

「そ、蘇生……？ でもそれって、古の賢者にだけ扱えるっていう……」

「その古の賢者だ。……とは言え、死んだ側から蘇生しては、どのみち侵された毒に再びやられて死ぬだけ。その前準備として「戦場の聖女」が肉体を作り直した。腐っていた身体の全てを取り除き、無事な部分を組成に新しく。再生できる部分は普通の肉体ではあるが、既に駄目だと判断した部分は義肢にな」

言い換えればザルドの状態は全身欠損に等しく、本来その時点で生きている方が異常なのだ。つまりこれは身体の入れ換え。人形に魂を移すにも等しい偉業。激痛を擁するどころか、死に至る、蘇生を前提とした人体修正だ。

賢者と聖女だからこそ可能とした、禁忌的な蘇生術である。

感覚的なモノも例外ではない為、悪食を極めた事で上昇していた五感は欠け、そのお陰で六年前に比べれば劣った感覚だが……レベル7である事を差し引いても、明らかに本来持つべきではない五感である事に変わりはない。

「……大変じゃありませんでしたか？」

ベルの記憶にある限り、義肢などを身体に慣らすにはそれなりの猶予が必要だ。レベル7ともなれば重要な戦力。使われる事は多いだろう。そうなると大変だったのではないかと問えば、ザルドは疲れた様に言葉を吐く。

「大変だった。一年じっくり掛けて身体に馴染ませたが、その時に限って『最強決定戦』などと馬鹿げた戦争遊戯の開催だ。【猛者】は無論、そこにいる【静寂】の相手を万全ではない身でだど？ あの時神に殺意すら覚えたな……」

「……お前の義肢には仕込みがあるだろう。万全では無くとも強さは然程変わらん」
「変わらないのが問題だ、アルフィア。病気を相殺した才禍おまの怪物えと、未だ強くなり続ける【猛者】の二人を相手に、今までと変わらない身での戦闘など話にならん。まだスキルの使用すら避けていたあの頃では、正真正銘基礎アビリティのみの戦闘に等しかったからな……？ 長期の戦闘を可能にただけで、神が言う『しばらくふれい』でもしている気分だった……」

大きく溜め息を吐けば、アルフィアは肩を竦める。まるで「病気を無にしたのはお前もだから大差はないだろう」と言わんばかりの態度だ。

しかしザルドの言う通り、アルフィアは病気さえなければ、最強と謳われたヘラ・ファミリアの中でさえ才禍の怪物と称され、かのレベル9にすら勝る可能性があるとも言われた人物だ。上位経験値さえ溜まれば間違いないくレベル9に至る唯一無二の存在。こんな彼女が病気を相殺するスキルを発現させた？ そりや今まで通りで勝てる筈もなかろう。

ランクアップ期間三ヶ月という世界最速を有する異常な成長力を見せるアイズが、レベル7に至ってから二年以上もの時が流れて尚ランクアップに至らないのは、明確化された超えるべき壁を越えられないからに他ならない。

レベル7である彼女が明確に格上と認識できる相手は^{アルフィア}レベル8だ。その為に何度も挑み続けているが……未だ一勝も出来ていない。それだけアルフィアは規格外の冒険者なのだ。無論、同等レベルだったのなら勝機はあつただろうが。

「俺としては、レベル8の本気の攻撃を一度でも躲したお前に驚いたぞ、ベル」

「あはは……おぼ——じゃなくて、お義母さんの動きに限って言えば、誰よりも見てきましたので。四手先くらいまでは見通せるんですけど……やつぱり基礎アビリティが足りなくて、一度でも躲せば当たってしまうんですよね。読めてる事を考えると、一度しか躲せないって言わざるを得ません」

例えば素質や才能があろうとも、レベル3とレベル8の差など誰が見ても一目瞭然だ。本来ならば一度躲せる事すら異常……一体どれだけ訓練を積んで慣れさせたのかとザルドが視線を向ければ、アルフィアは考え込む仕草を取り、やがて視線を逸らす。これは教えたくないというより、覚えてないから教えられないと言わんばかりの態度だ。つまり、数えきれない程。ザルドはドン引きである。そしてそれについて行った少年にもドン引きである。

「……ん、着いたな。相変わらず賑やかな店だ。……女将の事もあるし他の酒場ほどではないが……ん？」

『豊穡の女主人』……アストレア・ファミリアのよく通う店って聞いたけど」

「アストレア・ファミリアに限らず、ロキ・ファミリアやフレイヤ・ファミリア。一定収入のあるファミリアが良く宴をする店だ。……どうしたザルド、そんな鳩が魔法を食ったような顔をして」

「お義母さん、それ鳩が死んでる……」

アルフィアが『豊穡の女主人』という店についての説明をベルに対して行くと、凄く

苦い顔となったザルドに疑問を覚えて問い掛ける。間違つた慣用句をベルに突っ込まれながらも疑問はそのままで。ザルドは少しの間思考すると、ベルとアルフィアに向き合い、問い掛けた。

「店、変えてもいいか？」

「……満員だったか？」

「いや、そういう訳ではないが……」

「ならば構うまい。ベルも良いだろう？」

「あ、うん」

「【小巨人】、お邪魔する——」

アルフィアが扉を開くと、其処にはベルにも見覚えのある赤髪の女性が、腹を抱えて笑っていた。

「あはつ、アハハハハハッ！ カツコよ！ 女主人で女性店員の多いお店の中で凄くカッコいいし似合ってるわ、【女神の戦車】！ 裏方なんて勿体ないから表に出ない!? 絶対モテるわよ、女性人気急上昇間違いないわ！ なになに、今日は妹さんにでも誘

われたの？ それともフレイヤ様からのお願い？ 自発的？ 期間限定なんて勿体ないから定期的に働きに来てもいいんじゃない？ どうアーニヤ、今度からも彼をこの店に——」

「お邪魔した」

バタリ。扉が閉まる。

.....

「ベル、今見たものは忘れてやれ。それがあの猫人の為だ」

「え、何で？」

話に聞いていた、都市内に存在する四人のレベル7の内の一人。アレン・フロームル。確かに有名な冒険者が此処で働いている事にはビックリしたが、それは良い事で別に忘れる必要も無いのではないか。寧ろ知り合いの赤髪アの女性リのはつちやけた姿の方が記憶から消したいんだけど。

そう言わんばかりの困惑した顔でベルがアルフィアに言い返せば、アルフィアは同情するように呟く。

「お前が見たのが少々な……」

「……?」

ベルが疑問の表情を浮かべると、問い掛ける暇もなく扉が開き、鬼の様な形相でアレンが飛び出して来る。

「テメエ兎野郎っ、表に出やがれ！」

「ここが表ですけどツ!」

——知り合つてすらいなかった筈なのに、どうしてここまで殺意を向けられているのだろう。アルファイアの言葉や先のアリーゼの件もあり、ベルの頭は疑問で塗り潰された。

家族愛

「……」
「……チツ」

——いきなり睨まれ凄まれブチ切れられ。初対面の相手にそうまでされる理由があるのだろうかと思ひ込んでいたベルだが、真正面に対峙すれば、暫くの沈黙の後、舌打ちをかまされる。

ベルが困惑していれば、アレンは手に持ったお盆を肩に押しつけ、クイツと店の方に顔を動かした。

「飯食うんだろ？ さっさと店入れ」

「……貴様がいるという事は、ロールプレイ気取り小娘もいるのか？」

「……あの方はいねえよ、音女。あの方は。オレはあくまでお願いで来てただけだ」

「ああ、なら問題あるまい」

先までの気迫が嘘の様に——いや全く消えたとは言いが、少なくとも先程までの怒りに似た感情は見えない。何より、アルフィアとアレンの会話。『あの方』というのは一体誰なのか。

ベルの中に様々な疑問が浮かぶが、アルフィアが店の中に入っていくのを視界に捉え、慌ててザルドと共に入っていく。

「やーやーベル君！ いやー、みつともない所を見せたわ！ 中々に珍しい姿だったからね！ あ、女神ヴァナ・フレイアの戦車も悪かったわ！ 凄くかっこいいから安心して——あれちよつと待って、何で離れてくの？ アルフィア？ 何で自分の子供を守る様な、「見えてはいけません！」的な感じにベル君を引っ張っていくの？」

「正にその通りだからだが」

「酷い!?!」

「ぐうの音もでねえ正論だろうが」

「ガーン！ そんなあ……」

わざとらしいというか、敢えてやっているというか。大部分は本音である事に間違いはないのだろうが、オーバーなりアクションというべきだろう。ベルは苦笑しつつも、アルフィアとアレンの言葉は否定しない。

「アリーゼさん、ファミリアの皆さんは？」

「ん、今は私だけ。みんな休め休めって言うから、折角だしリオンが通ってる店に来たのよ」

「……追い出されたんですか？」

「あれ、なんか実力面の信頼が底辺まで落ちてる……？」

「現状を見る限りでは正しい評価だな」

「あー、それらしい所見せれてないもんなあ」

いや、実際のところアリーゼの腕が確かなのは間違いない事実だろう。最低限とはいえ冒険者の才があるベルは理解している。アイズやアルフィアはあれど、10年もしない間に第一級冒険者にまで上り詰めた実力は本物だ。

とは言え、団員から呆れられたりしているのを見る限り、『頼り甲斐のある感じ』は然程無い。その点で言えば鼻根目を抜きにしても義母アルフィアの方が遙かに上である。

ベルの率直な感想としてはそれだ。アルフィアがベルの思考を読み取った様に言葉を紡げば、アリーゼは「否定出来ない」と苦笑した。

「……だがベル、こんな人物でも私の団長に足る器はある。それが私がこのファミリアに籍を置いている理由でもあるからな。少なくとも、ただの雑音だと一蹴する事は出来ない」

「デレた!?　ねえねえベル君聞いた!?　今完全に逃れようもなく目の前でデレたわ、あのアルフィアが!」

「え、僕には会った時から結構優しく微笑んだりしてくれますけど……」

「くうつ、マウントを取られる……!　でも家族愛てええを邪魔する事は出来ない!!　……私って結構お邪魔虫なのでは?」

「てえてえ……?」

神が偶に放つ意味を把握できない言葉の一つ。交流のある神から教えて貰って使っているが、意味が伝わらない相手には安易に使えないものだ。まあ教えればいいだけはあるが……初見時に伝わらないのは中々悲しいものである。覚えれば使ってみたいと思える言葉は沢山あるので、折角のベルのスキルを利用して覚えて貰おう。アリーゼ

はそう思考した。

哀れ兎。ここにアリーゼの犠牲者がまた一人。

「ここでは平等にお客様、ですよ。アリーゼさん」

「うう……私の味方は貴方だけよ、シルちゃん……！」

「あはは……」

割とガチで「去った方がいいかしら？」などと考えていたアリーゼを見抜いたのだから。さり気なく近付いた薄鈍色の髪と瞳を持つ店員……シル・フローヴァは苦笑しながらアリーゼに告げる。

……本当にアルフィアが認める程の団長に足る器はあるのかと。ベルが疑問の表情を浮かべながらアルフィアを見れば、彼女は肩を竦める。まるで言葉ではなく「これから見極めればいい」とでも言いたげだ。

対象にザルドはベルの頭をポンポンと叩きながら、明確な理由を話す。

「ベル、オラリオの『英雄』の話は聞いているな？」

「あ、はいっ！ 都市中に鐘の音を響かせ、ただ一人の犠牲も出さずに争いを終わらせた

——あの大英雄アルバートと並び立つと言われている『最後の最初』を担った英雄、ですよね!」

「……」

ベルの返答に対し、ザルドは応えずに真顔のままアルフィアに視線を向ける。ベルが疑問を覚えながらも、自身の目指す憧れについて聞かれた事に対しキラキラとした瞳を注いでいる中、二人は視線だけで会話をする。

——盛ったか?

——少しだけ。

——少しだけ?

——……かなり。

——前半部分は間違いなくそのままだから否定しづらい。

——すまない。

——あの女帝レベルが歯も立たなかった黒竜の片目を潰した男と並び立つは流石に言い過ぎだ。

——いや、実際黒竜にダメージを与えかねない技で神を取り込んだ神殺しのモンスターを倒した。嘘はついていない。

時間にして約3秒。賑やかな周りとは対照的な静寂のその間を過ごせば、ザルドは一息。

「ああ、その通りだ。そしてただ一人の犠牲者も出さずに終わらせたと言う事は、〃悪側〃であつた者達をも含む言葉。……英雄が行なつたのは『犠牲を出さずに終わらせた』までであり、その後は居なくなつてしまつたからな」

「……………」

「悪が悪である事には変わりはない。本来であれば居場所など存在する筈もない。……そんな悪に居場所を作つてくれた筆頭が、アリーゼ・ローヴェルだ。他にも理由はあるが……まあ、だからこそ信用出来る人物と思つてくれればいい」

実際、姿や音を消せるわけでもないのにソロで深層まで来れる能力は相当だし、少なくとも〃嫌〃と思えるような性格でないことも確かだ。人間性が出来ており、ベル自身気を使わない様なやり取りをしている。砕けやすい、本心を出しやすい、という言葉が似合うだろう。

なるほど、と。ベルがそう領けば、ザルドは「取り敢えず席に着け」と言つた。ベルはハツとする。目的を完全に忘れていた。豊穰の女主人に来たのは食事を摂る為だ。

ちやつかりアリーゼも混ざりつつ、四人席に座れば、シルがメニュー表を持ってベルの前に置く。

「初めまして、ベルさん。アルフィアさんからお話は聞いております」

「えっと、お義母さんは何を……？」

「ふふ、私が言ったら報復を受け兼ねませんので」

何処か含む様な言い方。ふわふわとした、不思議な人物だ。

ベルがメニューを見る横で、アルフィアは目を細めてシルを見つめ、シルは冷や汗を流していた。

◇◆？◇

「ベル、取り敢えず数日経ったが……資料には目を通したな？」

「はい」

資料——ファミリアに入って初日。は深層即行き救出依頼事件があったので、その

次の日。ベルはアストレア・ファミリアがやるべき事について詳しく記載されている資料を貰っており、以降睡眠などに目を通して、完全記憶スキルの活用によって全てを覚えた。

一応アストレア・ファミリアは「探索系ファミリア」に分類されている。その上ファミリアのランクは高く、遠征を頻繁に行わなくてはならない。一応ギルドが融通を効かせてくれているので、ロキ・フレイヤの所程ではないものの、その分都市の警護には力を入れなくてはならないが。

輝夜の問いに対し、ベルは頷いた。

「ダンジョン探索に関しては個人の依頼次第、基本的にファミリア内の人物と二人以上で行くようにする事。それ以外の制限は無し。遠征は参加厳守。で……都市警護は治安維持を努めるファミリアとの協力で行う事。これは遠征時にも団員を互いに貸し借りする為……ですよね？」

「そうだ。治安維持にはギルドも積極的だからな。受付にでも言えばフリーの冒険者やサポーターは幾らでも見繕ってくれるだろうが……実力があり、分かっている奴の方がベルもやり易いだろう」

「……えっと、輝夜さん。デカデカと『ただし必ずファミリア内の人物が一人側にいる事』って、元々の資料に追加された様な書き方をされていたんですが……これって？」

全く淀みなく、下手に文字の大小が分かれていない資料の文の中で一つ、大きく追記されていた注意書き。違和感がある書き方だ。それをベルが問えば、呆れた溜め息を吐いた。

「貴様だからだ、ベル。初日の件をもう忘れたか？」

「うっ……いえ、はい。覚えています」

「言わばストツパーだ。私達は理解しているが、他派閥はそうもいかん。突発な自己判断だけで動かされては困るからな」

「……」

「不満か？」

「いえ。ただ……判断が遅れて、命が零れ落ちて。それで憧れの英雄が紡いでくれた死者の出ない物語を壊してしまつたら……僕は、一生後悔すると思います」

「……」

——なるほど、重症だ。憧れが強いという話ではない。もはや強迫観念にも似た考えだ。何より定まっている筈の目標が見えていない。かつての英雄との明確な乖離点。

願いではなく、強迫観念。

輝夜は目を細め、ベルを見つめる。

（無意識の願い……？ 持っていていようが意味のない願い……憧れ……ベルの原点。誰かを救う、隣に立ちたいという意思。そこに違いがないのであれば……救いたいと思えるだけの力を付けたいが、そう思うだけ無駄だから無意識に落とし込めた願い……という事か？）

つまり。そう結論を考え、首を振って否定する。指摘した所で、現在のベルの実力である以上は意味がない。

ベルの言葉に対する返事を、輝夜は紡ぐ。

「随分と上から目線だな？」

「え……」

「心配するな。新人冒険者を除けば、簡単には死なん。何せ奴らは生への執着が凄まじく、そして同時に誰かを犠牲にする事を拒む。そもそもの話、何百、何千という冒険者達を私達だけで死者0に抑えられる筈ないだろう？」

言われれば当然である。階層毎にバラけはするが、冒険者の基本的な探索場所は下層まで。最低でも25階層の範囲があり、一階層毎の広さは馬鹿に出来ない。特に中層からは。

そんな中を十数人……治安維持を努めるファミリア全てを合わせて数百の冒険者が居ようと、確実にカバー出来る範囲ではない。つまり、それだけ冒険者の質が高いという事。

『急がば回れ』だ。誰かを救ける間に自分が死んでは元も子もあるまい。救けられるまで粘っている事を信じろ。アルフィアも言っていたんじゃないか？「奴らはゴキブリみたいな生命力だから死にはしない」……なんて事をな」

「……あー」

言っていた。あくまで勧誘を断る為の防衛手段として遠慮しなくて良い免罪符みたいなモノとベルは認識していたが……本気で言っていたのか。冗談かどうかの見分けが付きにくいと、ベルは苦笑した。いや、普段ならば見分けが付いただろう。アルフィアの表情の変化は全て記憶している。オラリオに行けるといふ緊張感があつたベルの

ミスだ。

緊張感が解れたのが目に見える。輝夜は一息吐き、席から立ち上がった。

「今日はこれから軽く街の巡回だ。ついでにベルの他派閥との交流も図る」

「えつと……ガネーシャ・ファミリアの人達、ですか？」

「いや、生憎と今回の遠征時期はお互いそう遠くない。今回に関しては派遣無しだ。シャクティの所よりは他との交流を優先的にする。鍛冶ファミリア、医療ファミリアを巡って、必要な物品の在庫確認。それと、今回主にサポーターとして遠征に加わってもらう——」

ベル・クラネルという存在に見初められないか。ある意味では女神フレイヤと共通する『魂の見定め』という点で心配はあるが、流石に身持ちの硬さで有名な処女神ともなれば自重はするだろう。

……いやしかし眷属も煽るしな、普通に丸くなってきているしなど、そう葛藤を抱きながらも、以前からの約束故に今更反故にする訳にもいくまいと、そのファミリアの名を口に出す。

「アルテミス・ファミリーアとの交流だ」

和の頂点

——アルテミス・ファミア。

狩猟と貞潔を司る神が主神のファミアであり、2年前まではダンジョン都市の外を徘徊しモンスターを狩っていた、都市外のファミアだ。絶対貞潔を誓い処女性を決して失わず、自ファミアでの男性との交わりを是とせず、男禁制。もちろん他派閥での男女のやり取りなどを引き裂く様な、生態系を狂わせる事などは決してしない。ただ、貞潔を司る処女神アルテミスのファミアに入らなければ長期の間は処女を覚悟しろと言われる程の、いわゆる『超恋愛アンチ』である。

着替えを覗けばこめかみを矢で射られる。風呂を覗けば目を射られる。手を出そうものなら半殺し。全て冷たい目のオプション付き、対価は自身の怪我（ゼウス談）

そんなアルテミスがオラリオに属するファミアになったのは、またも英雄の仕業である。ただまあ彼女に関しては他の者が抱く『憧憬』の類とは離れていた。『英雄色を好む』という言葉がある。事実いくつかの英雄譚は女性との絡みを描写するものがあり、アルテミスはその辺りを好ましく思っていない。しかしオラリオに紡がれた英雄は、色

こそ垣間見せる描写はあったものの、決して手は出さずにオラリオを救った後に人知れず去って行ったと記録されている。

アルテミスは下界の自然や人々を愛し、気は強く、人を傷つけるモンスター相手には自分の身を前線に置いて戦う程に、『悪』への対抗心がある。英雄は『悪』を全て更生させて、その目的を果たせば去った。さながら『矢』の様な少年だと認識してしまえば、大の恋愛アンチでも好ましく思う他はない。

ただまあオラリオに來た理由はそれじゃない。単純に仕事が減ったのだ。その英雄誕生後、オラリオはこれまで以上に都市外での奉仕活動をしている。もちろん依頼という形は取っているし、資金的余裕があるファミリアには限られるものの、世界の中心と呼ばれるだけあって強い冒険者達が集う街。そんな都市が出来る限りの範囲の依頼を総取りしている。当然アルテミス・ファミリアの一番は激減した。

某万能者^{ブラッ}と賢者^{社員}が「どうして……」と呟くほどに稼働され、世界中に配置された眼晶^{オクルス}の改良魔道具によって、連絡だけならば直ぐにオラリオに届く様になっている。人を乗せての飛行が可能なモンスターの協力もあり、相当の範囲を担当できるのだ。

ともすれば、アルテミス自身もオラリオに属して依頼を受ける立場になるしかあるまい。

オラリオに生まれた英雄への興味と、人を助ける為の所属。これがオラリオに移住し

た経緯の全てだ。

そんな彼女は、現在タケミカヅチと共に眷属達の指導を行っていた。自分の身すら前線に置くアルテミスではあるが、オラリオ……いや、ダンジョンは一味違う。外にいるモンスターに比べると強く、その上規則としてダンジョンに入ることを禁じられているからだ。故に自分が出ることとなると、自身の持つ技と駆け引きを授ける事。

幸いにも眷属は第三級冒険者……つまりレベル2以上が多く、資金的に困る事は無い。天界での神友であるグータラ女神グータラを見習って動かない日を過ごしてみたものの、動かなければどうも落ち着かない。その結果、こうして眷属や他派閥の技術部分に自信が持てない冒険者たちを指導している。その際の男女接触は仕方がないと見逃しているが、不埒な下心でも持てば即座に放り出されるのがオチである。

指導者にタケミカヅチがいるのも、この男神を信頼してのことだ。他の神とは違って「アルテミスのレア姿をこの目に映す！」などと叫ばない。単純に子供を指導するだけだ。

——さて、そんなタケミカヅチとアルテミスが指導するアルテミス・ファミリアホームの庭に、輝夜とベルが訪れた。

「こんにちは、アルテミス様。タケミカヅチ様もいらつしやつたのですかね？」

ぎよつと目を剥いた。別人かと疑うほどの敬語使い。イントネーションは少々ベルや標準的なものと違いはあるが、浮かべる笑みと相まって貞淑さが現れている。

そんなベルの様子に気付いたのだろう。ニコニコと笑顔のままベルだけに分かる圧を掛け、それを受けたベルは察した。なるほど、猫被りかと。

「ああ、そろそろ来る頃だと思っていたよ。新人冒険者の顔合わせは以前からの約束だからな」

「む、アストレアの所に新人？」

「……タケミカヅチ、情報収集に疎すぎではないか？ いやまあ、ファミアの入団はそこまで騒ぐものでもないが……ギルドでは結構騒ぎになっていたぞ。白髪紅目の少年がアストレア・ファミアに入団したというのは」

「ほう」

「そして入団初日に深層まで単身で突っ込む阿呆だとも噂で流れていたな」

「うぐつ……」

やけに心配の声を掛けられた帰還時の状況を思い出したベルが気まずく思っている

と、輝夜が肩を竦めて苦笑。

「ええ、やらかしたお蔭で先入観は変わったでしょうが……そのベル・クラネルです」

「よ、よろしくお願ひします」

「……」

青髪の神にベルが頭を下げれば、アルテミスは黙ったままベルを見つめている。言葉なく視線を感じ続ける現状に疑問を覚えたベルは、頭を上げて困ったような表情で問い掛けた。

「あの……?」

「……どこか濁っている」

「へ?」

「いや、違うな。真つ白な魂を塗り潰す、更に強い光……。……なるほど、大変好ましいな。私は実物を見た訳ではないが、伝え聞く英雄の姿と一致する容姿。その上で『矢』の様な魂。うん、大変好ましい」

「あ、あの……?」

「アルテミス様。念のために申し上げますが、彼は私のファミリアの眷属です。引き抜きは許しませんよ?」

「……?」 何を言っている。元より私のファミリアは男敵禁だ」

噛み合っているのか、噛み合っていないのか。輝夜はアルテミスの発言に対して注意を促すが、若干丸くなったことで天然さが増したアルテミスは「在り方が好ましいと言っただけだ」と首を傾げる。輝夜はほっと一息吐き、眼を閉じた。

(あの男神の言葉に従うのは癪だが……今回ばかりは聞いて正解だった)

あの男神——ヘルメス曰く、ベルの『魂』は神特攻があるらしい。真つ白で綺麗な魂。その中でもより深く感知する美の女神や、貞淑を司るがゆえに感覚的に在り方を理解するアルテミスなどは、その魂に魅入られる。

なんせあの美の女神を狂わせるほどの魂だ。何年もお預けしていた分、アルフィアが勝利したことによる制約がなければ、ベルはこの都市に着くと同時に攫われていただろう。それほどまでの魂だ。恋愛アンチのアルテミスさえも虜にする可能性がある。貞淑故に、その身を運命に委ねると。

実際にはほどほどに丸くなって天然と化していたのだが。

「……！ 輝夜殿！ お久しぶりです！」

「ええ、お久しぶりですね。命。調子はいかがですか？」

「はい！ 貴方の背中を指し、精進しております！ 最近では上層最下層まで進めるようになりました！」

「……何度も言いますが、私を指さなくとも。【猛者】や【暴喰】、【戦乙女】に【静寂】。私よりも上の冒険者はそれなりにございますよ？」

「いえいえ！ 極東の者である自分にとつては、極東に於ける頂点たる輝夜殿は最たる目標です！」

命と呼ばれた少女は、目を輝かせながら力説。傍目から見れば分からない程度に輝夜の笑顔が引き攣る。言葉遣いに差はあれど癖は変わらない様で、ベルの『記憶』はそれを見逃さなかった。

ベルとて輝夜の強さは知っている。いや、正確には直接見た事はないが、“技”の類に突出している人物は歩き方や存在感というのに違いがある。足音は極限まで小さく、存在感は薄く。普通ならばしない歩き方——言ってしまうと人が普段、意識せずに行

なっている。「普通の歩き方」ではなく、「音を小さくする歩き方」というのを無意識でやっている。歩き方に違いがあれば普通は意識するのが当たり前だが、輝夜はそれを無意識に行えるほど染み込ませているのだ。

ベルとしては、「技」に優れた人物というのは自身の成長に欠かせない餌である。だからその違いを感知するために、普通ならば気付かない事に気づく様、アルフィアが施した。

極端に言ってしまうえば、ベル視点からするとアストレア・ファミリアの中では輝夜の強さが一番分かりやすい。だから輝夜が強いというのは理解しているし、同郷の人物が憧れるのも分かる。ただ輝夜からしてみれば、極東に限るとはいえ頂点というのは非常に困る。なんせ自身の評価がそのまま極東の評価になりかねない。だからファミリア内では言葉遣いを崩しているが、外ではこうして猫被りをする。

アルフィアから聞かされていた『小人族フィン・ディムナの勇者』の事を頭に浮かべ、彼は「そういう姿勢を見せる事で立場に相応しい人間だと認識させる」方ではあるが、輝夜は反対に「そういう立場に立ってしまったから相応しい姿勢を振る舞わなければならない」という事なのだろうと、ベルは納得した。

まあだからと言ってフォロー出来ることなどないが。ベルはあくまで新人である。

同郷の後輩に憧れの視線を向け続けられる輝夜から視線を外し、弓を構え的方向

て矢を射出する女性たちに移す。アルテミス・ファミリアは男性厳禁と言っていたし、恐らく彼女たちが遠征に協力する人達だろうと当たりをつけたからだ。

一連の動作で、一定間隔に真ん中を射抜く。距離的にはそこまで離れていないが、的は小さい。真ん中を射抜くのは難しいが、ここまでならベルも出来る。ただ、続く動作には目を見開いた。

そのステイタスを活用して、頭と足の位置を反転。バク宙する事で天地をひっくり返し、身体を空に浮かせたまま矢を放つ。

「すげー……」

単純に跳躍して——も大概ではあるが、それならばまだ分かる。だが天地をひっくり返し、そのまま矢を放つなど常軌を逸している。幾ら真ん中からズレてるとは言え、的に当たるだけでも一苦労だ。地面に落ちるまでのタイムリミット、空中であるが為に踏ん張れないからこそ表れるブレる姿勢、距離感などもはや当てにならない中で小さな的。それでのに当たるだけでも充分凄い。

母の教えで武器には一通り心得がある。主武器は短剣ではあるものの、剣・槍・大剣・刀・薙刀・斧・槌。そしてもちろん弓。だがあくまでベルは基本の使い方を学び、そ

れを問題なく行えるだけだ。今の様な体勢から精細さを欠かないよう使える訳ではない。

アルフィアからの学びだけでは理解出来なかったものを、今垣間見た。

「出来る事と使いこなす事はまた別だ」

「！」

「基本を突き詰めた者は確かに強いが、それでも応用を覚えねば、ダンジョン探索では“死”が待つのみ。どんな劣悪な地形や環境であろうと使える者こそが、その死を塗り替えられる権利を持てる。……無論、誰しも応用を効かせるなんて事は無意識のうちにやつてる筈だ。だから私が教えるのは、反射というプロセスの成功確率を上げること。第六感の強化だ」

後ろから聞こえた声にベルが振り向けば、アルテミスは歩き、置いてある弓と矢三本を手を持つ。何の為にとベルが疑問の表情を向ければ、アルテミスはふと強気な笑みを見せ、一本を真上に放つ。矢が空中でゆっくり向きを変えれば、アルテミスへ向かって落ちてくる。

反射的にベルがナイフを取り出して当たる寸前に矢の側面を叩き斬る構えをすると、

アルテミスは矢を一本つがえた弓を構えて、背中が地面に向かって倒れていく。足に力が入ってはいないが、その構えは決して揺るぎない。つがえた矢が放たれれば、先に射た矢の先端と衝突し、左右へと弾かれた。

だがそれで終わらず、倒れ込む身体を一つの腕を支えにバク転させて、再び足が地に着く。だがあくまで体勢が崩れないように安定させる為か、片足だけが先に。それと同時に地につけた手を即座に離して最後の一本を弓につがえ、もう片方の足が地に着くと同時に流れるように弾かれた矢へ向けて放たれる。それも当然のように落ちる矢へ衝突し、再び弾かれた。

ベルが一瞬の出来事に呆けていれば、アルテミスは一息吐いて「こんなものか」と眩きながら弓を置く。

「……………か、神様って、アルカナム神の力”を封じられてるんですよね？」

「うん？ ああ、恩恵や許可された力は別だがな」

「身体能力は一般人にまで落とされてると……………」

「無論だ。身体能力もある意味では神の力の一つだからな」

「……………え、片手でバク転……………視覚や触覚だって、レベル1の冒険者よりも劣ってる筈……………え……………？」

「……？ 片手でバク転など一般人でも出来るだろう。今の知覚能力は必要無い。視覚など無くとも、弾かれた方向さえ理解できれば予測できる。外れる可能性も少しはあるが、これくらいはタケミカツチでも行える筈だ」

——つまりなんだろう。この神は、最低でも恩恵をもらう事で莫大に上昇した身体能力がなければ出来ないことを、一般人の能力で行なっているという事だろうか。

いや分かっている。ベル・クラネルも大概の存在であり、今のパフォーマンスだつて直ぐにでもやろうと思えばやれるだろう。「完全記憶」のお陰とはいえ充分におかしい。だが先も述べた様に、これは恩恵を受けての身体能力が有ることが大前提。例え完全記憶能力があろうとも、ベルに一般人の能力で先の事をできる自信は無い。

ベルが引き攣った笑みを浮かべ、アルテミスが疑問の表情で首を傾げていると、ベルの肩に触れる者が一人。輝夜である。周りには聞こえない声量で語りかけてきた。

「ベル。アルテミス様は『使いこなす』という話をしていたが、最早その領域じゃ無い。少なくとも一般人の能力という枠で絞れば『極み』に達していると思え。神と人間の常識を同じにしてはダメだ」

「あ、あこ」

先程のパフォーマンスで、注目を集めたのだろう。輝夜もいつの間にか命との会話を終わらせて近くに歩み寄っていた。

そして困った様に首を傾げるアルテミスの下に、呆れた表情で近づくと女性が一人。

「だから言ってるじゃ無いですかあ、アルテミス様……。」「矢を射るのだから、それは必中」という言葉は下界じゃ通用しないんですって。……いやまあ鍛錬の結果として近づいてるのは間違いないと思いますけど」

「ランテ……。やはりそうなのか？　技術という面では頂点と名高い輝夜にすら苦笑されてしまったからな……。だが片手一本のバク転くらいは出来るだろう？　ほら、変に力を込めなければただ身体を回すだけだ。ただ支えにするだけだぞ？」

「その調整がひじよくに難しいんです。私達は恩恵があるから出来ますけど」
「……やはりそうなのか」

「ぐ……困り顔のアルテミス様も美しい……。つ。なんだか最近天然っぽさが増して無垢な少女らしさもあり、可愛さも垣間見える様な……。！」

よく見れば先程空中バク転状態での射抜いていた少女である。なるほど、非常識的

な動きをした本人も非常識だという事は認識しているらしい。それでも経験を積む事で出来る様になるといふのは人間の恐ろしいところだ。

ランテと呼ばれた少女の身悶えている姿、先の発言を思い、ベルは「なんだか既視感」と考える。当然である。ランテとベルはある種同族だ。神様の言葉で言えば『推しに對して限界化するオタク』である。もちろんそれを知る由は無いベルとしては、不思議と浮かぶ仲間意識に困惑していた。

【大和竜胆】、今回の遠征ではお世話になりますやまとりんどう

「いえいえ、サポートして貰うのはこちらの方です」

「最大でもレベル2の我々にとっては、深層域の体験は貴重と言えます。それに、我々では手を出し難いゴブニュ・ファミリアの弓も貸し出して頂けますので、その点を踏まえて受け取って頂ければと」

「……分かりました。ベル、彼女がアルテミス・ファミリアの団長。レトウーサです」
「べ、ベル・クラネルです。宜しくお願ひします」

「ええ、宜しくお願ひします」

——— そうですねば都市外から改コンバージョン宗でオラリオに属するファミリアへと入ったレベル

2以上の二つ名を持たない冒険者は呼び方は普通に名前なのだろうか、ベルはふと思った。

絶対悪（笑）

アルテミス・ファミリアとの顔合わせを終えたその後。当然サポーターだけを連れて深層への遠征など行くはずもないので、その他アイテムや武器整備などを担当してくれる「ディアンケヒト・ファミリア」や「ゴブニュ・ファミリア」へと訪れた。

武器作成に置いて「鍛冶」の発展アビリティの有無は大きく影響する為、ヘファイストスと並びある種ブランド物と捉えられる武器を製作するゴブニュ・ファミリアには第三級冒険者が非常に多く存在する。鍛冶師を護衛する必要があるが、流石に深層へレベル1を連れて行くのは万が一がある。最低でもレベル2以上が付くとの事だ。

遠征期間が非常に長く、特に下層以降に進む際は武器の摩耗が激しい。場合によっては鍛冶師の有無で遠征を左右する場合もある。鍛冶に遠征にと大変ですねと、そう呟いたベルはゴブニュ・ファミリアの団員に勢いよく肩を掴まれ「分かってくれるか!？」と言われる。

曰く、某道化のファミリアの一部団員にエゲツないスピードで武器を磨耗するアマゾネス達がいるらしい。それも特大剣や大剣などの、素材消費が嵩張り且つ作成に時間が

掛かる武器だ。遠征について行く分には気分転換にもなるし主に研ぎメインだから大丈夫、寧ろ地上にいる方が大変との事である。

曰く、そのアマゾネス達は英雄への強い憧れで、物語の終わりを締めくくった「英雄の一撃」を目指しているらしい。

曰く、「つまり英雄が元凶」。ベルはゴブニュ・ファミリアの人達への同情と共に、彼らの話す「アマゾネス」にシンパシーを覚えた。勢いで言えば気圧されるが、想いで言えばベルのそれも強い。

アマゾネス達と英雄について語り合ってみたいとベルが気分良さそうに呟けば、輝夜は苦笑。その思考の内容は「哀れリオン」である。恐らくそう遠くないうちに実現するだろうアマゾネス達とベルの邂逅。それを抜きにしても、これ以前で既に某最初の英雄アルゴノットフオロワーの憲兵とアマゾネスのやり取りでリユーは頭を痛めていた。

半ば興味を抱いてしまった為か、それほど詳しくないリユーを巻き込んだの英雄譚オタクの会話お喋りが行われている。それならばまだしも、詳しい事情を知らないアーディは兎も角、リユーが詳しく事情を知ってしまった「オラリオの英雄」の話を延々とされるのは、ボロが出ないか神経が研ぎ澄まされてる感覚がある。しかも「オラリオの英雄」に限って言えば、アマゾネス一人で済んでいた英雄譚話も大人数へと変化する。間近に居た事実を知っている為か、多くのアマゾネスがその英雄の話に混ざりに来るのだ。

で、特にアーディやリユーは直接観た冒険者。当時の話を訊こうとこぞつて集まる。ノリノリなアーディは兎も角、潔癖が薄らいでいないエルフにとつてそれは中々の苦痛。故の輝夜の同情である。

まあ同情するだけだが。

そして、今度はある種同一存在と呼んで良いベルも加わるとききた。リユーは頭痛どころか胃痛も追加されるだろう。これを哀れまずにはいられまい。

まあ、哀れむだけだが。

そして次に「ディアンケヒト・ファミリア」の——というよりは、主にアミッドとの会話。アイテムの購入は問題なく終わり、ベルとアミッドは対面した。そしてジト目で見詰めるアミッドにベルは動揺を隠せない。……アミッド的にはジト目というより観察だが。

「アストレア・ファミリアの新人は加入初日に深層へ単身潜り込む阿呆である」。かつての英雄並みの無茶をしてないか、そうやって怪我の確認をする為の観察ではあったのだが、そんな噂が流れていたのを思い出したアミッドは今度こそジト目を向けた。

が、無駄である事を理解しているので、溜め息一つ。輝夜に向けて「これまででは兎も角、これからはお願いします」と頭を下げた。ベルが首を傾げる中で、輝夜はその意味を理解する。言外に「その為に強くなったのでしよう？」と付け加えられ、強気な笑み

を見せて頷いた。

——さて、これにて顔合わせは終わった。全員概ね好意的だ。サポーターにアルテムス・ファミリア。武器整備にゴブニュ・ファミリア。この二つのファミリアが今回の遠征に於いて付いてくるファミリアだ。

過半数が同ファミリアのメンバーの必要がある遠征ではそれ程人数は多くない。アストレア・ファミリアから全員参加の十三名。アルテムス・ファミリアから六名。ゴブニュ・ファミリアから五名。計二十四名での遠征だ。

到達目標は深層49階層の一步手前。階層主バロールが存在する階層の一つ前、48階層だ。アストレア・ファミリアの最大到達階層は55。……まあ元ヘラ・ファミリアのアルフィア単体で考えれば60階層以降も加算して良いかもしれないが、それを抜きにしても今回の到達目標階層は低い。

本来ならば“未知”を開拓する為に、現最大到達階層の一つ先を目標にする筈。ならば何故、本来よりも8階層も上層の48階層を探索するのか。いやもう理由なんて明白である。『実力はあるがダンジョン経験皆無の新人を慣れさせる為』、それ以外に何かあると言うのか。

ベル・クラネルという少年は、現在レベル3……それも敏捷で捉えればトップクラスと考えて良い、実力で言えばそこらの冒険者よりもよっぽど強いと考えて良いだろう。

対人では。

しかしダンジョン経験皆無。幾らダンジョン経験豊富な才能アルファイアの権化から「知識」を授かつてるとは言え、それだけでは限界がある。到達階層を伸ばすのであればベルを外せばいいが、レベル3の冒険者を遊ばせるのは勿体ない。ならば今回の遠征にてダンジョンを経験させ、次の遠征で到達階層を伸ばす為に役立ってもらおう。これは、ベルのスキルを知ってるアストレア・ファミリア団員の総意だ。

放つておけば必ず無茶をする。かと言って厳しすぎる監視や保護は、少年の心が許すまい。故に監視下で充分な力を発揮してもらおう。それが今回の遠征の目標だ。

遠征出発は一週間後。それまではダンジョン探索は中層までに抑え、パトロールに専念。日によってアストレア・ファミリアの違う人物達と行なっている。やはり『正義の派閥』なだけあり、交流が広い。ファミリア同士はもちろんの事、一般人や神様に渡つて幅広く声を掛けてくる。

凄いファミリアに入ったモノだ——いやホントに何故こんなにも好意的なのかとベルは戸惑う。いや、アストレア・ファミリアに対しては分かるのだ。正確にはアストレア・ファミリアの団員は。しかしベルに関して言えば、まだ何の実績も無いただの団員に過ぎない。全く交流がないとも言えるただの newcomer だ。にも関わらず、ベル個人に対してとてつも無く好意的な人物……特に神物が非常に多い。

「……『オラリオの英雄』の容姿に似てるというのは非常に嬉しいですが、それだけでここまでチャホヤされるのは……ちよつと申し訳ないですね」

「ん？ んー……まあ貰えるものは貰っておきなさい！ その好意に応えられるベル君になれば良いと思うわ！」

やっぱ良い人なんだなど、現在パトロールを共にしているアリーゼの性格を再認識。……アリーゼ的には本心である事に間違い無いが、「神様達は分かって擲揄ってるわね」と苦笑気味だ。流石にアルテミスやフレイヤ程、魂の精密な感知をできる訳ではあるまい。それでも魂の同一性を見抜く事は出来るのだろう。だからかの英雄と、このベル・クラネルが本質的に同一存在であることを理解している。しかし同一人物でない事も理解していた。

全く厄介な存在である。娯楽に飢えた彼ら神々にとっては、英雄とベル・クラネルは間違いなく『最高の玩具』なのだろう。

「……ねえベル君」

ただ、まあ。

「ちよつと寄りたい所があるんだけど、行つてみない？」

「え？ えつと……パトロールから外れた場所ですか？」

「そうね、少しズレてるかも。けど正義の派閥としては決して外れた場所ではないの」

アリーゼもアリーゼで、彼女からしたらベルは面白い存在である事に違いはなく。

「孤児院、行つてみない？」

かの英雄の「結果」を見せるくらいは構うまいと、そう満面の笑みで告げた。

◇◆◇

「ほう？ へえ……？」

薄い笑みと興味深そうな細ばめられた目。「悪」をなぞっているような態度と表情。

黒髪に白いメツシユの入った、確かな「神威」を他神よりも控えめに持つ男神。

そんな神——エレボスにジツと見つめられ、ベルは直立不動となる。嫌悪を向けられてる訳ではない。かと言ってそれが好意という訳でもなく、この都市に来て初めての感覚。……いや、少し語弊がある。好意的な感情があるかどうかの違いがあるだけで、これは他の神と同じだ。「興味」の視線。ただエレボスは一切の感情がなく、単純にベルの在り方を見極めようとしている。

「ふうむ……同一存在ではあつても同一人物ではない。心が純真なのは同じ……だがかの英雄とは違う。何かから目を背けてるな。フレイヤが攫わないのも納得だ。ウォーゲーム戦争遊戯での約束以上に、単純に英雄ほど心を駆り立てられないって事か」

まるで理解できない神の言葉。同一存在と同一人物？ フレイヤが攫わないのも納得？ 一体何を言っているのか。ベルが困惑の表情を浮かべながらアリーゼを見れば、ニコニコと笑いながら静観している。

何が目的なのだろう。

「なああベル・クラネル？ 正義の派閥に入ってるお前に一つ問う」

——なるほど。それは当然の事だ。アリーゼからしても気になる事に違いはなかつたのだろう。エレボスが問うのは、もちろん。

「お前の正義は何だ？」

正義の派閥の一員が抱く正義。

「……誰一人死なせない、そんな英雄の意思を」

「へえ？ そりやつまら——」

「おい絶対悪！ 今日もやるぞ冒険者ごっこ！」

「おい絶対悪！ 今日もいつものように悪役お願いするぞ！」

「おい絶対悪（笑）、そろそろ働け！」

「——……ええ？ 今いい所だったろうよ。というかお前ら、絶対悪はやめ……つか

おい最後！ 孤児院の子供じゃねえな、神だなおい！ どさくさに紛れて言うな！

（笑） ってなんだ!？」

……シリアスな空気は一分と許されない。薄ら笑いの消えた男神の感情豊かな表情を見て、ベルは唾然と佇んだ。先程までの表情が演技だったのかと問いたくなる程の變化。

アリーゼは変わらずニコニコと満面の笑みだった。

一瞬にして孤児院の子供に囲まれ賑やかなになる。どうしたものかとベルが考えていると、背後からバタリと音が鳴る。扉が開いた音。だがそれ以降の足音が無い。気になつて振り返れば、そこには立ち止まっている目を見開く男。

恐らく冒険者だろう。それらしい雰囲気や纏う男性はベルと見つめ合つて数秒。そのステイタスを活用してか、一瞬にしてベルの目の前に現れて跪き、その手を取る。

「ああ英雄様！ 6年ぶりの再会、誠に嬉しく御座います！ 私あれから色々な事を試し……ああいや試しと言っても決して害意をなす気はなく、あらゆる“救い”に手を伸ばしておりまして、その途中世界からの許しを得たのか、想いを実現するように新たなスキルを会得する事でこの身の欠陥を克服する事が——」

「おい。おいヴィクトー？ 一応言っておくぞ。ソイツは別人だ」

「何を仰います神エレボス！ どこからどうみても6年前と変わらぬ姿！ ……変わらぬ姿？」

物凄い勢いで独白する男……ヴィトーに、ベルは狼狽える。全く身に覚えのない人物からの圧倒的な好意。いや、盲信とも言える態度。

そんなベルの困惑を理解したのか、ヴィトーは咳払い一つ。恥ずかしがるように顔を微かに染め、表情を整える。

「これは失礼しました。全く同じ容姿に思わず感極まってしまい……ああ、私はヴィトーと申します」

「べ、ベル・クラネルです」

「……神エレボス、これはもはや運命では？」

「いや、まあ……運命じゃね？」

何せ同一存在ではある訳だし。詳しい事情は話せないけども、エレボスはそう内心で付け加える。

アリーゼは依然ニコニコと満面の笑みだった。

「スカレット・ハーネル紅の正花」、一週間後はアストレア・ファミリアの遠征でしたね？ 是非とも私を

！」

「ええ、此処に来た理由の一つはそれだし、もちろんよ！ 回復役のメンバーは居た方がいいもの！ しかもレベル5！ こっちこそ願ったり願ったりだわ！」

「……えと、アリーゼさん。『願ったり叶ったり』です。それだただ願ってるだけです」

「そうとも言うわ！」

「そうとしか言わないですけど！」

何とも一気に賑やかになった。

それから孤児院の子供達と遊んだり、ヴィトーとの親交を深めたり、エレボスが他神に揶揄われたりと色々あり、パトロールを再開する時間帯に。眷属が一人だけなのにレベル5で、その人と協力関係を築けているなんて凄いですねとアリーゼに言えば、ここで初めて苦笑気味になる。

何故だろうと首を傾げるが、それを遮るようにエレボスが、最初の様な薄ら笑いでもべに話し掛ける。

「ベル・クラネル」

「え、あ、はい！」

「お前の本質は『矢』の様な真つ直ぐさだ。だから逃げている今じゃ開花しない。……まっ、魂の本質と意思をイコールにさせるのは難しいだろうがな」

「……？」

「かの英雄が遂げた偉業で、今の世の中は平和そのものだ。まだ時間はある。でも『約束の刻』は必ず訪れるだろう」

アルテミスからも告げられた、魂の話。それと意思との関係。オラリオに来てからは困惑続きだ。自然な様子で首を傾げているベルを、エレボスは目を細めて視線を射抜く。

「焦れよ、英雄の卵。未だ生まれぬ素質は、かの英雄と並ぶモノだ。万が一の時は——絶対悪が立ちほだかり、逃げる事を止めるだろう」

——その時までにはじっくりと考えろ、お前の正義を。

英雄候補

世界は広く、世間は狭い。矛盾しているようだが決して矛盾ではない、人によつては納得のいく言葉。

現世界最強という呼び名に相応しい義理の母親、アルフィアという女性を身近に持つベル・クラネルにとつて、冒険者という見聞はとても近しいものだった。ただ英雄譚を聞きかじるのではなく、彼女の冒険に想いを馳せる。

が、ここで一つ断言しよう。ベル・クラネルはアルフィアの冒険譚に自身を重ねる妄想、言わば共感性の余地など一ミリも無かつた。

やれ「両腕が折れながらもイグアスを殴り飛ばしたレベル3の時は今や懐かしい」など、やれ「発現したてのジェノス・アンジェラスを深層で試し打ちして階層を撃ち抜いて、女帝レベル9を生き埋めにしてしまい殺されかけたこと」など、やれ「目潰しされたけど無理やり目を開いて相手を恐怖に陥らせてしまったこと」など。

理解不能だった。それほどまでの理不尽の塊だった。何なら一番身近だろうレベル

3の経験ですら何を言ってるのか分からなかった。

そんなベルの困惑を理解していたのだろう。アルフィアは訓練を施す際に、自身の解を利用した戦闘方法をベルに教授する事はなく、基礎だけを叩き込んだ。理由は明白。覚えていようが動きを理解できねば動けないから。故にベルはアルフィアの動きを覚えていても、それを再現する事は出来ない。才能の権化と呼ばれるアルフィアに5年もの間師事されて尚レベル3である理由は、ベルの動きが基礎に忠実すぎるが故。相手の動きへの対応で応用は出来ても自身からの仕掛けで相手を崩すには馬鹿正直すぎる。

それはアルフィアも理解しており、ベルがオラリオへ到達するまでにアストレア・ファミリアへと伝えてある。それは巡りに巡り、やがては絶対悪の下まで話が及んでいた。

英雄の在り方を一番に理解しているのは、かの理不尽を英雄の一撃で葬り去った姿を知っている男神かれだったから。

「で、どうだったかしら？」

「どうだったかしら、と言われてもなあ……」

どうせ意見は同じだぜ？　と言うかのように苦笑するかつての絶対悪、エレボスに、

人の人生弄ぶなよオイコラ絶対悪様？ と良い笑顔で額に青筋浮かべながら喋るアリーゼに、さしものエレボスも身を震わせて謝った。アイズに剣を突き立てられるロキや、現能力は人の子と変わらないにも関わらずアルフィアに吹き飛ばされ続けるゼウスの二柱を頭に浮かべ、「最近の下界の子供って怖いな。神様泣いちゃうぜ」とエレボスはつい思う。

「うん、でもまあ通常の冒険で言えば間違いなく化けるな。考えてみる？ アルフィアが教えたのは基礎だけだ。今までは他の冒険者との接触はなく、つまるところ“技”の会得は殆どない。にも関わらず、その状態でレベル3に至った」

「基礎って、突き詰めれば怖いもんね。しかも“基礎”を教えたのは……」
「才能の権化。はは、言わば彼はレベル8基準の基礎を会得してるわけだ」

無論、基礎は基礎。技がなければ駆け引きの幅は狭くなり、相手に読まれやすくなる。それこそレベル8基準の基礎を習得しながらもレベル3の器に止まっている何よりの理由。

だが逆に言えば、技さえ覚えればレベル8の体捌きから繰り出される訳だ。予備動作や体の使い方は技のキレを左右する重要な要素。それをベルは世界最高レベルの状態

で整えている。

「【大和竜胆^{やまとりんどう}】に付き添わせてそれぞれのファミリアを巡ったのも、それが理由の一つだろうか？ 実際、さつきまでの一つ一つの足運びが静か過ぎた」

「……え、そうだったの？ 通りでなんか隣にいる気配が薄いなあって思った訳だ。なるほど」

「ありや……」

おいおい団長、と。アルフィアの案か、或いは輝夜の独断か。いずれにせよハウレンソウがなっていないと苦笑するエレボス。

「まあ要は、【英雄の一撃】をこそ扱えずとも、普通に対人、及び少・中サイズ程度のモンスター相手なら英雄以上の強さだろうな」

「けれど」

「ああ、それだと足りない。俺が絶対悪を演じてまで英雄を選定したのは、それだけ黒竜が絶望的故だ。だが英雄は消え行き、約束の刻は近付いている」

「……アイズちゃんやアルフィアは？」

「アルフィアは、まあ可能性はあるだろうな。一度敗北した身とはいえ、その時とは一線を画した強さを今は持っている。継続性って意味でな。精霊アの子も可能性はあった。だが英雄たる器にはなり得ない。何せ彼女は英雄イを求めた少女ソとなつてしまった。まあ強さは間違いなくアルフィアと同等なんだろうけど……理屈じゃないんだよ。アルフィアに勝てていないのが何よりの証拠だ」

アイズの潜在値や成長速度を考えればアルフィアに勝てても決しておかしくない。だが勝てない。それが英雄足りえない何よりの証拠だとエレボスは一度溜め息を挟んだ。

英雄を求める少女でありながら、その思いで己を強くした少女。英雄の素質を持ちながらも英雄から程遠い状態にあるが故に、アイズは至らないと判断した。

「アルフィアの場合は……どうだろうな。俺も分からん。更なる昇華を果たせば勝てる可能性はより上がる——筈なんだが。何だかな。可能性があると思つている筈なのに、同時に勝てないという確信がある。……んー、や、違うな。勝つてほしくないという願望か？」

「……あー、なるほど」

全知である筈のエレボスの自身に困惑した様子を見て、アリーゼはその気持ちを理解する。それは先程の話同様、理屈なんかではなく。

「肩入れしてらって事ね。ベル君に」

現在のベルの“想い”を理解している唯一の下界の子供であるアリーゼだけが、そのエレボスの感情を理解して頷いた。

その言葉を聞いて数秒。はっと思いついた様にエレボスはキメ顔で笑って言葉を紡ぐ。

「もちろんアリーゼにも英雄候補として期待してるぜ」

「うわ、きもっ」

「ひでえ……」

◇ ◆ ? ◇

遠征までの日は短い、決してダンジョン探索が不許可になった訳ではない。ベルの場合は例外としてアストレア・ファミリアの誰かを側に置かねば許可されない事になっているが、別に彼女達も地上に縛りつけようという気は更々ない。休みの人に話し掛ければ好意的に頷くのが殆どだろう。

お昼前までのリユーとの巡回パトロールを終わらせたベルは彼女にダンジョンへの同伴を申し込む。

「……ええ、丁度いい。遠征前に一度はダンジョンへ行く予定なのは貴方が来る前から決まっていた事です。本来ならば1人でも問題なかったのですが」

「う……」

「まあ、もう一つの予定を巻いてもいいでしょう。同伴もある意味タイミングが良かったです。例の武器を持たせる見極めにもなります」

例の武器。ベルはその言葉を聞いた瞬間、緊張しないように少し距離を置いていたリユーに目を輝かせながら近付いた。

「ぶ、武器ってあのアストレア・ファミリアに置いてあるかって英雄が使ったとされるあ

の武器ですか!？」

「え、ええ」

幾度となく味わった英雄に関する話を聞いた時のアマゾネス達の様な圧。種族も性別も、ましてや性格なんか似ても似つかない筈なのに、英雄と聞いた瞬間にこれだ。

アマゾネス達の光景を思い出して思わず顔を引き攣らせると、その様子を見たベルはハツと我に帰り、身体を近づかせた事に一度顔を赤くし動揺。また普段のリューの表情との乖離点、微かに引いてる様子を見て顔を青くし身体を引き離して頭を下げる。そんなベルの行動を理解したりューは頭を振って謝罪はいらなと言った。

「ああ、いえ。別に近付かれたのが不快だったという訳ではありません。……話を戻しますが、英雄の武器といっても彼本来の主武器とはまた別のものです。あの決戦の為に用意した三つの短剣が、今アストレア・ファミリアに存在する例の武器に当たります」

【リアライズ純紅の刃】に【イディアル純白の刃】、そして【ユナイトヴェル純水の刃】ですね！」

「はい。まあ銘を付けたのは英雄ではなく、私達ですが……」

正確には英雄が使っていた時は無銘の武器だ。英雄が去った後に、アリーゼと輝夜と

リユールによつてそれぞれ付けられた武器銘である。

「今回は『純水の刃』ユナイゼルを扱えるかの見極めです。第二等級武装ですので、武器に使われるという事はないでしょうが……」

「不壊属性の武器だからといって壊れない事を過信し過ぎない事、ですね」

「その通りです。壊れないイコール何でも受け止めるという訳ではありません。使用者の技、能力値、判断力によつて在り方を変えます。特に短剣という特性上、刃を重ねる戦闘でなければ受け止めるには向いていませんから」

では準備を終えた後、ダンジョンへと向かいましたよという言葉で締め括り、装備を整える為にリユールはアストレア・ファミリアへ。ベルはアルフィアと暮らす教会へと向かった。

ベルは普段アルフィアとの訓練をする際に着用する装備に加え、ポーションを仕込んだポーチと、普段は見かけない籠手ガントレットを装着している。しかも両手ではなく片手のみ。利き手である右とは逆の左手にのみ装備された籠手にリユールが興味を向けていれば、それに気付いたベルが問い掛けた。

「え、と……気になりますか？」

「ええ。貴方がオラリオに来た際に持ってきたアイテムの中にその様な装備はなかったと記憶しています」

「オラリオに来てから貰った装備なので」

「なるほど」

「輝夜さんと他派閥への挨拶に向かった時、ゴブニュ・ファミリアの方から渡されたんです。試験も兼ねて使ってみて欲しいって」

アルフィアとの訓練で既に使用感は把握しており、ゴブニュ・ファミリアの人達には一通り報告してある。装備も返そうとしたが、「開発試験に付き合ってくれた礼」との事でプレゼントされたので、折角だから使おうと装備してきた訳だ。

ベルが披露する様に手首を曲げると、刃が飛び出した。グリップはなく刃は籠手に固定され、その全長は手首から指先の長さ程度。手首を元に戻せば自動的に刃は収納される。

「ほう……」

「手首を曲げる・伸ばすだけで武器の取り出しと収納が行えるので、結構便利なんです。

まあ中の刃を交換したりするには面倒ですし、改善の余地はあるとゴブニュ・ファミリアの方達は息巻いてましたけど」

多少武器性能にも難ありだが、それは素材次第でもあるし、何より知恵の回るモンスター相手ならば隠し武器というのは非常に効果的になる。個人的にはかなり気に入ってるんですけどベルが機嫌よく言えば、リユーは「確かに貴方が好みそうな装備だ」と微笑んだ。

無論、ふとした瞬間に刃が飛び出では危険な為、セーフティの機能は付いてある。ベルは籠手に付いているロックをカチリと動かし左手を振って念のために確かめる。刃は出ない。ロックの解除はダンジョンに入ってからだ。

よし、と頷く。では行きましようというリユーの声掛けのもと、二人はダンジョンへと向かった。

◇ ◆ ? ◇

「今回向かうのは中層。もちろん階層主の階を抜けるつもりはありません。あくまでファミリアの入り口近くを目安にした冒険になります」

「はい」

「ダンジョン探索の経験がない貴方にとってでは中層でも危険ですが……最悪私が対処しますので、先ずは貴方のやり方で探索を進めて下さい」

アルフィアから出来る限りの知識と知恵を継いだ。レベル8の経験を伝えられたベルに今更“予習”は要らないだろう。現在彼に必要なのは経験を積ませて、アルフィアからの知識を自分の知識とする事だ。

今のリユースはあくまでもサポーター。ベルが求めるならば必要な助言はするが、基本的には魔石の採取に専念するつもりだ。

「それと私が扱えるモノに厳選はしてありますが、武器を揃えました。弓・直剣・刀・メイス……くらいなものです」

「通りで普通よりバックバックが大きいと思いましたが」

複数の装備を用意すれば当然嵩張る。大きな荷物を背負うリユースを見てベルは苦笑し、凄く世話を焼いてくれるなあと思しく思う。

「弓と、矢を三本ほど貰っても良いですか？」

「三本ですか？ 矢筒も用意しているので、全部を装備出来るようにはしていますが」「あくまで試したい事があるだけなので」

ベルはつま先で地面を叩き、腕を伸ばしてストレッチ。そして一つの詠唱。

【強化】
イコスター

増幅・強化・遮断。三つの内の一つ、強化。発現したての頃は増幅と効果が被っているのではと思ったモノだが、試行錯誤する度に全くの別物だと理解した。

増幅と遮断はその名の通りのシンプルさだ。増幅は音の増幅。鳴らす音を大幅に変化させられる。遮断は音を消す事。会話内容の盗聴を回避する事が出来るし、足音、服が擦れた時の小さな音さえも遮断する。

だが強化は別物だ。増幅が音〃を〃変化させるモノであれば、強化は音〃で〃、或いは音〃への〃変化を可能とする。

例えば現在ベルが行なっているのは索敵の為の聴力強化。他にはシンプルに〃音〃^{エンチャント}という属性を乗せただけの付与も出来るし、遮断や増幅の効果を強化する事さえ可能

である。

何より恐ろしいのは、この付与の対象は生物に限らない事。

「……三体。予想通り」

現在近くにいる……というよりは、ベル達を目掛けて近付くモンスターの数を把握したベルは、その方角を見つめ武器を持たずに両手を構える。

そして、モンスターの姿が見えると同時に――

「強化」、イコスター「増幅」インフレクト

両手を叩く。ただそれだけ。

リユーはベルの行動を見て耳を塞ぐ行動を取ったが、想定していた爆音は響かない。いや、正確には、想定していた爆音が遠い。まるで、モンスターの背後のみ増音した様子に。

リユーの思考通り、ベルの手で叩いた音はモンスターの背後にのみで増音した。これがベルの魔法の利点。鳴らす手に付与魔法を掛けるのではなく、音が届く範囲に魔法を

付与する——音が届く範囲であれば、全ての音の増幅・強化・遮断を可能とする、無機物にすら付与できる魔法。最早音の結果と呼んでも良い。

突然の背後からの爆音に驚いたモンスター……上層である十階層のインプは振り向き、^{ベル達}獲物から目を離した。

「^{シャット}遮断」

その一瞬でベルは脚と弓、そして矢に遮断を付与し近場の壁を蹴り宙返り。インプの視界から外れた遙か上空で身を翻し、天と地を逆さにしながら矢を放つ。

視界が霧で見えづらい場所だが、ベルは完全記憶により地形を把握しており、かつ掛け直した聴覚の強化によりインプの位置を理解している。逆にインプはベルの補足が叶わず、視界の霧が邪魔して戸惑いを生む。

放たれた矢は静かに突き進み、インプを穿った。

「……マジですか」

レベルが低い相手。勝てて当然だというのは前提とし、今の一連の流れを振り返る。

そしてベルの眩きを思い出し、「まさか」とは思うものの推測を続けた。

（索敵、戦闘能力は勿論……だがそれ以上に予知能力が想定以上だ。彼は索敵を始める前に三本の矢を要求した……つまり、索敵する事なく相手が三体であると予知していた事になる。時間がある時にダンジョンでの記録を漁っていたのは知っていた、が……）

まさか、ダンジョンの構造の把握のみならず、モンスターの生み出される周期までをも把握しているのかと、リユーは恐ろしい結論に辿り着いた。

「リユーさん、弓ありがとうございます」

「……ええ。それと一つお聞きしても宜しいですか？」

「？ はい」

「アルフィア曰く、武器の基礎は教えたが技は教えていないとの事でした。が、今の弓の扱いは明らかに基礎から逸脱した『技』です。誰から教わったのですか？」

ベルが自由に出来る時間はそれほど多くない。これはアストレア・ファミリアに居る全員に共通する事で、それこそ今の様な休暇だったり、夜の時間帯でない限りは正義の

ファミリア故の仕事がある。

そしてベルは休みの時間はアルフィアとの訓練だったり、それこそダンジョンの記録に目を通してゆくくらいだ。巡回がまともに休みなのは今日が初であり、自由に出来る時間は殆ど無かったと思つて良い。

「ええと……教わつた訳じゃなくて、見て覚えたんです」

「……見て、覚えた？」

「はい。輝夜さんに連れられてファミリアの挨拶に向かつた時に、アルテミス・ファミリアの鍛錬を見ました。で、身体の使い方を記憶して……自分に合う身体の扱いに修正してやつてみました。ぶっつけ本番だったので上手くいって良かったです」

ほつ、と。二へらと気の抜けた笑顔で一息吐くベルを見て、リユーは戦慄を覚えた。

(……そうか。完全記憶ともなれば幾度となく完璧な光景を思い返せる。レベル3の視力ともなれば、筋肉の膨張、腕の動かし方、体幹の保ち……その全てを覚え、自身に反映できる)

とは言え。

（ぶつつけ本番……？ 例え覚えたとしても、それを実践に活かせるかは別の問題だ。私自身、輝夜の技を訓練で扱えたとして、実戦では到底彼女に及ばない。……アルファイアが教える基礎が基盤になっている？）

アルファイアが基礎を徹底して教えたのは、どんな技であれ完璧に熟せる身体作りの為。ともすれば。

（今のクラネルさんは、一度技を見ただけで完璧に模倣——いや、自身に修正したともなれば、自身の技とする事が出来る。技を見るだけ、彼は強くなる）

もしアストレア・ファミリア……否、このオラリオのそれぞれの極致をもその眼に収めたのであれば。

「……末恐ろしいですね」

「へ？」

レベル8を相手に幾度となく経験を重ねたが故の、本番に物怖じしない度胸。相手の模倣ではなく自分の動きに出来る完璧なまでの身体操作。情報を溢さない完全記憶で、相手より確実に駆け引きで勝る圧倒的なアドバンテージ。

あまりにも冒険者として必要な素養が揃いすぎている。いや、揃えたというべきか。一体どれだけの無理難題を与え続けたのか——レベル8の本気に一撃をレベル3の身で当たり前の様に躲す事実を顧みれば、最早想像もしたく無かった。

一体誰が、この姿を見て「才能がない」などと思えるのだろうか。

「いえ……少し見誤りました。今日を通しての見極めなど必要もなかった。クラネルさん、これを」

「え、ゆ、ユナイトヴェール【純水の刃】!？」

「はい。持つべき……というよりは、持たせて技の経験を積ませる方が良いと判断しました。中層まで行く予定でしたが、今日は帰って私の出来る限りの技を見せましょう」

「……僕、短剣の扱いはまだ見せてない様か……?」

短剣の扱いが問題なければ与えてくれるという意味ではなかったのか？ と、そう困

惑するベル。だがそんな困惑も、受け取った短剣に目を奪われて掻き消える。

「あ、でもちよつと待って下さい」

「はい？」

「この後、数十分後くらいに怪物モンスターパーティーの宴が発生するんです。ダンジョンに入る前に十一階層まで行くと話していたパーティーがありましたので、念の為に殲滅しといた方が良いでしょう」

「……………わかりました」

あくまで推測に過ぎなかった『モンスターの生み出される周期を把握している』というものが、今の言葉でリユーの中で確信に変わった。

完全記憶と、覚えようとする努力。幾ら一度見れば覚えられると言っても、覚えるという動作が疲れるのは変わらない筈だ。

やはり末恐ろしい。再びリユーはそう思う。

正義冒険①

「……ふむ」

吹き荒れる音の嵐を掻い潜り、刃と刃を合わせて滑らせる。偶には気紛れで剣を使うかと思いついた朝日の訓練。アルフィアはベルの動きを見て、言葉一つ呟いた。

(この動きは……微かにだが神がかりな捌きと、【疾風^{リオン}】を思い出させる動きの加速)

なるほど、と。輝夜に連れられた件、またリユーとのダンジョン探索、及びその後の訓練をしていたという話を思い出し、現在の動きを理解する。

神の動き。無論神の力に頼らない、権能の域を出ない程度の動きではあるが……文字通り神技の片鱗をその身で体現している。輝夜に連れられたのは少し前だったが、漸く自身に合うやり方を理解したのだろう。

そしてつい昨日のリューとの訓練。

「……順調に覚えられている様だな」

「——ツ、つ、あ」

答えようと口を開くが、迫り来るアルファイアの猛攻に思う言葉が出せず、ただただ肺の空気が出されていく。「待って攻撃止めて」と言いたげな表情を見て、それを理解したアルファイアは腕を脱力させ呆れた様に息を吐く。

「この程度で呼吸が保たんとは……感心したのも束の間だったな」

「ゲホっ……ふー……っ……。……神様の技が、予想以上にキツくて」

「ふむ？ 何がキツいか、振り返ってみろ」

「……まず、普通の状態だと神様の技を使うのは無理だった。基礎で突き詰めた予備動作を少なくする手段でも、神様の技には身体が追いつかなかった」

「ああ」

「だから、素早い呼吸で心臓の鼓動を活性化させて、血液の循環を早めた。常に身体を運動状態にして、初速を格段に上昇させた……んだけど、常に息切れを起こしてる様な感

「覚だから、保つて数十秒程度」

敢えて極限状態に追い込むことで、自身の肉体を強制的に最大状態まで引き上げる。最大の状態ではあるが同時に限界に近い状態でもあるそれは、発揮できる時間が相応に短くなる。そこに至つて漸く片鱗が可能な神の技。

何日かの試行錯誤と自身の肉体に擦り合わせて尚、デメリツトの大きさに悩まされる。人の身で使える神様の技の、受け流しという一点ですらこの体たらく。

やらない方が良いのではないか。そんな思考を過らせたベルに、アルフィアはほとんど呆れた様子で紡いだ。

「当たり前だ。義息子むすこながらここまでアホとは思わなかつたぞ」

「へ……？ でも余程身体能力ステイタスに差がない限りは、僕の完全記憶の利用で再現可能つて……」

「人の子の技ならば、な。まさか神にまで手に掛けるとは思わなかつた」

「というか、アルフィアが鍛えた観察眼で見れば分かるはずだ。あんなものは不可能だと。アルフィアですら猿真似が限界の武の神の技を、飛び抜けた才能のない第二級冒険

者が再現出来る筈がないのだ。寧ろ片鱗程度を数十秒の間扱える方が異常事態。

「人の身体能力に落ちてるとは言え、その身は神の力を幾千年——幾万年と『経験』を重ねている。人が出来る程度の経験とは比にならんモノを膨大に積み重ねているんだ」

魅了されては人の子が抗えるはずもない美の女神。神の力が使えずとも神装武器に等しき装備さえ作り出す鍛冶神。

その道の神の経験を積み重ねてきた者たちに、人の経験如きが届きよう筈もないのだ。それこそ、その道の象徴とも言える神の恩恵でも受け、人生の全てを捧げる程の年月を重ねなければ、届く事を許されない。

故に、片鱗であり実戦では全く使えないとは言え——たった数日で再現出来るベルこそが異常である。

(……やはり規格外だな。最高神ゼウスの恩恵というのは)

最高神ヘラの妻の恩恵を受けた身である自分はもう差し置き、彼の育て親であつた義祖父

兼恩恵を与えた神物を思い返す。末端の構成員ですら第一級冒険者。それこそ彼の父親を除いた殆どが最強格と呼ぶに相応しい眷属の集いを纏めた主神の存在。

眷属は主神に似るといふ言葉があるが、事実その通りだ。恩恵は人の可能性を広げるだけでなく、その身に流した「血」によつて、神の影響をステイタスに及ぼす。それこそ場合によつては、恩恵を授かるだけでスキルが発現するなんて事象さえ起こしかねない。

満遍なく平凡でありながらも、強く在ろうとする彼の身に授けられた全知全能の器。故にこそ手にした資格は本来の力以上に発揮する可能性がある。

(しかし、それを考えれば今度は逆か。ゼウスの恩恵を受け、且つ強くなるという想いを胸に突つ走るのであれば……それこそ、片鱗ではなく神の技に届いてもおかしくない。寧ろこの程度で収まるはずがないだろう。英雄の事を考えれば)

確かに規格外。だが足りない。

かの英雄をも超える要素は揃っている筈なのに、現状英雄には到底敵わない。何が足りないのかと長く考え込むアルフィアに、ベルは首を傾げながら話しかける。

「叔母さ」

「ふんっ！」

「~~~~ツツ!!」

「いい加減その癖を直せ。私がおばさんと呼ばれるのが嫌というのは何度も言っているだろう」

と同時にアルフィアの反射行動^{ちようきよう}。先程の剣戟など話にもならない。それこそ強敵と戦つてゐる時のレベル8そのものとも言える速度で繰り出される手刀がベルの脳天に突き刺さる。

一瞬意識が飛び掛けるが、力に関しては相当にセーブした様だ。視界が眩んだがそれも数秒。白く光る視界は元に戻り、アルフィアの姿を涙目ながらに睨みつける。

「魔法なら防げたのに……っ！」

「だろ。お前が普段から私の“動き”よりも“言葉”を注意しているのは知っている。咄嗟ならば動くよりも詠唱を唱えた方が楽だからな。だからここぞの攻撃で“動き”に変えた。これが駆け引きだ、覚えておけ。お前のは“計略”だ」

「ぬぐ……」

確かに、と。納得させられてしまった。ベルの場合は圧倒的なまでの情報量による行動の予知。それは技と駆け引きというよりは、パターンの分析を暴き出し推定行動を確立する計画的な動きだ。

今までの行動からアルフィアの物理的な攻撃は限りなく低い可能性だった。それを知っているからこそアルフィアは直接攻撃に切り替えた。今までの行動パターン全てを覚えているベルにだからこそ刺さる駆け引き。

「で、何か言いたげだったか？」

「あ、うん。お義母さんなら、この技を実践に活かすにはどうするかなって。2日後にはもう遠征だし、お義母さんは今回の遠征には着いてこないでしょ？ 今のうちに聞ける事は聞いておこうかなって」

「ふむ……私がお前の完全記憶を持っていたとして、神の技を再現する為にやろうとするならか」

アルフィアは数秒の思考の下、結論を出す。

「まず心臓を止める」

「え」

「電気ショックや圧迫、あらゆる手段で心臓を止める感覚を身につける」

「ええ……？」

「で、そこから心臓を動かす術を模索する。意図的に心臓の速度を調整できれば、呼吸の繰り返しが無くなり、肺活限界は通常通りのまま、身体を運動状態に出来るからな。一度感覚さえ掴めば【完全記憶】はその再現を可能と出来る」

「……………」

「あくまでレベル^わ8^{たし}ならば、だがな。……聞いたのはベルだろう。そんな眼で見ると

発想から常軌を逸してた。というか両腕折れて“殴る”という選択を取ったり目潰しされて尚目を開くとかいう暴挙に出る才能^{現代最強}の権化の意見を聞き入れる方が間違っていた。

確かに理には叶っている。ベルの完全記憶は視界に映したモノのみならず、自身の身体的変化でさえも記憶する。筋肉の質量や力の成長。故にベルに“ズレ”というものは存在しない。必ずステイタスの最大パフォーマンスを発揮出来る。ともすれば肺活限界を間近にして運動状態を作るよりも、肺活に余裕を持たせ尚且つ運動状態を作ると

いうのは理想であり、目指すべきもの。

だがそれを出来るか否かで考えれば否である。そもそも人は心臓が止まったら活動限界を迎えて死に至る。血が回らず身体は動かない。一人であれば確実に死ぬコース一直線。人がいても正しい処方せねば簡単に死んでしまうそんな方法を誰が取るというのか。

だがそれを取ると断言できるのがアルファイアだ。

「しかしまあ、実践に活かすとしたら……長引く戦闘よりは、味方のサポートで攻撃を弾く手段を取るだろう。現実的に考えたらな」

「攻撃手段じゃなくて、防御手段」

「少なくとも第一級冒険者の攻撃を弾ける『技』だ。一対一ではなく多対一で格上を相手にするなら、有利な一手となる。継続ではなく一瞬の出来事だろうと、確実に崩せるだろう」

「……なるほど」

「いずれにせよ、あまり実践向きでないのは確かだ。例えば万全に扱えるのだとしても【英雄の一撃】になる事はない。……あまり焦るな。私がいる」

「ん……」

—— 焦れよ、英雄の卵。

—— 焦るな。私がいる。

—— どちらの言葉を取るべきだろう。普通に考えれば義母アルファイの言葉に従えばいい。頭を撫でるこの手に身を任せ、自分を守る母の言葉に。

でも、自分の本質を見抜くような瞳で見つめる男神エレボスは世界の核心を突くように言葉を発した。『約束の刻』。アルファイはそれを知っているのだろうか。

英雄が集うオラリオ。普通なら英雄譚の様に、その『約束の刻』を乗り越えるのだろう。自分一人が居なくても、アルファイ達が——。

「……」

胸の中で、「逃げてる今じゃ開花しない」というエレボスの言葉が渦を巻く。ああ、これはダメだ。記憶の中の不純物と化した。自分の在り方が酷く気持ち悪く感じる。嫌な事は忘れてしまおう。知らない神よりもよく知る母を取る。それは当然の事。

明確な意思が、記憶の言葉を掻き消した。

◇◆?◇

「快晴！ 気持ちいい朝から行くわよ！ これは冒険日和！」

まあダンジョン内に天候は関係ないけども！ と元気よく笑顔で告げるアリーゼに、輝夜は何とも言えない表情で言葉を溢した。

「突っ込みが間に合わない」

「アリーゼ、今は割と雲が多いです。それと今は昼前で、今回は冒険というよりはクラネルさんの——」

「いい、いい。突っ込まないで下さい。際限がありません」

生真面目に答えるリユーに溜め息を吐きながら抑える輝夜。アリーゼは目を輝かせながら拳を作り、言葉を紡ぐ。

「でも絶好調なのは間違いないもんね！」

「……否定はしません」

「ええ。確かに今日はコンディションが整っている」

満面に、呆れながら、薄らと。三者三様ながらも全員が笑顔で、自身の調子を確認する。

「……なーんかテンション高いよなあ。ねえ【スライル狡鼠】、あの三人……特に【スカーレット・ハーネル紅の正花】はいつにも増して張り切ってない?」

「ああ、まあそりゃそうだろうな。アイツらは特に張り切るだろ」

「アストレア・ファミア唯一の男の子に良いところを見せたい……的な!? え、意外!

あの三人ってそういう面にドライだと思ってたけど、気に入った子には肉食!」

「お前の脳内お花畑の通常通りにホツとするぜ、【ライバリー競争処】。取り敢えずお前は自分の経験積んでから出直してこい」

「辛辣過ぎる……」

アルテミス・ファミアの一人、ランテがライラに対して主力三人のモチベーションの高さについて問い掛ければ、やがてやり取りの末に傷付く言葉を貰った。

自分も経験ない癖に……とは言えなかった。いや実際のところ恋愛経験なんてあら

ず、フィンに対してアプローチを仕掛けてるだけの状態である事に以前変わりは無いのだが。フィンはフィンで諦めたのか、或いは若干だが気を許したのか、ライラの急接近を強く拒む事は無くなった。

まあ理由としては某アマゾン^{姉妹}の姉に当たり、ライラに関してには必要以上に入り込まず一定の距離を保ってくれる安心感という部分があるからなのだが……それでも自信が目指す場所に踏み出してるのは確か。そして勇者^{フィン}の条件に近い小人族^{バルクム}であるのも確か。

何とも言えぬ敗北感に包まれたランテは、ふと己の主神の発言を思い出す。ランテ達の押しがあつたとは言え、未だに堅物なあの処女神ですら比較的好意的に見る男の子。ならばアルテミスのファミリアに所属しながらだとしても。

「ワンチャンいける」

「やめとけ死ぬぞ」

「へ、何で？ 彼自信が望むなら誰も——ひうつ!？」

ランテの呟きとベルへの視線でそれが何を意味するのかを即座に判断したライラが本気で焦った様に肩を掴んで引き止める言葉を紡げば、ボケツとした様子のランテは突如として表情を恐怖に染めて背筋をピンと伸ばす。

冷たい風が背中を強く撫でる。明らかに自然な風ではなく、また悪寒というにはあまりにも感触が残っていた。意味が分からずあっちこちを見渡すランテに、ライラは溜め息を吐きながら告げる。

「一応言つとくと、アイツにはぶつ壊れチート^クのレベル^ム7が付いてるぞ。詳しい内容は公開されてないけど、どうも“固定対象への悪意”を感知するらしい」

「何それ怖い。つていうか悪意つて程でも……」
「軽い気持ちで触れるなよ、つて事だ」

ベルは純粹だ。それはもう魂に現れるレベルで純粹であり、染まりやすい。恐らく女性関係を持つモノならば止まらなくなる。特に現代のベルに関しては英才教育（ゼウス式）を受けていない為にそう言う願望や感情に鈍く、ロマンや倫理観など全無視でハマリかねない。

だから軽い気持ち——アマゾネス等の娼婦や、「いい奴っばいしオケ」程度の認識で迫る輩からは守らねばならない。そういうスキルがぶつ壊れチート^クにはある。

ランテは主神の話を思い出す。かつての最強派閥と称されたファミリアが一角、『メシオンヘラ』『ヤンデレ』『悲劇の元凶』『神々の王』『怖い女代表』『夫婦喧嘩の常勝者』と称

される女神の事を。

「……………、これがヤンデレという奴……………」

「ん……………んん？ や、ちと違うな。いや、アタシもそういう神サマ達の使用語に詳しい訳じゃねーけど、嫉妬深いか独占欲じゃ無いんだよ。なんつーか……………依存、的なの？」

ベルが望むものを受け入れるし、ベルの全てを守りたい。ベルが望み、そしてベルの事を本気で想うのであれば、別の女性だろうとその全てを許容する。

自分の押し売りというよりは、ベル限定で全肯定と化す少女。それがアイズ・ヴァレンシユタインという英雄を求める少女だ。

簡単に言ってしまうえば、もう居なくならないのなら誰と何をしてもいいよ。ただしここに軽い気持ちで踏み込む奴は許さない、という事である。

「ちなみに」

ゴオン——と、大きな鐘の音と共に、地上が揺れる。明らかな魔力の波動。仮に深層の階層主を倒すとしてもオーバークイルとも言える破壊の轟音が鳴り響き、その音

に聴き覚えのある者は思わず顔を引き攣らせる。あのアリーゼでさえもボケる事なく死んだ目で「こつわー、ウチのレベル8様こつわー。警告ついでに階層主倒したのかな」と呟いている。

「ベルには最強の母親がもう一人居るからな？」

「すんませんつした……」

「へ？ あ、はい。……？」

ほえーと揺れる地上にポケットとしてるベル。ライラが発した言葉に、ランテは思わず現状を何も理解してないだろうベルに謝罪した。案の定困惑した表情で首を傾げている。

（団長アリーゼが呟くレベルで何が怖いかって、このアルフィアの反応、スキルでも何でもねえんだよな。【戦乙女ヴァルキュレ】みたいにスキルによる感知ならギリ分かるんだが……確信できる要素のない「母親の勘」で確実にアイツへの悪意を感知するんだよな……）

余談だが、ここまでライラがアイズについて詳しい理由は、実際にスキルの使用……

正確には「受信」の瞬間を何度か見ているからだ。フィンとの定期的なやり取りで黄昏の館へ訪れた際、彼女の主神であるロキの「あの兎攫つて女装でもさせてフレイヤの前に差し出したら面白いんじゃないかな」と呟きに対し、その場に居なかつた筈のアイズが瞬く間に現れ、その首に剣を突きつけられていたのだ。

そんな光景を観ている内にフィンからスキルの一部の効果を教えられ、アストレア・ファミリアの中で唯一アイズそのスキルの一部を知っている。ちなみにアルフィアの方はファミリア内の全員が知っている事だ。

先日のエレボスなんかは例外で、彼やヘルメスの場合は揶揄いという面こそ表れるものの、大部分はベルの応援者である理由が占めている。彼の為の行動なので、グレーゾーンではあるがアウトとまでは行かない為に見逃されていた。

「——さて！ 気を取り直して行きましょう！ さあ点呼！」

アリーゼは一度手を鳴らし、遠征メンバーの注目を集める。一人一人の名前を呼び、予定通りに揃っている事を確認すると、先程までの満面の笑みは鳴りを潜め、雰囲気が強気に変わる。

緊張感を弾き飛ばす大きなテンションと、紛れもなくダンジョンに向かうと理解させ

られる冒険者の雰囲気。曲がりなりにもレベル5で、現最強派閥の一角であるファミリアの団長であるだけの理由があると、ベルは理解した。

正義冒険②

「クラネルさん。今回の主な目的としては、貴方の深層への『慣れ』です。先日の探索で貴方の能力は把握しましたが……深層は恐らく、記録や周期だけでは計れない理不尽さがある。何より行ける冒険者が限られていて、覚えている記録だけでは分からない部分もあるでしょう」

「あ……はい。正直上層や中層は殆ど把握出来たと思うんですが、下層以降は資料の少なさや纏めの粗さもあって、分かってない事が多いです」

「……………まあ、上層・中層の事は置いておきましょう。貴方の慣れが目的である以上、探索の手順はある程度貴方次第です。最低限四十八階層まで行き、遠征目的のアイテムさえ獲得すれば、他の時間は貴方の為に当てられます」

来て二週間程度。その程度の時間経過で上層と中層の殆どを把握したと言う時点で大概おかしいのだが、ベルの完全記憶のぶっ壊れの程度はそれなりに把握してきた所

だ。突っ込むだけ無駄だと判断し、話を進める。

「どこか迂回したい場所があれば先に——」

「もー、野暮な事言わないの！ リオン、ベル君が来た以上行く場所なんて決まってるでしょー！」

「？ ……。アリーゼ、ダンジョンは観光地ではないのですが」

アリーゼの発言に一度疑問を覚えたリユウだが、「ベル」という人名。そして彼の憧れを思い出し、呆れたため息を吐く。出発前の団長らしきはどこにいったのか。

観光巡り気分での「例の場所」を提案するアリーゼに反論しようとリユウが口を開くと、意外にもそれを止めたのは輝夜だった。

「良いではありませんか、リオン」

「輝夜……？」

『水の迷都』には確かにモンスタが多い。けれど知つての通り、あの場所は今やある意味安全地帯でもあります。一度『リヴィラの街』で身体を休めるにせよ、2日目の休憩場所も必要です。休む場所がそこだった。……何も非合理的ではないでしょう？」

「それは、まあ」

「何より、彼のモチベーションにも繋がる。その上彼の魔法は煩わしさを遮断し、同時に聴力に長けたモンスターからの感知を防ぐ事が出来ます。あらゆる対策が出来る以上、否定する理由が見当たりませんが」

「……輝夜。それは誰の意見ですか」

「あら？ 私の、以外に何があるのでしょう？」

「言い方を変えましょう。アルフィアに任されてもしましたか？」

「あらあら、ふふふ……」

輝夜は袖で口元を隠すと、上品に笑いながらも鋭く挑発する様な目つきで言い放つ。

「それで何か不都合があるのでしょうか？」

「む……」

「ええ、ある訳がない。だが否定したくなる。まるで玩具やペットを取り上げられた幼児の様。あの堅物妖精が随分と絆された様で————なんとお可愛い事でしょう」

ふふふ、あはははと、最早他ファミリアに自身の内面を隠す気が無くなってきたのか。

そもそも極東系のファミリアを除けば大抵は彼女の本性を知っているので隠す必要もないのだが、ガワが外れ、輝夜は高笑う。

その様子を見て、リユーは「はっ」と薄ら笑いながら言葉を放つ。

「ならば貴方は差し詰め、幼児から玩具を取り上げるいじめっ子か。他人のモノを奪い高笑う、正義のファミリアとは思えぬ悪行だ」

「あ？」

「は？」

ついで武器にまで手を掛ける二人を見て、周りの人達——アストレア・ファミリアを除く人物達は慌て始める。当然だ。レベル5同士の喧嘩など、そこいらのゴロツキの喧嘩とは格が違う。

アストレア・ファミリアの人物達は慣れているのか。いや、どちらかと言えば懐かしい様な気配すら感じる。実際アストレア・ファミリアにとつては二人の喧嘩は懐かしい光景だ。かの『大鐘楼の英雄譚』での出来事以降は、リユーが己の正義を、そして他人の正義を理解し、輝夜は理想を求め始めた。お互いが変わり始めた事もあり、反発する要因が無くなったのだ。

とはいえ特別仲が良くなったかと言われればそうでもなく。仲間意識は確かに強いが、決してプライベートに出掛ける仲なんてモノではない。

故に、何かしらキツカケがあれば反発するのは当然の帰結だった。リユーにとつてはベルは自分が一番近い人物だと思っていたし、アルフィアからもある程度の信頼を置かれていたと思っていた。が、実際彼の事をダンジョン内にて任せたのは輝夜。

輝夜にとつてはベルは理想の象徴そのもの。それであると同時に、自身の「今」へと導いてくれた大恩人。例え厳密には同一人物でないとしても、本質が同じ優しさを持っている事は理解している。だがオラリオにて出会った直後、ベルはリユーに対して過剰なまでに反応していた。

言わばプライドの問題である。

「……！ ベル君、今よ！ 今だわ！ 今こそアレを言うべきよ！ 『やめて！ 僕の為に争わないで！』と涙目ながらに言うの！」

「二周回つて僕にヘイトが向きそうなんですけど」

「……」というか玩具つて。いや例え話とは分かっているんだけど人間的な意識じゃなくお気に入り玩具を取り上げられた様な感じなのか僕人間なんだけど——と、睨み合う

二人から視線を逸らして遠い目でダンジョンの天井を見上げる。

アルフィアとアイズの時の混浴争奪戦ガチ喧嘩という例があるので、ぶっちゃけどんな理由での喧嘩であってもベルは動揺しない。しないつたらしめない。ちなみにその時は三人で仲良く入って解決した。ゼウスは蹴り飛ばされた。

睨み合う事数十秒。本来なら止めるべき団長アリシが爆笑してる為、歯止めが効かない二人は手に掛けた武器の刃を見せる。次の瞬間には刃が重なる——そんな衝撃は訪れず、二人の意識は一人の青年に向けられた。

「やれやれ、英雄の想いを継いだ正義とあろう者が情けない」

「む」

「ぬ」

その声の主人は、心の底から呆れた様子で溜め息を吐く。瞑られた目は開き、ヴェーナーは頭を振りながら言葉を紡ぐ。

「あなた方は人をなんだと思っていられるのか」

「貴様が言うか」

満場一致だった。この時ばかりは爆笑していたアリーゼも、対立していたリユーと輝夜も、六年前までの出来事を知る者たちは全員真顔で突っ込んだ。

ヴィトーは恥ずかしげに笑いつつ、それはそれ、これはこれと置く様な素振りを見せ、続きを放つ。

「任されようが任されまいが、結局は本人の意思が一番でしよう？ 外分的要因に惑わされ、一番重要な彼の信頼を確認していない」

「……」

アルフィアに任されたから何だというのか。彼の義母である彼女の任せるは確かに重要な言葉だが、ダンジョン探索の間という意味である事は明白だ。一生を任せるなどと言われた訳でもあるまいに、何をそんな勝ち誇り、何をそんなに悔しがる必要があるのか。

少なくとも輝夜はお目付役として任せると言われただけだ。実際にベルが誰に信頼を置くかはベル次第。

ヴィトーの言葉に反論の余地は無い。寧ろこれを聞いて刃を合わせるのであれば、ベ

ルを物扱いしてる事に他ならなくなってしまう。

不完全燃焼ではあるが、確かに下らない喧嘩だと二人は息を吐き、刃を納めて武器から手を離れた。

「おお」

原因がどうあれ、反発して喧嘩数秒前の状態から元に戻すのは簡単なことでは無い。負かすか勝つかしない限りは、中々認められないのが人の感情だ。

それを簡単に納得させる話術。要因を見抜き、穴を見抜き、理解させる能力。心理にも長けた回復役ヒーラーなのだろうか。ベルは思わず感心してしまう。

「あ、ちなみにだけれど」

アルテミス、ゴブニュ・ファミリアから派遣されているサポーター達が安堵の息を吐くのも束の間。アリーゼが思い出した様に輝夜に顔を向け、再度笑顔を浮かべながら言い放つ。

「輝夜、アルフィアからの伝言ね。『任せたという言葉を免罪符にマウントを取る様なら、後で罰を与えてやる』とのこと！」

「……団長様、絶対に覚えていて【カラス雑整】に任せましたね？」

「えー、何のことかしら？ 私は輝夜の動向を確認してからこれを伝えろって言われただけだしねー」

先程の話術に感心したベルがヴィトローに話し掛けている様子を見て、アリーゼの手の内かと言わんばかりに輝夜がジト目で見つめる。なまじ言い訳が上手いので言葉を突く事が出来ない。確かに人の本心を見抜くなら“経過”を確認するのが確実だ。事実輝夜はアリーゼから先にアルフィアの言葉を伝えられていれば突っ掛からなかっただろう。伝えられてなかったからリニューを揶揄った。

『例の場所』への提案はベルのモチベーション向上が第一、第二に輝夜の言動確認。そして第三に、ベルにとって関わりがまだ薄いヴィトローへの信頼向上。全く敵わんと言わんばかりに息を吐き、地面を見つめながら呟いた。

「……アルフィアの罰か」

「怖いよね、分かる。あ、リオンも連帯責任だからね？」

「え」

「煽り返し、ダメ絶対。同じ土俵だもん」

「……………はい」

納得はいかない。が、一理ある。任された輝夜が調子に乗ってたから言い返した、ではなく、輝夜の意見として受け入れればここまで発展しなかったのは事実だ。責任の一端は確かにリユーにもある。不承不承ながらも領いた。

「さて、ベル君。貴方の頭ならもう上層・中層のモンスターとの遭遇を最低限にして最短ルートで行ける道が分かっているとと思うけれど」

「はい」

「敢えてモンスターとの遭遇を増やして行くわ。特に中層のモンスター。リヴィラの街に着くのは夜になる前。遭遇モンスターの種類はレアを除く全て。可能ならレア・モンスターも含める。それでルートを構築して貰ってもいい？」

「え、と……………はい、分かりました」

アリーゼはベルのスキルを熟知している訳では無いが、その効果の有用性を理解して

いる。後は「勘」に任せてベルが対応可能な範囲を決め、道順の提案をお願いした。ベルが脳内でのマップ構築をしている間に、アリーゼは事前に話していたリヴィラの街に着いてからの行動を振り返る。

「今回は上層、中層域の魔石は全部リヴィラの街に寄付。ドロップアイテムも同じね。何か必要なら交渉に使ってもいいわ。宿はいつも通り取らずにテント。明日の朝までは自由行動ね。オツケー？」

各自領き、前日に確認した通りだと了承する。

「それじゃあ気を取り直して、行きますか！」

◇◆?◇

『例の場所』とは、六年前の英雄譚にて最後の章を飾る決戦の舞台の場所を指し示している。【巨蒼の滝^{グレートフォール}】を飛び回る漆黒のモンスターを英雄の一撃で撃ち落とした、二十五階層。通称『水の迷都』の事だ。ハーピイなど空を飛ぶモンスターがわんさか湧いており、

水面に近づけば泳ぐモンスターの攻撃対象となる下層の始まり。新世界と呼ばれる場所。

そして同時に、神を取り込んだ漆黒のモンスターの異常さと、英雄の偉業をその場に残している階層でもある。

一度リヴィラの街で休憩を取り、早朝に出発を始めた。

「見れば一目瞭然だけど……中層のモンスターはどう、ベル君？」

「やっぱり個体差によるパターンの違いは上層よりも多いですね。でも骨格や体格である程度絞れるので、それほど問題はなかったです」

先日のダンジョン探索では到達階層を上層までに止めていた。リユウの判断で“技”を習得させるのが先と判断したからだ。事実リユウから学んだ技を主体にモンスターを倒しており、何より彼女の速さをメインに扱う戦闘はベルのスタイルに合っていて、上層とは比べられない量のモンスターが湧く中層でも問題なく倒せている。レベル3に至つてるとはいえ、探索二回目のダンジョン初心者が一人で、だ。

アリーゼとリユウの判断は正しく、一度経験させたモンスターとの戦闘は流れ作業の様
様に終えている。本来遭遇が難しい筈のレア・モンスターとの遭遇も彼のダンジョン周

期把握と幸運が重なり、中層までに出る殆どと遭遇している。何故かドロップアイテムも落としてる。

それもあつてリヴィラの街でのやり取りで少々時間を食ったが、最終的にはアリーゼの「全寄付！」宣言で終止符を打ち、こうして予定通りの遠征が続いた。

「とは言え、資料通りの出現数だと考えると、下層以降は今の僕だと単身は難しいですね。行くだけなら簡単ですが、モンスターを倒すのを前提にするなら後二人くらいは」
「単身で行かせるつもりはないから心配ないわ。……どうしたの、レトウーサ？ そんな下界にいる時の身体能力一般人な神様がモンスターを倒した時みたいな顔して」

「なぜそこまでピンポイントに言えるのですか。いえ、実際その通りという訳ではないのですが……何というか、彼のその、弓を扱う時の動作が……アルテミス様の動きと似てると言いますか」

矢を射るのだからそれは必中だ。そう言い切り、人並の身体能力にまで落としながらもモンスターを倒す神の「技」。それを幾度となく見ているアルテミス・ファミリア団長の「似ている」という発言に、その団員であるランテが「あ」と思わず溢す。

「ちよつと心当たりがあるんだけど……えつと、まさかとは思うんだけど、昨日のアルテミス様の言葉の意味を聴いただけで……？」

ベルにとって一番親しみやすいのは同類だ。『推し』に近い存在がいるベルとランテは部分的に似ており、接しやすい。故にアルテミスの事について質問しやすいのはランテだった。

先日の夜。まだ寝るには早い時間帯で、ベルはアルテミスの「矢を射るのだからそれは必中だ」という発言への意味を彼女の眷属に聞いた。ランテは出発前の出来事で戦々恐々しつつも、ライラの言葉からある程度のラインを推測して単純な会話程度は問題ないだろうと話を続ける。

アルテミスを見つけてきた——文字通り赤子の頃から神の御技を見つけてきたランテからしたら朝飯前に答えられる事だ。「訳が分からない」である。

矢が必中である事は弓を扱う者にとっての理想だ。某道化のファミリアに所属しているエルフは魔法という性質上そういう効果もあるが、アレはズルだ。ズルではないがズルだ。通常の弓で必中というのは理想であつておよそ現実的ではない。

何故なら弓矢はその性質上、射る者がある程度の腕前を持っては殆どが武器性能に依存されるからだ。直接振るう剣と違い、弓矢は放たれた時点で終着点が確立される。その

上、持ち手の能力には左右されない。全くという訳ではないが、相手が一定の能力値を越えれば弓矢は扱えない武器になる。何せ矢が放たれたら避ければいいだけの話だ。

が、恐らくアルテミスは一定の能力を超えても当てる。試すのは危険だから引き止めているが、当てるだけならばアルテミスは可能とするだろう。故にランテからすると「訳が分からない」の一言だ。

ただそれは過程の話であり、「結果」で言えばランテも想像は出来る。矢は一直線に飛んでいく。じゃあ敵に一直線だ。それがアルテミスの技だ。

ほら訳が分からないだと笑いながらも、ランテは丁寧^{ていねい}にアルテミスの言葉の意味を教えていた。そしてベルは真剣に考える。結論、レトウーサが発した言葉通り、ベルはアルテミスに似た技を使っていた。

「あ、いや、流石にアルテミス様の技は無理です」

そう。アルテミスの技は無理である。タケミカヅチの時の様に神の技をそのまま自分のものとする所業は、少なくともレベル3のベルでは不可能。レトウーサが感じた通り、あくまで「似てる技」だ。

同じ必中であれ、その性質は全くの別物。アルテミスの技は定められた様に敵へと当

たるもの。言わば導かれる様に、当たるべくして当たる技と呼んでいい。

対してベルのは、本来人間ではあり得ない膨大な情報量を捌ける脳を持つが故の圧倒的なまでの『予測能力』を活かした、敵の動きを読み切つて移動する場所に矢を〃置いている〃技。アルテミスが当たるべくして当たる技であれば、ベルの技は当てるべくして当てている技である。それは全くの別物で、アルテミスが相手の能力を無視した必中の矢に対し、ベルは相手の能力に限度がある。ただの人間が至れる極致程度ではない。

同じ動作、同じ構え、同じ射出タイミングであろうと、ベルとアルテミスの技では本質が違う。だから本当に似せているだけだとベルが苦笑して言えば、アルテミス・ファミリアの眷属達は絶句した様に口を半開きになっている。

「……? どうかしましたか?」

「へ? あ、いや! 何でもないです!」

「です?」

昨晚話していた時は気軽に接する様な口調だったのに急に敬語で話し始めるランテナに、ベルは思わず首を傾げる。何かおかしな事を言っただろうかと、恐らくこのメン

バーの中ならば一番「技」に長けているであろう輝夜に視線を向けると、彼女は肩を竦めて言葉を発した。

「武^{タイミカサ}神様の時とは違い、人の子の領域に収めているからこそその困惑だと見受けられますが……ベル、貴方様が今仰った技は、現状彼女達が目標とする地点です。それを基礎のみ磨き続け、つい数日前に神の御技を見たばかりの者が至れるというのは、どう考えても異常でしょう」

「……？」

「……アルフィアめ、一体どれだけの理不尽をベルに見せた」

すつとぼけているとか、自身の能力に胡座をかいているとかではない。アルフィアには擦りもしないだろうこの技が？ と、そう本気で困惑しているだろうベルの様子に輝夜は思わず溜め息を深めた。

ベルが技の会得に關しては並外れた吸収性を持っているのは今更な話だ。だがこの意識だけは何とかせねば、ベルの技習得までの一連の流れを見ただけで心が折れる者が出かねないだろう。

これを含めての「任せた」かと輝夜は、再び嘆息した。

「ふふ、ふふふ——何とも規格外。故に、ああ、楽しみですねえ……彼が最後の英雄へと至る時、その光景はどれだけ凄まじいものとなるのか。私が見れなかつたかつての英雄の一撃……それを超える、下界の悲願の一撃。ふふふ……んっ、何とも甘美。想像だけで五感が研ぎ澄まされていく」

「ワイトー、よだれよだれ」

「おっと、これは失礼」

一連の流れを眺めていたワイトーは恍惚の表情を浮かべながら、未来に訪れるだろう——否、未来に求められるその一撃を想像する。そんなワイトーから溢れる涎を指摘しつつも、アリーゼはベルの事を考える。

(……実際、とんでもないわね。アルフィアの訓練で積み重ねた努力があるとは言え、これで想いの残り火か……。でもこれだと足りないんだよね)

中層域を超えて、聴こえてくる滝の音。アリーゼはかつてエレボスが求め、そして応えた英雄の一撃を振り返り、ベルを見つめる。

(リオン、観光気分なんかじゃないよ。これは必要事項。彼が英雄へと至らんとするなら、必ず見る必要がある。人の極致でも神の技でもない、他ならない求められる英雄の一撃。それが齎す「偉業」を)

連絡通路を超え、やがて見えてくる広間。かつて漆黒のモンスターが生まれ、神を喰らい、それを英雄が倒した階層。かつての決戦の舞台。

「さ、ベル君！ ここが——今も尚再生しない、ダンジョンの唯一の階層よー！」

英雄の一撃で抉られた壁は、今も尚、炎の残滓を残してダンジョンの再生を阻んでいた。

正義冒険③

【英雄の一撃】

大鐘楼の音を象徴とし、沸る炎と迸る雷を放つ必殺技。そこに風の恩恵を上乗せする事で、英雄だけではなし得なかった絶望の討伐を可能とした、物語を締め括る一撃。

それを目にしたのは自身の義母と、アイズと彼女の母親ヴェ的な存在ア、神三柱にその内の一柱の眷属一人。きつと語られるだけでは凄さの片鱗しか分からなかっただろうその一撃は、後日談として追記された一文によりその偉業を広めた。

ダンジョンとは生きる迷宮。モンスターの母とも呼ばれる存在であり、そこから生まれる漆黒のモンスターのように破壊されれば再生が施される。絶対的な規則とも言うべき特性だ。

だがそれを無視し、英雄の一撃は今も尚ダンジョンの再生を阻んでいる。抉られた壁は炭の様に黒く、断続的に雷が奔る。直つては崩れ落ち、消えていく破片を目にし、ベルは瞳を輝かせた。

「あ、ヤバっ」

アリーゼは眩きを残すと、ベルが纏う外套のフードを即座に被せる。突然の行動にベルは反射的にフードを払おうとするが、それを輝夜が即座に押さえ込む。何かと視線を向ければ、輝夜はクイツと首を動かし周囲に意識を向けさせた。

そこには、下層に入るが故にすれ違う事が極端に減っていた冒険者のパーティーが複数。しかもほぼ全員アマゾネスだ。ダンジョン内にも関わらず装甲の薄い———というかほぼ下着同然の姿に水精霊ウンデイナーネ・クロスの護布を装備しただけの軽装。遊撃が主な種族なので装備が軽いのは仕方ないのだが、あれは最早装備と呼んで良いのだろうか。

自然と視線を外し、輝夜に戻した。

「ロキ・ファミリアの連中だ。英雄譚を聴いて来た奴らだろう。やはり此処に蔓延っていたか」

小さな声でベルにそう伝える。

面倒だと言わんばかりに顔を顰めてる輝夜を見て、ベルは「ああ」と納得した。自分

はかの英雄と瓜二つである。そしてロキ・ファミリアに数年前から入団し始めたアマゾネスはその英雄にぞっこんだ。伝え聞いた容姿だけで判断がつくとは普通なら思えないが、白髪で紅い眼の少年などそうそうおるまい。

普通に出会おうなら——リユーからの紹介だったり、アーディからの『英雄オタク仲間』として出会う形ならばまだ良かっただろう。だが今は【英雄の一撃】の偉業を残したこの階層。そんな場所で出会った時の彼女達アマゾネスの本能を想像すれば、アリーゼと輝夜の判断は間違つてないと思える。

何せ、派閥問題になりかねない。

「どうしますか、アリーゼ。今の時間帯を考えれば多少先に進んでも別の安全地帯にテントを張る事は出来ます。正直、ここはモンスターの誕生を阻む残滓はありますが、水面や空中にいるモンスターを考えれば先の安全地帯の方が危険度は下です。私としてはそちらを推奨しますが」

面識があるのか、そして顔を合わせれば面倒ごとがあると察しているのか。リユーも己のケーブに付けられたフードを被り、顔を隠している。

リユーの提言に対してアリーゼは数秒唸る。そうこうしてる内に物音に気付いたの

か、アマゾネスの視線はアストレア・ファミリアの団員へと向き始めた。その刹那、「よし」と頷いたアリーゼはリユウのフードを剥ぎ取りアマゾネス達に指さした。

「リオン、君に決めた!」

「へ、あ、アリーゼ!?!」

アマゾネス達の視線はリユウに移され、アーデイヤとあるアマゾネスの双子の妹とよく話している（実際は振り回されてる）エルフだと認識すると、その眼はターゲットを捕捉した様に暗く光る。

静かに歩み寄ってくるアマゾネスを傍目に、アリーゼはリユウの耳元で囁いた。

「ね、お願いリオン。ベル君にどーしてもこの残滓をじつくり見せておきたいの。連帯責任は取り消すから、ね? リオン、お願い」

「~~~~つ、わ、分かりました、分かりましたから! その妙に甘ったるくした声で囁かないでください!」

くすぐったそうに耳を押さえ、リユウは顔を真っ赤に染め上げて動揺する。アリーゼ

はゆっくりと離れてにつこりと笑った。

トボトボとアマゾネスの方へと向かっていくリューを見て、輝夜はジト目になりつつ呆れた様子で呟いた。

「団長様も大概 “たらし” でございますね……。 ……どうしました、ベル？」

「へ、あ、いや……。良い……。あ、いやつ、あんな表情は初めて見たのでびっくりしたというかなんと言うか別に脳内永久保存して繰り返し返して思い出してる訳では無いんですけどこうやってヒューマンとエルフは寄り添えたのかなって思うと感慨深くて——」

「……………」

「耳まであんなに真っ赤になるんだなあとかちよつと潤んだ瞳だと青みのある眼はあんなに幻想的になるんだなあとかちよつと興味が湧いただけでこれと言って変態的な思想になったわけじゃなくてそう幻想的な光景に見惚れたって感じで」

「いい加減黙れ」

「ひゃいつ」

思わずフードを押さえていた手で拳骨をかました。悍ましいモノの一端に触れた様に不思議と鳥肌が立った輝夜は腕を摩り、会話が聞こえていなかったアリーゼはその様

子を見て不思議そうに問い掛ける。

「どうしたの、輝夜？」

「いや、なに…… “理性” は大事だなと思わされたただけだ。団長の判断は正しかったよ。アマゾネスの本能を出させなくて正解だった」

「……？ 口調戻ってるわよ？」

何を言ってるのかと首を傾げるアリーゼに、知らなくていいと輝夜は首を振る。

◇ ◆ ? ◇

アストレア・ファミリアから離れた場所でリユーがアマゾネス達に話をしている中、音を遮断しながらアリーゼは会話を進める。

「どう、ベル君？ 本物の英雄の残滓を見た気分は」

「……凄いです。一度だけお義母かあさんの【ジェノス・アンジェラス】を覗くことがあるんですが、残滓だけでも明らかにそれを上回る一撃だつて分かります」

「……ちなみにアルフィアがその魔法を撃つたのつてどんな時？」

「アイズさんのガチの戦闘の時ですね」

その時は【シレンティウム・エデン静寂の園】を張り巡らせていた事もあり本来の威力とは程遠い。しかしそれで尚アイズの全力の“風”を相殺出来る程の破壊力だ。

だが仮にエンチャントを解除した状態のジェノス・アンジェラスだとしても、この英雄の一撃には届くまい。黒竜をも倒せるかもしれないと言いつだけ理由が確かにあった。

「まあいつか。でも残滓でそこまで分かるの？」

「はい。まあダンジョンに傷が残るといつ時点で異質さは分かると思うんですけど……まず根底の質から違います。魔法マインドって精神力の消費による魔力の顕現なんですけど、こう言うとおカルトというか……まあ理解し難い話になるんですが、人の“意思”みたいなモノが形として現れてるんです」

「お……う？」

「あー……魔法って、大体詠唱が必要になるじゃないですか？ スキルも似た様な感じなんですけど、詠唱の内容やスキルの効果って、その人の本質や想いを反映してる部分

が大きいんです。で、特に魔法に関してはマインド……間違はなくその人の“精神”を消費して発動してるので、詠唱文に綴られた意思っていうのが残るんです」

「……………えっと、ベル君はその意思が分かるって事？」

「分かる……のかな。感じ取れるというか、僕の完全記憶スキルの副作用というか、本来覚えられない筈のないモノまで覚えてしまうんです。例えば空気中の酸素量とか。なので残ってる残滓……魔力から、僕の脳に保存された情報との『擦り合わせ』が行われるんです。だから必ずしも分かると断言出来る訳ではありませんが」

魔法詠唱文やスキルにその人の想いが反映される事象は幾度となく記録に残っている。神の恩恵——人の可能性を広めた結果、人の想いに可能性を見出しているからだろう。

故に、その“意思”を含んだ精神消費による魔法の残滓は、ベルにとって読み取れる対象となる。とはいえ残滓が残ればの話だ。本来ならば直接発動する場面を見なければその精神を感じ取る事は出来ない。

「……………一つ聴きたいんだけど」

「はい？」

「読み取った精神から逆算して、魔法発動の感覚を覚え、一度見た魔法を使える——なんて事を出来たりしない？」

「……？ 無理ですよ、流石に。僕が出来るのは記憶の保存であって、保存した記憶の実現再生ではないですから。あくまでも僕は誰もが出来る “参考” をより幅広く、より細かく出来るだけです。スキルの効果にそういう特性があるなら別ですけど、流石にそれは……神様で言う『ちーと』じゃないですか」

「いやうん、ベル君の技吸収力も大概チートなんだけども。えっと、ロキ・ファミリアにそういう魔法が使えるエルフの子がいるのよ。同胞エルフの魔法に限るけど、一度見て詠唱を覚えた魔法を、召喚魔法との連結詠唱によって発動できる魔導士が」

「なにそのチート」

流石に見た魔法全コピーは無理よねーとアリーゼは安堵した様に笑うが、ベルはドン引きしている。同胞の技なら召喚魔法を通して発動可能？ いやまあ普通に考えれば、刻まれた魔法以外の詠唱や特性を覚えるのは相当に苦勞する事だ。とは言え覚えれば、連結詠唱という手間が掛かるとはいえ発動可能というぶつ壊れスキル。

まだ見ぬエルフの魔導士を想像し、ベルは絶句していた。

「あ、話逸らしちゃつてごめんね。それで、この残滓がアルフィアの魔法と根底から違
うっていうのは？」

「えつと……第一に、精神の種類が多い事。炎と雷は同じ質ですけど、そこに風が混じつ
てる。で、その風もまた異質で……アイズさんの風だと思っただけで、これが二種類
の“風”なんです。それを包み込む……いや、存在の位を跳ね上げさせる、強い願望。
魔法であつて同時に斬撃でもある。技の在り方の次元がまるで違うんです」

魔法とは本来、一人の背に刻まれた恩恵に発現した一人の“想い”の結晶だ。仮に二
人以上が魔法を同じ属性で、同じタイミング、同じ角度で放つたとしても、別々の魔法
としてカウントされるのが当たり前。

だがこの一撃は、幾つかの魔法。意思が、一つになって束ねられている。全く別の意
思を持ち、二人以上の意思がありながらも、それを一際強い願望が纏め上げているのだ。
単純な魔法では無い。明らかに異質であり、本来ならば放つ事など許されない、聖火
の如く燃え続ける美しき炎。

それを間近で認識したベルは、思わず魅入つてしまう。仕方あるまい。下層以降には
しよつちゆう来れるアストレア・ファミリアならば兎も角、この残滓を見たいが為にオ
ラリオに訪れる者もいるくらいだ。アストレア・ファミリアの遠征で何度か来てるアル

テミス・ファミリアの団員さえも、未だにその一撃を見て感嘆してしまふ。

胡座をかいて見続けるベル。残滓に触れようとすると引き止めるつもりだったが、この様子なら見る以上の事をするつもりはないだろう。アリーズはベルから聴いた音の遮断領域を思い出しつつ、テントをどう張ろうかと頭で展開する。

壁付近はモンスターの生まれもなく、既に湧いているモンスターもその残滓を恐れて近付かない。仮に寝てても、だ。壁に傷がある近くの場所ならば間違ひなく安全地帯と化したこの場所で、アマゾネスと少し距離を離れた場所がベストな位置。何せ英雄なんだかんだの話はさて置き、アマゾネスという特性上、「男」の存在があるならば夜這いを仕掛けかねない。これが双子の妹ならば自重が働くが、あそこまで性に関心が働かないアマゾネスは寧ろ珍しいくらいだ。

アイズセコムのスキルがある以上、襲われそうになれば守られる事は間違ひない。だが身近にいながら守れないのかとアイズには思われるだろう。ついでに手を出したアマゾネスには後で天誅が下される。ランテの時のような不可抗力なら兎も角、推測が簡単なこの状況ですら守れないようなら、アイズはフレイヤですら約束を守って自重してる誘拐をしかねない。その程度の事なら容易く出来るだろう。アルフィアが味方に回るなら兎も角、襲われたら彼女も間違ひなくアイズ側に回る。

まあ取り敢えずテントさえ張って中にさえ入れれば、リユーが気を引いている以上特

に大変な事でもない。特にアストレア・ファミリアは女性中心だ。ギルドで騒ぎになつていたとはいえ、英雄ではなくベルについての事情が詳しくない彼女達にとつて、アストレア・ファミリアの新米冒険者はただの新米でしかない。ギルドにはアルフィアが事前に伝えていた事もあつて情報の統制は引かれてるし、まさかいきなりこの遠征に着いてくるとは考えていま。フィンもその辺りは上手く気を回して特に何も言っていないだろう。

「男」への意識は出来るだけヴィトーとゴブニユ・ファミリアの眷属に向けるように、男性組のテントの設置は彼らに任せよう。中層での行動は殆どベルが中心となつたので、彼を休ませる大義名分はある。

では早速――。

「……………ッ！」

アリーゼはヴィトーへと向けようとした顔を弾かれたようにベルの方へと戻す。迸る雷鳴がベルを貫いた音がした。何かあつたのなら最早手遅れ。だが、勘は警鐘を鳴らさない。

冷や汗を垂らしてベルを見つめるアリーゼに不信に思つたのか、輝夜が彼女へと話し

かけた。

「どうかしましたか、団長様？」

「……ねえ輝夜、一瞬だけ大きな雷が迸るような音しなかった？」

「……？ いえ、壁に刻まれた雷が断続的に弾かれてはいますが、一際大きく鳴るというのはありませんでした。ライラ、貴方は聴きましたか？」

「いや、別に何も。つかアタシよかネーゼに聞けよ。獣人の方が耳は良いだろ」

「や、私も何も聴こえなかったよ。まあ時々雷の音が大きくなるっていうのはあるけど、団長が反応する程の音はなかったなあ」

不思議そうに向けられる視線。アリーゼは己の「勘」が捉えた何かだと判断。身体を伸ばすついでに自然と汗を拭い、いつも通りに笑いながら言葉を放つ。

「あつはは、雷の断続的な音が私の閃きと重なっちゃったかな☆」

「どーせ下らない閃きだろ。取り敢えずテント立てようぜ？」

「うんうん、それもそうね。ヴィトー、ベル君達男性側のテントは任せても良い？」

「ええ、無論ですとも。距離はどの程度で？」

「周囲の警戒にベル君の『増幅』を付与して、全体が即座に動けるようにしておきたいから、特に離さなくても大丈夫！」

分かりましたと頷くヴィトーを見て、アリーゼは次いでベルに視線を移す。

「ベル君、取り敢えずテントの設置はやっておくから、貴方は満足するまで見てていいわよー！」

「え、流石に僕も手伝いますよ？」

「いいのいいの！ 中層までは殆ど貴方に任せてたし、休憩の意味合いも兼ねてるから！」

確認事項だと自然にベルへ言葉を掛け、彼に特に変化がない事を確認する。自分の気のせいならばそれで良いと、アリーゼはホッと一息ついた。

そんな様子のアリーゼを見て、輝夜は目を細める。

(……団長の『勘』は、^{プレイヤー}【勇者】のそれとはまた違った特性だ。危険への感知だったり本人の思考能力もあって遥かに劣るが、恐らく神に近い感じ方をしてる。人を見抜く力

と言うべきか)

そのアリーゼが見せる動揺。イレギュラーが起きた……と、断言は出来ないが、普通と違った何かを感じたのは間違いないだろう。

ベルに向けた視線は彼の変化を感じたか。しかし当の本人は変わった様子もなく、今もまだ残滓に見惚れている。

輝夜は溜め息一つ。

「アリーゼ」

「へ？ 珍しいなあ、輝夜が名前呼びなんて。普段は口調が戻っても様が付かなくなるだけ——」

「お前が気を使うように、私達も気を使う。だから話せとは言わん。共有しろとも思わない。なんであれ、お前が特別な存在でもない下界の子供、アリーゼ・ローヴェルだという事は私達が思ってたやる」

「……急にどしたの？」

「なに、ただのお節介だ。余計なお世話とでも思えば良い」

ふと笑みを溢して手を振り、テントの準備だと言わんばかりにアルテミス・ファミリアのサポーターの下へと向かう。

アリーゼはパチパチと目を開いては閉じるを繰り返して、汗を一つ垂らしながら苦笑い一つ。視線をライラ達に向けて見れば、先程の発言からは想像できない程にアリーゼを気に掛けている。

「余計なお世話……余計なお世話かあ」

アリーゼは一言、先程の輝夜の言葉を復唱すると、ベルの隣に座り込む。

「ねえ、ベル君。さっきまでの道中で一回私の魔法を見せたと思うんだけど」

「あ、はい」

「その時に読み取った『想い』って何だった？」

「……えっと」

「遠慮はなしで」

「わ、わかりました。ええっと……寂しがり屋、ですかね」

「うんうん」

領き続きを促す。そんなのは分かりきってた事だ。表面上は良いから本質をと問うアリーゼに、ベルは頬を搔きながら、アリーゼの精神を思い出す。

「で、自分の在り方に誰よりも疑問を抱いてもいる。強くて勤が良いから、他人との差異を明確に感じていて……だから先ずは氣を使う。アリーゼさんの段階強化は何というか、相手に合わせる為というより、自分の位を相手から遠ざけたくない為って感じがあります。言ってしまうと、普通の少女でありたい的な」

「ふむふむ」

「自分の為に相手に氣を使う。寂しがり屋だから、離れさせたくないが為に、近く見えてその実相手との距離を適切に凶ってる」

「魔法見せてから心なしか距離が近かったのは、それを読み取ったから？」
「えつと……あはは。よ、余計なお世話でしたかね……?」

——生まれて、少し育って、他人との差異を感じるようになった。自身の内の正義と、他者よりも強い肉体。それを受け入れてくれなかった故郷と、それを受け入れてくれたアストレア。

そんな過去があつたから、アリーゼは同胞正義を求めた。ライラや輝夜に比べれば些細なもので、決して苦しい過去なんかじゃない。でも間違ひなく他人より優れた「勘」で経験した過去に縛られて。まるで、一人では寂しくて死んでしまふ「兎」のように他人を求めぬ。

かつての英雄を「兎」と呼び続けたのは理由があつた。故郷の時の己と重ね合わせ、どうせお前は一人で成し遂げる事はできない。例え特別な存在であつても、願望に支配されて一人悲しく死んでいくのだぞ、と。そんな無意識な醜い感情があつた。

でも英雄は普通の少年だつた。簡単に他人へと踏み込む。簡単に他人を求めぬ。簡単に他者に受け入れさせる。そして、全てを救つて見せたのだ。

「——ううん、嬉しい。ありがとう」

はにかむような薄らとした笑顔で、微かに頬を赤くしながらお礼を告げる。団長を気に掛けていた団員達はその様子にギョツと目を剥いた。アリーゼの笑顔は数多く見てきた。にへらと態度を崩すような笑顔だつたり、彼女を象徴する様な満面の笑顔だつたり。

でもあんなのは見たことがない。正義を率いてきた団長が、あんな——儂げな普通

の少女の様に笑うなんて。

「ね、兎くん」

「……？ ぼ、僕の事ですか？」

「兎くん」

「………は、はい」

「私、貴方に嫉妬してたんだ。正義なんて吹けば崩れ去る時代の中で、リオンの在り方を強くして、輝夜に理想を求めさせた貴方に」

リユーはアマゾネスの相手をしている。輝夜は氣を利かせて声の届かない位置に移動した。ならば、今思う本心をぶちまけても構うまい。

「そして二人にも嫉妬してる。だって諦めたじゃん。描く理想のままじゃ無理だって思い知ったじゃん。でも思い出して、英雄に惹かれてさ」

「……」

「あーいいなあ！ 私も変えてくれないかなあ！ 全面的に余計なお世話だけを掛ければ、昔の私に戻りたいなあ！」

「——戻れてるじゃないですか、今」

「……ふふ、そうかな？　どういう所が？」

「感じるままに、呼んでるじゃないですか」

「あはは、そっか。やっぱりそっか」

訳が分からない会話だ。聴いてるだけでは到底理解し得ない二人の会話。アリーゼとの付き合いが長いアストレア・ファミリアの団員でさえ困惑するほか無い。輝夜ならば分かるだろうか。リユーならば分かるのだろうか。だが二人は此方に視線を移さない。

頭の回転で言えばファミリア内でも随一と言つていいライラでさえ困惑している様子だ。

「うん、ありがとう。ベル君」

「……？　どういたしまして？」

何なら会話をしていた本人^{ベル}でさえも、お礼を言われて困惑している様子だ。一体何を理解し、何に納得したのか。

——まあいいかと。彼女の勘は今に始まった事ではない。それが今回余す事なく自分達に理解できない範囲で及んでいるだけで、アリーゼ自身が理解しているのならば問題ないだろう。

「……よし！ 折角だからアマゾネス達も巻きこんで英雄譚でも語りましょうか！」

「んあ……良いのか？ コイツの件で一悶着起こる可能性があるぜ？」

「ダイジョブ！ 私や輝夜が居れば抑えられるだろうし、別人だつて分かれば本能のままなんて事はないでしょ？ 強き者を求めるアマゾネスからしたらベル君って弱そうだし」

「え」

「それに、ベル君もアマゾネス達とは語って見たかつたんでしょ？ ならこの機会に見聞を広めておきましょうか！」

先程までの儂げな声音と雰囲気は消え、いつも通りのアリーゼに戻る。否、少し違うだろう。いつも以上に遠慮なく言葉を投げかけている。

「それに万が一喰われたのなら、上書きしちゃえばいいかなつて」

「あ、おいバカその発言は——」

「ん、どうかした？」

「……………マジか」

ポツリと呟いた発言を聞き逃さなかったライラは思わずアリーゼに寄って口元を抑えようとするが、身長差で届かない。明らかにベルを軽視したような発言だ。某二人の最強セコムが黙ってない。……筈なのだが、あつけらんとした様子でライラの行動に疑問を浮かべるアリーゼを見て思わず絶句する。

あ、やべえ。コイツ言葉の軽さに反してガチだ、と。

リユーと輝夜はベルに英雄の面影を重ねつつも、決して同一人物として扱う事はない。彼女達の英雄への好意とベルへの好意はまた別物だ。

が、アリーゼはベルに対して英雄を重ねる事もなく、ただ純粹にベルを……。

「あ、ベル君！ 忘れてたけど、コレ渡しとかないとね！」

「へ、あ、【リアライズ純紅の刃】ですか!？」

「ふふーん、私が要望してシンプルな柄から色々加えてもらったのよね！ ここの翠玉エメラルドの装飾とか良くない？ 白い稲妻みたいな模様もカッコいいと思うのよね！」

「……」

いやこれマジだ。本来なら渡そうとする筈もなかった武器を渡してるぞコイツ、と。ライラは自身の瞳を思い出させる翡翠色の円形魔道具を装着した武器を見てそう判断する。元々自身の予備武器として用意していた筈だ。アリーゼはそれを躊躇なく渡していた。

キラキラと輝く眼で渡された武器を見つめるベル。その彼の腰に帯刀された【純水の刃】ユナイトウェールを視界に入れたライラは、思わず自身の腹を押さえた。

「胃が痛い。助けてくれアストレア様」

無理、と。笑顔で告げる己の主神の幻影を想像して、ライラは乾いた笑いを溢していた。

正義冒険④

下層と深層は一線を画す。

そも、深層という言葉が指し示す領域は、三十七階層から下の全てだ。では最初の方はまだ安全な方なのではないかと第三級冒険者は思う。踏み入れたことのない領域だ。まさか深層が全て同じ難易度という訳ではあるまい。

結論から言えばその通り。当然同じ難易度な訳がない。しかし下層最下層とと深層最上層は全くの別物だ。深層は入り口から明らかに難易度が跳ね上がる。上層から中層への変化とは比べ物にならない濃密なまでの死の領域。

まず、安心出来る時間がない。一分の油断が命取りになる。もし足を踏み入れるなら確実に事前情報を仕入れておかなければならない。それはモンスターの数と、比にならないモンスターの生産速度。そして何よりも、その広さ。

四十階層からはオラリオと同等の面積にまで広がるといふこの階層では、道に迷った時点で死に一直線である。未だに未開拓領域が多々あるとされるこの階層からは当然

イレギュラーも多い。というよりは、イレギュラーが日常のようなものだ。

求められる能力値は上がり、求められる冷静さは上がる。適正值へと至ったからと言つて潜れば、まず間違ひなく生きては帰れない。よしんば帰れたとして、まず間違ひなく狂う。それが深層だ。

それは多少慣れても大きく変わる事ではなく、徒党を組んだとしても深層に入るたびに肌がヒリつき、緊張感に包まれる。

—— 筈なのだが。

現アストレア・ファミアにはサポートとして理想とも呼ぶべき人材がいる。地形構造、正確な時間把握。それを完璧に捉えられる完全記憶スキルの持ち主。

そして彼にダンジョンについて教えたのは、現在四十九階層に単独で向かっている最強冒険者だ。

モンスターの生産周期は兎も角として、オラリオに来る前から叩き込まれたダンジョンの地形構造は全て頭に入っている。それこそレベル3の身でありながら単独で深層に行ける程に。

道に迷わない。時間の把握が完璧なので体感が狂う事もない。

ともすれば、第二級と第一級で構成されたアストレア・ファミアにとっては、深層の入り口程度ならば下層同然とも呼んでいい程順調に進められる。

やっぱりズリイなそのスキル、と。今まで団長と共にダンジョンの進む道を揭示していたライラはジト目でベルを見ていた。ついでに下層での胃痛の恨みを込めて。

先日のアマゾネスとの出会いを経て、ベルは何も知らないまま大人の階段を登りそうになった。いや厳密には意識がある状態なのだが、アマゾネスに将来有望そうだと認識されたベルは、「強くなる手段」と言われて喰われかけた。ライラが止めに入らなければ本当に喰われていただろう。そしてアマゾネスはポコポコにされていただろう。彼女達のフアミリアの幹部アイズに。

アマゾネスの言葉に嘘偽りはないのだが、ニュアンスが明らかに違う。(男として)と付くような言葉を意図的に隠しただろう。会話の流れからベルの性格を把握して、彼がそれに気付かないことをわかっていて。リユーは引き止めていた事もあって疲れた様子で先に寝ていたし、輝夜は周囲の警戒。アリーゼは英雄譚の話をしていた当事者という事もあって一緒にいたのだが、何処か興味を持つような視線でアマゾネスを見ていた。

もしや「参考」にでもするつもりかと思ひ、止める人物がライラや他の団員しか居なかったのである。アルテミス・フアミリアでは同レベルだとしても押し切られる可能性は高い。そもそもその話として言えば、下層まで数人のパーティーで来てる以上レベル3以上で構成されると考えて良い。

お陰で話に付き合わされた挙句にアマゾネスの警戒で出発時間に遅れた。この兎野郎がと恨みがましい視線を向けていると、突如ベルは振り返る。

ちよつとした殺意が芽生えていたからそれを感じされたのかと思うが、ベルは左手のガントレットに仕込まれた小サイズのハンマーで壁を叩き割る。微かな灰を流しながら崩れ瓦礫となる光景を見届けて、ライラはまたも呆れた様子でベルに向かつて放つた。

「なあ、お前実は周期も既に分かってんじゃねーの？」

微かな灰——モンスターが倒された跡。モンスターが一番無防備となる産まれた瞬間に倒すという、偶に“勘”が研ぎ澄まされた冒険者が行うその行動を深層に入ってからずつとしているベルを見て、ライラは問いかけた。

ベルは質問を想定していたのか苦笑し、答えた。

「いえ、周期はまだ分かってないです」

「じゃあ何で分かんんだ？」

「魔法です。ダンジョン自体に“増幅”を掛けつつ、僕の聴力を“強化”。そうすると

ほんの少し何ですけど、モンスターが産まれる独特の音というか……あ、そうだ。胎児がお母さんの腹を蹴る音、つて感じですかね。それが聴き取れるんです」

「……精神力は保つのか、それ？」

「完全記憶の事もあるので、使い続けると一時間くらいが限度ですが……余分な情報との変換で、大体一時間半。後は輝夜さんとデイアンケヒト・ファミリアに行った時にマジック・ホーションで精神回復薬を少し多めに用意してもらおうように頼んだので、遠征予定期間とズレなければ大丈夫です」

付与魔法はよっぽど強力なモノでもない限りは燃費が良い。無論長時間の使用は相応の消費を伴うが、一発の強力な魔法と比較すれば圧倒的に差がある。

その分必殺としての役割は薄れていくが、巨大モンスターでも相手にしない限りは有用な魔法と言える。

ただしベルの場合、そこから更に燃費が良くなる。何せこの音属性の付与魔法は攻撃力はほぼ皆無。通常の付与エンチャントと同様の使い方は出来るが、正直魔力による強さであって属性による補正というのが全くない。

何よりベルの扱う「音」は、生成しての付与ではなく既存の概念を変化させるものだ。故に通常よりも長時間扱える。

そして「完全記憶」は精神力の消費であらゆる情報を脳内に保存する事が可能。ベルはそれを常時発動させており、余分な情報——先日ベルが自身で言っていた酸素量など。それは何も現在のではなく、今まで行動してきた範囲と時間の全てを含めてだ。そんなモノは何の必要もない情報。消しても損はない。

当然魔法を使う時の精神力の消費と釣り合う訳ではない。しかし完全記憶と音魔法を常時発動させて一時間以上もの間保つのは、それが理由だ。しかし完全記憶と音魔法を何事も効率的に、全ての最善を選べる。それだけの能力が備わっている。

「……お前一人で良いんじゃないの？」

「いやあ、流石にそれは……」

「冗談だよ。つか一人では行かせねーよ」

戦闘能力——は適正値までとするにしても、階層の移動ルートの全把握や一人でも狂わない時間感覚、そして索敵能力、及び近場に限れば産まれる前に倒すという手段が取れる冒険者。

冒険者としても、サポーターとしても能力が充実している。自己完結し過ぎだろとライラは溜め息を吐いた。ネーゼは「親子揃って私の役割を……」と獣人特有の耳の良さ

での索敵を上回る能力を見せつけられて少し落ち込んでいる。

「しかしまあこれなら——」

「ライラー、油断は？」

「……あーい、しませんよ。だからアストレア様に似たその笑顔止めてくんねえかな、团长」

怖いんだよ地味に超越存在デウスエアっぽい雰囲気出されるの、と。時折見せる、笑顔なのに笑ってない表情を向けられたライラーは顔を顰めた。

とは言え、ライラーの気持ちも分からない訳ではない。深層では常に息を張り詰める状態が続くものだ。それをサポーターが一人居るだけで八割ほど緩和出来る。本人の負担もそれほど大きくない為、本当に「一家に一台ならぬ一ファミリアに一人だな」とその場のベルを除く全員、心の中でライラーに同意した。

「……ああ、そういえばアリーゼ。聞き忘れていましたが、アルフィアはなぜ今回の遠征には参加しなかったんですか？」

「ん？ あー、うん。今回の目的はベル君のダンジョン慣れでしょ？ じゃあ先に役割

を奪う訳にはいかないからって事で、今回は見送ったの。アルフィアの場合ほぼ反射的にやっっちゃうからね」

たった今ベルがやっている生産直後の討伐だったり、階層移動のルートだったり、アルフィアも可能な事。まあそもその話としてダンジョンについて教えたのが彼女だ。ベル以上の速さでダンジョンに対処出来ると言っても良い。

しかもベルのは理屈で言えば領けるモノだ。スキルの効果がぴったりとも言える。しかしアルフィアの場合はダンジョンへの適応力が高過ぎるが故であり、理屈ではなく直感で全てをこなしてしまう。ベル以上の速度で、だ。

反射的に出てしまうからベルよりも早く対処してしまい、ベルの成長や慣れを妨げる要因になる可能性が高い。故に今回は別行動。

慣れさせるのならアルフィアが手出ししなけばいけない話なのだが……中々難しい。ダンジョン、主に深層に慣れるという事は、イレギュラーへの対応・適応を素早く行う必要がある。逆に言えばイレギュラーがベルの身に起こらなければ意味がないのだ。アルフィアの場合イレギュラーが起きる前に対処。或いはベルに襲いかかるイレギュラーは反射的に排除しかねない。

なので、心苦しいが——アルフィアにはアストレアから遠征待機命令を出された。

単独ならばダンジョンに行っても構わないとの事なので、せめて一番死に直結しやすいだろう階層主のイレギュラーを避ける為、彼女は今49階層に赴いている。そのついで37階層のウダイオスも倒されていた。

ウダイオスは元々避けて通る予定だ。後にロキ・ファミリアと団員を共有して倒す予定だっただけなので何も問題は無いのだが……。当然の様に単独で階層主の討伐を成し遂げるアルフィアには戦々恐々とせざるを得ない。

「まああつちはマジの意味で一人で良いなつてなつちまうしな」

ベルの場合は能力値が足りて無いが故に、一人で出来る能力はあつても決してさせるつもりはない。が、アルフィアの場合一人で対処出来る能力値も術も揃っている。

ベルは揃えて、アルフィアは最初からあつた。そんな明確な違いはあれど、やはり似たもの親子だ。

「……取り敢えず、僕が出来るのはルートの提示、索敵と生産直後のモンスターの討伐くらいです。多少のサポートや少ないモンスターの相手ならば可能ですけど……真正面きつての戦闘は皆さんに任せます」

「充分すぎるわ、もちろん任せてっ」

「物足りないと思っただけです。ベル、そろそろ来るのでは？」

「——真正面から七体、後ろから二体。全部スパルトイ、武器は前が剣3の槍2、斧2。

背後は双刀1に剣1」

「オーケー。リユーとセルティは背後を、ベル君はその援護。ライラとアスタはサポートー達の護衛、その他は全員前の対応。ベル君、随時生産直後のモンスターの注意を怠らずに、私が出せない指示は任せるわ」

「はい！」

対多数の白兵戦ではアストレア・ファミア最強格の輝夜を筆頭に、前には人数を掛ける。背後には双刀と剣。剣は兎も角として、双刀は手数と投擲に優れた武器だ。ともすれば「速さ」を突出させた人材を置くべきと判断し、リユーを抜擢。セルティとベルはその補助だ。

「……あ、リユーさんっ、こっちの方にオブディシアンソルジャー黒曜石の身体を持つモンスターが二体現れました」

「二体ですか？ ……珍しい、が。ならば対処を変えましょう。クラネルさん。スパル

トイであれば補足次第5秒で片付きます」

「！ わかりました。 レトウーサさん、弓と矢を。 リューさん、ソルジャーとスパルトイを同時に相手はしません。 距離感は近いですが、離れています。 先にスパルトイを倒しましょう。 2秒で片付けて下さい」

「……お任せを。 セルテイ」

「ええ、分かっています」

エルフ二人によるアイコンタクト。 言葉少なに、詳しい内容もなく頷く両者を見て、ベルは思い返す。 そういえば先程のやり取り。 自身とアリーゼのやり取りの後のアリーゼの指示にも、大きく返事を返す者はいなかった。 他派閥のヴィトー達を含め、頷く以外に言動はなかった。

同派閥故の以心伝心、だけではない。 声を出さないことによるメリット。 いや正確には、大きな音を出さないが故に発生させない利点。

(そっか、モンスターも音に引き寄せられるから……ソルジャーの登場は僕の大きめな返事に反応したのか)

でも一つ疑問だ。それならば先に声への注意を促していた筈。忘れていたにしても、先程のやり取りの失敗によって静かにする事を促すジェスチャーを送っても不思議ではない。なのに誰も送らない。

ともすれば、これは試し。二重の試しだ。ベルが深層のイレギュラーにどれだけ警戒して抑えられるか。そして、深層のモンスターがどれくらいの音で反応するのか。この二つを同時に試してる。

ベルはアストレア・ファミリアに入って間もない。完全記憶があるにせよ、まだ全員の間ともな戦闘すら見れていない現状だ。ともすれば、ベルが言葉なく合わせるなど不可能に近い。声を出さなければ連携など取れるはずもない。

今回は一先ず指示を終えたので大丈夫だが、この後からの調整を考えてベルは頭を悩ませた。

(……理解が早い。アルフィア……から教えられていたのなら、そもそもあの返事をする筈がないか)

完全記憶があれば注意点を忘れる筈もない。リユーとしてはアリーのこの音量確認は早計かと思っていたが、注意する必要もなく気付くのであれば問題ないだろう。自

身の認識を更新し、視界にスパルトイが入った直後に飛び出す。

セルティはリユートの影に隠れて疾走。二人が重なっているお陰で射程幅は広い。ベルは弓を構え、三本の矢を続け様に放つ。唯一リユートの動きだけは「技」を見せて貰った時に熟知していた。彼女の疾はやさと技量は熟知している。スキルの効果も。セルティはリユートを追隨してゐる為に彼女の動きも理解できた。

故に、三本の矢は二人を避けてスパルトイに向かつていく。曲射にも見える弓の射出は、丁度リユートが接近すると同時にスパルトイの下へと辿り着く。矢はスパルトイがリユートへと振るつた武器を全て弾いた。

武器への対処が無くなれば防衛が必要なくなる。止まる必要がなくなる。加速し続ける妖精の動きは停止を知らずにスパルトイの魔石を破壊し、続け様にオブディシアンソルジャーへと向かつて行つた。

リユートがスパルトイを倒す動きを見せたと同時にセルティはそのまま真つ直ぐオブディシアンソルジャーへと向かつていき、二体とも蹴り上げる。動きが取りにくく、一番無防備な姿。元々動きの遅いモンスター、反撃などできる筈もない体勢。

その無防備な姿を、加速する妖精は叩き割つた。レベル5の臂力はもちろん、精神装填マインド・ロードと疾風奮迅エアロ・マナによる力の強化。そして発展アピリティ【狩人】によるステイタス補正と、大聖樹の枝から作られたアルヴス・ルミナとアルヴス・ノクスの二刀による破

壊力。

リユーは種族特性もあり、特別力に優れているとはあまり言えない。しかしスキルやアビリティによる補正と武器性能により、黒曜石程度は容易く破壊できる。

「クラネルさ——」

倒した直後の油断。冒険者にはよくある話で、特にダンジョンの経験が少ない者ほど死の危険性が高い。長い耳を揺らして壁の綻びを聴いたリユーは、記憶とは違う凸凹の位置を把握して、その近くにいるベルに声を掛ける。いや、掛けようとした。

その時には既にベルは籠手に内包したハンマーを振りかぶっており、リユーが駆け出す前に壁を抉った。

「ふう……。あ、どうかしましたか？」

「……いえ」

抉る、だけではなかった。取り敢えずは安全圏からと思っただろう。ベルはハンマーで叩き割る瞬間に【遮断】を掛けて破壊音を防いでいた。油断も隙もなく、既に湧

いていたモンスターを倒した後に流れ作業の様に生産直後のモンスターを倒す。

(一々驚くのはやめよう。警戒こそ外さないが、心配無用に違いはない。……私が過保護過ぎるのだろうか?)

アリーゼはかなりベルを見極めて“試し”を繰り返しているし、輝夜は既に連携を取るための観察をしている。“心配”など然程もする様子の無い自分を除く第一級冒険者の二人の行動を振り返り、リユースはベルをまじまじと見つめながら考え込む。

「あ、あの……?」

「……………」

「えつとお……」

「……………」

「……………つつつつ」

「ど、どうしました? スキルの過剰使用で副作用が……!?!」

ボンツ、と。暴発でもしたかの様に顔を真っ赤に染め上げて目を回すベルを見て、

じつと見つめていたリユーは慌てて近付きおでこに手を当てる。

「熱い。しかもドンドン上昇している……! あ、アリーゼ。彼に無理をさせるのはやはり良くないのでは? 幾らスキルの補正があるとはいえ、ここまで頭を使うとなると

副作用もそれなりの——」

「あ、うん。取り敢えず離れた方がいいかな? ……ポンコツエルフだなあ」

「ポンコツエルフだ」

「ポンコツエルフですね」

「今私を詰つてどうするのですか……!? く、クラネルさん。目を覚まさない。クラ

ネルさんっ?」

「……ネーゼ? 見てて面白いし、暫く索敵お願いしてもいい?」

「良いけど……深層なんだし、程々にしなよ?」

平常運転だった。成長はしている筈のだが、やはりアストレア・ファミリアに皆より遅く加入したという事もあり、リユーは末っ子だ。ポンコツつぷりは治つておらず、皆が呆れる中でリユーは声量に気をつけつつもベルの頬をペチペチと叩いて起こそうと頑張っていた。

正義冒険⑤

「——疲れた!!」

身も蓋もない心からの叫びである。

到達目標である48階層。ダンジョンに入ってから四日目にして到達した階層の安全地帯にて、アリーゼは地面に倒れながら叫んでいた。

「団長様、せめて下に何かを……それとベルの魔法があるとは言え、あまり叫ばず。深層の安全地帯は確実では御座いませんから」

「あー、うん……リオン、膝枕あ」

「わ、私ですか？ ええと……はい」

何も敷いていない地面に突っ伏しているアリーゼは、当然の如く汚れる。……まあ

元々装備の方は土だったりの汚れが付いていたので、そう変わりはないのだが。

深層の入り口でのベルとの一連のやり取りで時間を掛けた負い目があるのか、リユーはアリーの発言に従い自身の膝の上にアリーの頭を乗せた。

48階層へと上がるまでのやり取りの中で、ベルは「音」の限度を理解した。なので完全な遮断ではなく調節した【遮断】で可能な限り精神力の消費を抑えてはいるが、それでも四日もの間使い続けるのは疲れる。

戦闘には極力援護しかなかったので、身体的な消耗こそ少ないが……ダンジョンへの警戒も合わさり、精神的疲労はかなり溜まっている。まだ限界ではないが、アリーの様に叫びたいのが本音だ。

「まさか【静寂】を抜きに48階層までここまで楽に来れるとは」

「……これで楽な方なんですか？」

「ええ。私もアストレア・ファミアに何度かお供しているので存じていますが……幾ら第一級と第二級のみとは言え、少数精鋭である事に変わりありません。掛ける時間こそ短くとも、一人一人の気の張り様は神口キ、神フレイヤの派閥とは比になりませんか」

索敵やルートの提示を全てベル一人でやっていたが故に、他の眷属達は基本戦闘のみに集中できた。確かに疲労は高く、アリーゼの様に叫びたくなる者も多い。しかし。

「今までならば叫ぶ余裕などもなかったでしょう。……ああ、貴方様の【遮断】は関係なくです」

声を出す余裕もない程に疲れるのが今までだ。アルファイがいれば別だが、居ない状態でここまで余裕を持って来れるのだから、今回の遠征は大成功と呼んでも良い。というか呼ぶべきだ。

「ギルドに言った手前48階層まで来たけど……必要なアイテムはとくに集め終わってなかったしなあ」

リユウの膝の上で思わず呟くアリーゼに、リユウはチラリとベルを見る。深層入り口の時はマジマジと見つめすぎて倒れさせてしまったので、気付かれない程度にだ。

同時に輝夜もベルを見ており、二人は戻そうとする視線を重ね合わせた。

(……六年前の魔石集めの件といい、クラネルさんが関わったモンスターの「質」が良すぎる)

(ともすれば、加護でもあるかの様な……運の神様にでも愛されているのかと思う程に、ベルはどこか恵まれている)

そして思い出すは、たった数度の六年前の「英雄」とのダンジョン探索。あの時も異様に魔石の質だったリドロップアイテムの確率が高かった。

輝夜とリューは互いから視線を外し、遠征での目的であるアイテムが入ったバックパックを見つめる。

「やっぱり幸運の兎ね！」

そんなリューと輝夜の思考を理解したのだろう。リューの膝の上でカツと目を見開き元氣よくドヤ顔で告げるアリーゼに、苦笑して同意した。

スキルの詮索は、例え同ファミリア内でもマナー違反だ。もちろん普段使いしてれば分かるし、知っていなければ支障が出かねないスキルならば教えるべきではある。だが人の可能性には直接戦闘には関係ないモノも当然数多く存在しており、それを当人が

どう思っているかは定かではない。リユールと輝夜は六年前にも似た光景を見たからその辺りのマナーを無視して思慮を深くしてしまった。

しかしアリーの一言は「ステイタス」ではなく、ベルの存在そのものが「幸運」だと称する。決して二人の思考から外れることはなく、かと言ってマナーを違反する発言でもない。流石の配慮だと理解した二人は、深層入り口で思った事を再び思考した。

ああ、色々な意味で一ファミリアに一人いて欲しい人材だと。

「……団長様。お疲れのところ申し訳ありませんが、これからの方針について話しましょう」

「ん、話す必要はないわ。一日の滞在一択」

——まず大前提の話として、今回の遠征予定期間は普段通りの組み立てで行なっている。本来ならば48階層まで来るのに、プラス1日の五日間を要する筈だった。その上付近のモンスターを狩って、目的のアイテムを集める。それがアルフィアがいない時の普段の遠征だ。

しかしベルのサポートで疲労が緩和され、ルートも迷いなく選べ、イレギュラーも起こらず……正確には、起きてても速攻の対処が出来た為に、予定よりも一日早く全てが終

わってしまった。

ともすれば、ここに滞在する理由もない。疲労の回復は優先だが、一日の時間を使う必要もないだろう。それ故の輝夜の“これから”の提案。

「わぶっ」

「っ……アリーゼ、起きるなら起きると言ってください」

「ごめんごめん。……あれ、また成長して……いやうん、今はいつか。エルフの成長速度とかおっぱいの話はまた後でするとして」

「後でもやめて下さい」

「一日滞在の理由は大まかに二つ。一つ目はベル君の“慣れ”を深める事。48階層^こまで急突進で来ちやったから、階層を移動しない事での深層の理不尽にも慣れて貰う。と、まあ二つ目が主な理由なんだけど」

アリーゼは苦笑し、下を指さした。

「多分今の状況を推測していたアルフィアが来ると思うから、それ待ちね」

「……遠征自体は終わったも同然ですし、ベルの慣れも順調ですからね。アルフィアが

合流することに問題はないでしょう。納得しました」

「輝夜、遠征は帰るまでが遠征よっ!」

「……」

「無視っ!?!」

ここぞとばかりに神様が言いそうな言葉を突っ込んでくるアリーゼにも良い加減慣れてきたのか。輝夜は呆れた様子でサポーター達の下へと向かっていく。一日滞在を聞き出した以上は、テントを張る以外にやる事はあるまい。

副団長という立場が故に、恐らくアリーゼの次に疲労を溜めているだろう輝夜。白兵戦はフアミリア内随一だ。団長の指揮の補佐は当然として戦闘では一番駆り出されている。

にも関わらず、それほど疲れた様子がない。体力等耐久のステータスが影響する部分はアストレア・フアミリア内レベル5の3人にそれほど差はないだろう。にも関わらず、精神的疲労も身体的疲労も見せる様子のない輝夜。

そういえばアマゾネスとの話の時も見張りを続けていたなとベルが思い返している。ヴィトーは目敏くその様子を見抜いて話しかける。

「ふふふ、気になりますか？」【大和竜胆】があれ程までに気丈である理由が」

「えつと……はい。筋肉の扱い、足運び……それらを加味してもあそこまで疲れのないのは、レベル5の耐久があるとしても何でかなって」

ベルにとつて「技」の参考にしやすいナンバー1とも言える、極東の頂点。故に戦闘中に確認出来る時は観察を怠らずにしていた。だからこそ理解できない。あそこまで疲れていない理由が。

むむむ、と考え込むベルに、ヴィトーは笑みを絶やさず言葉を紡ぐ。

「貴方様の『記憶』であれば思い返すのは容易いでしょう。戦闘や移動中の『技』ではなく、戦闘外での行動を振り返る事を推奨します」

「戦闘……『外』？ えつと……」

「休憩の時は無論、戦闘終了時など。彼女の行動に思い当たる節は御座いませんか？」

「……首に手を当てたり、腰に指を当てたり。後はしつかり休んでいる時には足首なんかだったり……当ててるだけだったので、癖とか怪我に注意してるだけと思っていたんですが、違うんですか？」

「注意している、というのは間違いありません。しかしそれだけでは無いのが真実。彼

女の真髓は『整体』です」

「整体……？」

「ふふふ、詳しくは本人に訊くと良いでしょう。私も多少学んではいますが、彼女ほど理解は及んでいませんから」

その言葉を残してテントの設置を手伝いに行くヴィトーを見て、あまり戦闘に参加してない回復役とはいえ彼に余裕があるのも『整体』が理由なのだろうか、ベルは思う。水分を補給し、凝り固まった身体に鞭を打って立ち上がる。アルテミス・ファミリアの人達と言葉を交わしながらテントの設置をしていった。

◇ ◆ ? ◇

「輝夜さん、『整体』って何ですか？」

テントを建て終わり、食事の用意をしている最中。手持ち無沙汰で待ち呆ける輝夜に近付き、声を掛けた。ベルの発言に視線を向けて数秒の沈黙。ああ、と思い当たる様に呟く。

「【カラス雑整】か。予定では18階層に戻ってからか、ホームでと思っていたが……まあ良いか。時間を持て余していたところだ。ベル、ゴブニュ・ファミリアに武器の整備を——
 ……お願いしているな」

「はい」

「ならその間に教える。こっちのテントに來い」

アルテミス・ファミリアの人達は炊事、ゴブニュ・ファミリアの人達は武器の整備。取り繕う必要のない空間だからか、輝夜の口調が戻っている。

丁寧な言葉遣いより寧ろこっちの方が安心すると思わず笑みを溢した。

「——整体とは、極東の言葉で読んで字の如く、『体を整える』という事だ」

「体を整える……」

「ああ。疲労によつて起こる筋肉痛や、関節部の固まり。それらを元のベストな状態に戻す事を指す」

そこにうつ伏せで寝っ転がれと指差す輝夜。言われた通りに寝っ転がると、靴を脱い

で素足となった左脚に触れる。

「言わなくても探る事は出来るが……お前の肉身体理解度も確かめる。今何処が一番重い
か言ってみろ」

「疲労度って意味ですか？」

「その通りだ」

「えっと……左腕ですね。普段は利き腕の右で主武器を扱うんですが、今回の遠征では
サポートとして左腕を支えに扱う事が多かったので」

踏ん張りや移動などを考えたとしても、やはり脚よりも腕の酷使が目立つ。アルフィ
アに『脚』の才の太鼓判が押された以上、やはりその辺りは優れていると考えて良いの
だろう。

ベルの返答に頷いた輝夜は脚から手を移動させて左腕に触れ、肩から手先に掛けて一
度撫でると、再び納得した様に頷いた。

「痛みは？」

「筋肉痛なら結構」

「どんな痛みだ？」

「どんな……？」

「鋭い痛みや継続的に来る痛み……言語化が難しいのならば擬音でも構わない。ズキリだったりジワジワだったり……要は痛みの感覚だ」

「あー……えつと、それなら『ジワジワ』ですかね。痙攣まではいけませんけど、症状的にはそれが近いです」

「なるほど」

そう呟くと、輝夜は立ち上がって逆位置に移動。右腕を掴んで動かしている。

「……？」

「ああ、言い忘れていた。ベル、左腕の力は抜け。……そう、それでいい」

左腕を治すのに何故右腕を掴んでいるのか。それに治すというには触れて動かしている程度で、揉み解したりしていない。

「ベル、今から右腕を軽く押さえる。抵抗する様に上げろ。もちろん左腕の力は抜いた

「まだまだ」

「左腕の力は抜いたまま……んんっ」

「そう、上手い。やはりレベル3のステイタスならば器用だな。一般人では難しいと言
う人もいる」

「はあ」

何処かに力を入れて何処かの力を抜いているというのは、人がごく自然に行なっている事の一つだ。しかし意識的になると、全身脱力は兎も角として途端に難しくなる。

その点冒険者のステイタスがあると便利だと言う輝夜に、何をしているのか分からないままベルは気が抜けた返事をする。

「もう一度……そう。後5秒で脱力だ」

「……………」

「……、よし。力を抜いて良い」

「何か、これはこれで変な疲れというか……いや、疲れじゃなくて感覚……?」

「ふむ、やはり感じる者は感じるか。……それはさて置きベル、左腕を動かしてみろ」

「は——んんっ?」

ストレッチをする時の様に腕を回したベルは、半周させた時点でピタリと動きを止める。その様子を見て満足そうに笑う輝夜に、ベルは思わず問いかけた。

「えっ、め、めつちや軽いんですけど!? 何で? 右腕にしか触れてなかつた筈……!」
「ふ、そこまで取り乱すのは入団初日に深層で私がブチ切れた時以来か。アルフィアの『冷静の教え』を越えられた様で満足だ!」

自分の理解の範疇を越えたからだろう。完全記憶の事もあり、整体が行われる前と行われた後の感覚のあまりの違いに、ベルは目を見開いて驚愕をあらわにする。

基本的にベルは冷静だ。頭の回転が平凡な分、常に最大のパフォーマンスを発揮出来るようにアルフィアが仕込んだ。故に油断も隙もなく常にモンスターへの警戒を怠らずにしている。

無論、既存の記憶を超える理不尽な目に遭えば相応に取り乱すのは違いはない。しかしベルはアルフィアとの訓練で幾度となく経験を重ねている為、深層のイレギュラーを基準にしたとて並大抵の事で動揺する事はない。……推^{リユウ}しの事は別として。

それを理解しているからだろう。輝夜は「私の技も捨てたものではないな」と満足そ

うに笑みを溢した。

「ど、どうやって……?」

「人には不可視のエネルギーがある」

「……エネルギー?」

「ベルの人体理解度がどれ程のモノか定かではないが……こう考えた事はないか? 人はどうやって身体を動かしているのか、と」

「骨を基盤に身体を形成し、心臓の鼓動による血の巡りと筋肉の活性化。そして無数の神経細胞に脳信号が命令を出して動かしている、ですよね」

「思ったより理解度が高いな。というよりは記憶か。そう。では更に深掘りしようか。脳信号はどの様にして命令を出している?」

「え」

「精神とは何か。心とは何か。感情とは何か。思考とは何か。言語化は簡単だ。だが、概念でしかなく、関節的にしかその揺らぎを確認できないモノを、人はどの様にして発揮しているのか」

ベルはバグでも起こったかの様に固まった。そんなもの、自律的な思考を獲得した時

点で疑問にも思わない事だ。だってそれは当たり前にあるものでしかなく、確認する術もなく、考える必要なんてない。

だがそれらについて淡淡と語る輝夜に、ベルは思わず耳を奪われる。

「人の自己再生能力や、疲労・筋肉痛なんかもエネルギーに属していると考えて良い」

「……輝夜さんはそのエネルギーを操作して、痛みを取り除いた……？」

「正確にはエネルギーを扱う脳を、だ。痛みの認識、疲労の重さ。どの様にしてそれを感じているのかを理解している脳に働きを掛け、お前自身に治させている。私はあくまでもその補助だ」

まあ不可視のエネルギーを操れたりすれば、まずベルに動作を行わせる必要がない。あの動きはベルの左腕を整える為の脳への干渉だ。

あの時の疲れに似た変な感覚は他者の脳へのちよつとした干渉があつたからかと、ベルは納得した。

「他者に行くには落ち着ける場所且つそれなりの時間が必要になる。しかし私自身に行う場合はちよつとした時間でも問題ない。ベルに対してやった動作まで行かずとも、少

しの動きで済むからな」

「休憩中とか戦闘終了時に触れてたのは、その『少し』を行なってたんですね」

疲労の回復こそ出来ても、流石に体力の回復まではいかない。しかし常にベストな身体で疲労を抑えられる為、疲労が疲労を呼ぶ事もなくなり、続く疲れによる体力の消費というのが無くなる。

だからこそ遠征メンバーの中で一位二位を争うほどに疲れててもおかしくないのに、ここまでの余裕があるのだ。

ベルは思い返す。輝夜が自身に対して行なった動作を。そして理解する。これは完全記憶による動作の再現をしたとて、同じ効力を齎すのは無理だと。

これは幾度とない経験と、対象の肉体がどう崩れているかの理解が必要となる。同じ疲労ならば兎も角、筋繊維やそれに連なる運動神経。幾兆と存在する細胞。それらが全くの同一な崩れ方などあり得ない。

これを扱えるに達するまでの時間を考えると、ベルは悩んだ。習得したい……が、完全記憶があつても時間がかかり過ぎる。肉体の崩れ方はスキルで把握できるが、それほどの様にして治すのかの経験はどうしようも無い。

「……習得するのならば教えても良いが」

悩む様子のベルを見て考えを理解したのだろう。苦笑する様に呟く輝夜を見て、ベルは違和感。どこか習得してほしく無いと考えている様に見える輝夜の表情を見て、しかしそれには触れずに質問をする。

「輝夜さんは、何でこの技術を？」

「何故？ ……そうだな。一つ、オラリオの英雄譚の『紡ぎ』を語るとしよう」

「……！」

「キラキラとした眼をやめろ。然程面白くも無い話だ」

オラリオの英雄譚と聴いて即座に瞳を輝かせるベルに、そこまで期待されても困ると溜め息を吐く輝夜。

「かの英雄の無茶を知っているか？」

「全部です」

「……肉体的に一番無茶をしたのは？」

「『鐘の知らせ』編ですね」

確かに全部無茶だったなとしみじみ思う輝夜は言葉を訂正して再度問う。相当に読み込んでいるのがよく分かるだろう。ベルはノータイムで輝夜の質問に答えていた。

「無茶や無謀という点なら最終章が第一ですが、数十分間にオラリオを駆け巡って、覚えたての技術で精神を擦り減らして、その後には勝てる筈の無い強敵と闘うっていう限界ギリギリの継続でしたので。というか闘いに至っては限界突破の継続でしたし」

「そう。英雄譚には微かにしか載っていないだろうが、その後の束の間の休息という描写があったらどう？」

「はい。疲労を回復する為の期間だと記述していました」

「詳しい症状の内容は？」

「……載ってませんね。眼を失うという描写があったから、視力の回復……と、メタ的な視点から推測すると筋肉の疲労ですか？」

「概ねその通りだな。まあ子供に聴かせる叙事詩としては内容が過剰故、多少の修正は必要か」

直接体験していた身としては、俗に言う「原作」をしつて分そこから産まれる世界中の英雄譚を知る必要はない。だから輝夜は事実を知っているが、英雄譚の内容にはそこまで詳しくなかった。許可や取材等で少し眼を通す事もあつたり許せる描写のラインを言っていた事もあり、多少は知っているが。

両目の一時的な失明。五感の意図的な強弱設定。右腕の骨に罅。体力・精神力の限界突破による脳の活動限界。そしてそれらによる肉体的負荷。筋肉痛はもちろん、凝り固まっている状態で伸ばした時に起こる肉離れなど筋肉を痛める症状。

それらを描写すると非常に生々しくなる。恐らくアミッドからの「変な信者が真似されて英雄みたいな怪我を負ったと自慢しない為に教えませんでした」的な引き止めがあつたのだろう。症状の詳しい内容は同ファミリア内か治療に掛かっていた者しか知らない為、広められた英雄譚に隠しがあつてもおかしくはない。

「その際に私は……私達は、彼の筋肉を解す為にマッサージをしていた」
「……？」 『整体』はやらなかったという事ですか？」

「というより、出来なかった。その時はまだ整体を習得していなかったからな。……彼がキツカケだ。私が整体を学び始めたのは」

色々な伝手を利用して、故郷に帰った。その時は既にレベル4で、ダンジョン都市外にいる人間程度は足元にも及ばない。類稀なる才能を取り戻そうとする極東の全てを斬り伏せ、その際にかつて英雄から聴いた勘当されたというサンジヨウウノの令嬢をついでに救い、あらゆる文献を持ち帰る。

その中に人の「エネルギ氣」について記された文があり、アストレア・ファミリアの団員に施しながら独学で学んだのだ。

「す、全てを斬り伏せたって」

「ああ。別に殺してはないぞ？　というか斬り伏せるつもりも無かった。まさか入り込んで即座に感知されて囲まれるとは思わなかったからな。反射的につい」

「内情が軽いっ!？」

「強いて言えば、私が未練たらたらで中途半端になった原因を超えたかったというものがあるか。思わず笑ったよ。この程度の過去に縛り付けられてたのかとな」

——アリーゼと言ひ輝夜と言ひ、ついでに己の義母と言ひ、アストレア・ファミリアは変人揃いだ。というより神様含め、オラリオの住民は変神が多すぎる。

魔境の巣窟とはよく言ったモノだ。レベルの関連だけじゃない。強さやその根底に

あるものを含めて、全員の思考が偏っている。理想を成し遂げた英雄の影響で皆が心の内に正直になっていくだけなのか、或いは潜在的にあつたものを強くなるにつれて曝け出してしまっているだけなのか。

祖父ゼッスの事もあるので変態慣れはしているが、それでも下界の人間こどもがここまであつけらんと恐ろしいことを口にしてているのを目の当たりにすると、アルフィアの訓練とはまた別の意味で理不尽を垣間見ている気分になると、ベルは恐怖を覚えた。

だがスッキリとした様子で笑う輝夜を見て、大事な事だつたのだろうと。今は軽く語っているが、必要な事だつたのだろうとベルは表情を改める。

「英雄が望むままに、彼の傍に立ち続けられる様に、そして支えられる様に。私は彼の為となる技を磨き続けた」

「整体ここれに限らず、ですか……?」

「ああ。とは言え、キツカケとなつた英雄はまた何処かに放浪してしまつた。……全く。二人で叶えるという言葉を取つたというのに、責任も取らずにどこを巡っているのでしょうか。あの英雄バカモは」

毒を吐く様に、寂しい声音で。しかし笑みを浮かべて。それを今までの様な // 取り繕

い”ではなく、ごく自然と慕う者を呼ぶ様に丁寧な言葉遣いで呟く輝夜に、ベルは思わず魅入った。

「……好きだったんですか？ 英雄の事を」

己らしくない問い掛けだ。理解している。でも複雑に笑う輝夜の表情を見て、問い掛けざるを得なかった。意外な質問である事は輝夜も思っただろう。不思議そうに眼を見開いて、笑みを浮かべて。少しだけ頬を染めて、感情を吐露した。

「——ええ、お慕いしておりました」

変わらぬ表情で告げる輝夜にベルが見惚れていると、輝夜は突如として真顔へと戻り言葉を発する。

「が、今は嫌いだ」

「え？」

「私は約束を破る者が嫌いだ。心の底から誓った約束を破られるなら、根がクズの騙し

や嘘の方がまだマシだ。どれだけの間私が落ち込んだと思ってる、あのポンコツ天然人たらし発情兎めっ」

心に突き刺さった。自分が言われた訳でもないのにエゲツない罵倒が発され、ベルは思わず謝りそうになってしまった。

「そんな訳だ。もう吹っ切れている。つまらん話を聴かせてすまないな」

「い、いえ。はい。……何で自分が言われた様な感覚なんだろう」

「ああ、ベル。あと一つだけ」

言葉の締めと判断して立ち上がるベルを見て、輝夜は引き止める。

「【リアライズ純紅の刃】と【ユナイトヴェール純水の刃】を既に受け取っているな？」

「あ、はい」

「見ての通りだが、【イディアール純白の刃】は私が所持している」

「じゃあ……」

「しかし、私は今のところ渡すつもりはない」

ですよねー、と。あれ程までにあっさり渡してるリユーとアリーゼの方が意外なのであって、普通に考えれば輝夜のこの反応は当たり前だ。

輝夜も意地悪で言っている訳ではない。かつて英雄が扱ったとされるこの三つの武器は修復時に幾つか変化を施されており、ファミリア内のメインアタッカーである3人の特性を活かせる性能となっている。つまるところ、彼女達の副武器サブウェポンでもあるという訳だ。しかも全体的に性能は第一級冒険者が持つに相応しい一等級武装と、特殊武装スペシャルスの施された不壊デコンダムの武器。それをおいそれと渡せるはずも無い。

「……か、貸して貰うだけは？」

「ダメだ」

未練がましく、かの英雄の様に三本装備をしてみたいと乞うベルに、輝夜はクスリと笑いながら拒否する。ジーンと見続けるベルに対して輝夜は表情を崩さない。機械的なままでに続く笑顔を見て、ベルは残念そうに首を下げた。

「もし、これを渡す時が来るとしたら……」

輝夜は【純白の刃】イディアールに触れて、眼を瞑り、そして告げた。

「貴様が英雄へと至った、その時だ」

「……………はいっ」

英雄が装備したのだから英雄に渡すのが筋だ。至極当然の道順で、それだけ世界中から「英雄」が求められているのだと、再認識した。今度こそベルはテントを出て、恐らく整備が完了しただろう武器を取りに行く。

そんなベルの様子をテントの外から眺めたアリーゼは、ニツコリと笑顔を浮かべながら中へと入って行った。

「輝夜の嘘吐きー！」

「嘘という訳でも無い」

「でも、まだ兎くんの事は好きでしょ？ だからその武器を渡さない」

「……………」

アリーゼの言葉に輝夜は己の腰に帯刀する短剣へと触れた。この武器は英雄との繋がりを確信出来る唯一無二と呼んでも良い代物だ。英雄を慕った輝夜にとって、幾ら同一存在だとしても渡せるものではない。

アリーゼの直感を騙せる筈も無いかと息を吐いた輝夜は、数秒の沈黙の後立ち上がる。

「否定はしない。だが奴に未練たらたらな様子を隠したいから、などという理由でも無い事は言っておこう」

「うん」

「——女の顔を見せたくないんだ。何の為に強くなったのか、分からなくなるからな」
オンナ

先程の笑顔とは一線を画す、儂げな笑み。はにかむような笑顔を一瞬浮かべるが、すぐに表情を戻してテントを出て行った。

輝夜の表情を間近で見ているアリーゼは、どこか恥ずかしそうに口元を隠して呟いた。

「……やっぱ。もしかして私ってベル君の前であんな顔してたのかな？」

同性でも恥ずかしくなってしまう美しい笑みを見て、アリーゼは思わず「戻れ、私の表情筋！」と、自分の頬を両方とも叩いた。

正義冒険⑥

「——では、大体のイレギュラーはベルの対処で済ませたか」

「お陰でイレギュラーらしいイレギュラーは無かつたけどね」

「……ふむ、そうか。しかしなるほど。それでは少々足りんな」

「え、っ」

「ベルは自発的に試したい事を試していたか？」

「……た、対処自体はベル君のやり方に任せていたけど」

「ルートの選択は？」

「基本的には音を頼りに、モンスターの既存が少ない場所を。……ねえ待つてアルフィア、うん、厳しくするのは分かる。神ゼウスと神ヘラの眷属の子供だもんね。初っ端遠征で深層探索の中心人物であるなんてのは序の口程度なんだとは思う。でもね？ それでも態々イレギュラーに首を突っ込むのはどうかと——」

不穏な会話を「魔法」で聴いていたベルは背筋を震わせた。同時に遠い目になり、ア

ストレア・ファミリアのぬるま湯甘えに浸かりすぎて判断が鈍ったのかなと思考した。決して甘い探索という訳では無かったのだが……アルフィアの施す試練とではやはり死の危険性が非常に違う。

そんな唐突なベルの表情の変化に気付いたのだろう。リユーが声を掛ける。

「どうかしましたか、クラネルさん。……どこかトラウマに怯える様な瞳になっていますか」

「アツ、ハイ」

「……本当にどうしたのですか？」

「いえ、ちよつとリユーさん達に甘え過ぎていたというか、何と言いますか……」

「? 甘えたいのなら甘えても良いと思いますが。厳しさだけでは正しき育ちにはなりません。優しきヒューマンである貴方ならば、甘えを知る事も学びの一つになるでしょう」

「ンンっ——」

甘えたいのなら良いですよ? と、聖母的な表情で頭を撫でる妖精エルフの姿を幻視した

ベルは思わず悶える。実際には疑問の表情で真面目に答えているだけだが、ベルの妄想

で補正が掛かった。

「いやダメだこれ、本当にダメだ。リユーさん達って本当なんか僕に甘過ぎる……」

「……私は少々自覚がありますが、アリーゼや輝夜はそうとも限らないのでは？」

「……？ あ、試しの件ですか？ ファミリアに順応出来るかどうかって点を考えると、試しは当たり前だと思います。言葉を交わさない連携をするなら、言葉を使わずとも気付くくらいじゃないとダメです。でもアリーゼさん達って頑なに僕を単身で戦わせないじゃないですか」

「それは、まあ」

連携の方が効率がいいし、何より安全性が高い。ベルの特性もあって唐突なイレギュラーにも対応しやすいし、ベルをサポートに置くというのは普通に考えれば当然の陣形だ。

サポートと言っても戦わない訳ではなく、戦いやすい場を整えている上に、索敵をものなしているのだ。咄嗟の状況をベルに対応させる為にサポートに置く。これがダメな陣形の筈が無く、実際上手く嵌って過去一の急突進で48階層までに来れたのだから。

だがこれに一つ欠点があるとすれば、このやり方ではベルが然程成長できない事。順応・適応等の慣れは発生してゐるだろう。だが本人自身の判断能力や経験値になり得る戦闘というのは殆どないと言える。

その点アルフィアの訓練と言へば、ただただベルの成長を促す事しかしない。

「多分、聴いてれば分かると思うんですけど……」

どこか慌ててる様子でアルフィアに詰め寄るアリーゼと、淡々と話を進めるアルフィアの背中を視界に捉えながら喋るベルを見て、リユウの視線も自然とそちらへ向かう。

あのアリーゼが慌てている。リユウはその事実を認識すると同時に、どこか悟つた様に「あつ」と零した。

「今日、僕は死地に放り投げられると思います」

多分あそこだよなあ、何で気付いたの、と。目的地に大凡の当たりをつけたベルは、光の消えた瞳で膝を抱えて座り込んだ。

「——ベル」

「ひゃいつ」

「聴こえていたな？ 詳細は省く、手短かに問おう。40階層までで当たりをつけている未開拓領域の数は？」

「……十一箇所ほど」

「ではその中でお前が思う一番厳しい場所へ行く。……が、そうだな。深層エリアでお前を一人は流石に危険か。【大和竜胆】、ついでだ。貴様への『罰』もついでに行おう。そこをお前達二人で攻略だ。ベル、開拓に必要なならば入り口での仲間の利用は許可しよう。」

あつダメだこれやっぱり気付いてる、と。ベルは何とか誤魔化せないものかと思つたが、やはりアルフィアは威力過多になるから試していないだけで、何となくの予想はつけてたのだろう。

ベルがカタカタと身体を震わせる様子を視界の端で捉えつつ、疑問の表情を浮かべながらアルフィアへ問い掛ける。

「それだけで宜しいのですか？ 未開拓領域の当たり云々については兎も角として、彼

の特性とレベル5一人居れば……長居するならば別として、それほど難易度が高くは「輝夜さん、輝夜さんッ、やめて。ほんツツとうにやめてっ。あまり挑発気味にならないで。これ以上難易度が上がったら流石に死ぬ……っ！」

「……？ 新種のモンスターがいるにせよ、100幾ばくのモンスターを相手にしない限りは平気でしょう。もしもの場合はベルの魔法があれば戦闘の回避も……」

「前提から履き違えてるんですって……！ 未開拓領域そのものじゃ無くて、未開拓領域に至るまでの過程がヤバイというかつ」

ベルは完全記憶の特性上、ダンジョンの構造の“重ね”が出来る。

単に階層と言っても一階層の領域が全て平坦という訳でも無く、場合によっては階層間の空間というものが存在する。原理上は20階層の範囲だが、21階層に入り込んである階層などを指し示しているものだ。

ベルの場合、そういった壁や地面の凸凹具合や空間の不自然さで未開拓領域に当たりがつける事が出来る。もちろんただの推測。だがアルフィアはあくまでも『当たりをつけてる中で一番厳しい場所』としか明言しておらず、必ずしも未開拓領域を攻略しろとは言っていない。だから100%未開拓領域と断言出来ずとも、アルフィアとの推測が一致している以上、ベルが推測出来る一番厳しい場所に行かざるを得ないのだ。

アルフィアの背後で冷や汗を大量に流しながら「ごめん、ごめんね、ある程度『保証』はしてくれるらしいから！」と両手を合わせながら謝るアリーゼを見て、流石に異常事態に気付いた。そして察する。

輝夜は躊躇いがちにベルへと視線を向け、そして問い掛けた。

「ベル、その未開拓領域があると推測出来る場所は？」

「闘技場コロシナムです」

——モンスターが一定数の上限まで無限に生成される、ダンジョン37階層の階層主と同等かそれ以上に危険と揶揄される超危険地帯。第一級冒険者でもロクに近付かないとされるその場所は、現在アルフィアが「強化種」が誕生しない様にと神ウラノスからの強制任務ミッションで定期的に訪れている場所だ。ともすれば、アルフィアがこの場所に当たりをつけていたのも納得できる。

がしかし、アルフィアが単独でこれる理由は殲滅力の異次元さが故だ。この広間では音がなかるうが、どうせ攻撃を仕掛けた時点で認識される場所。音を気にしなくていいのならアルフィアの独壇場となるのは必然。

ただしベルと輝夜は、基本白兵戦。ちよつとした数との戦闘ならば優位に運べるが、

流石に何十ものモンスターが同時に襲い掛かってきてたつた二人で対処出来るほど能力が高い訳ではない。基本近接戦を強いられる以上、一瞬でも判断を見誤れば幾らレベル5と言えども数の暴力にやられるだけだ。それこそ階層主を相手にする総力戦の様に。

相性の良し悪しで簡単に決まる事ではないが、それも積み重なれば第一級冒険者だろうが負ける可能性は高くなる。

今までの「罰」とは比にならない程の濃厚な死の可能性。闘技場をたつた二人で行けというレベル8の理不尽な命令に、輝夜は思わず丁寧な言葉を崩してベルに問い掛けた。

「ベル、この理不尽はいつもの事か？」

「……流石にここまで難易度が高いのは初めてですけど……レベルによつてギリギリ死ぬる程度を見極めて要求するのは割といつもの事です」

「そうか……」

「いざとなつたら助けてはくれるんですけど」

いつかの日。かつて最初にアルファイアに訓練を施された時に言われた言葉を思い出

しつつ、ベルは空笑いで告げた。

「なんか、その時はいつも川の向こうで誰かが全力で手を振ってるイメージが浮かぶんですよ」

「……そうか」

三途の川だなそれ、と。走馬灯の様なモノを幾度となく見ているだろうベルに、最早同情心しか残らなかつた。要するに、死に際まで追い詰められたく無かつたら自力で助かつて見せろという事だ。

幾らベルにぶつ壊れ完全スキル記憶があるとはいえ、ダンジョンの経験なくしてあれ程までに油断なく、また観察眼に異常に優れている理由がよく分かる。そりやそうだ。何せそこに至らねば死ぬのだから。……助けてはくれるが、死にかけるという経験を何度もするのだから。

「あの……アルフィア？ 差し出がましい様ですが、流石に闘技場を二人でというのは……行くなどは言いませんが、せめてアストレア・ファミア全員で対処しなくては本当に死んでしまいます」

「……別に闘技場を一人で攻略しろ、などとは言っていない。未開拓領域があると推測出来る場所の開拓と攻略だ。発見次第、未開拓領域で無いと判断できた場合は即刻退散を推奨してる。その辺りはベルも頭に入れてあるだろう」

何より、アルフィアは言った筈だ。「開拓に必要な入り口での仲間の利用を許可しよう」と。

つまりベルとアルフィアが推測している未開拓領域の場所、闘技場の真下を確認して、そこが未開拓領域でなければ即刻退散していい訳であり。未開拓領域でない事を前提とすれば、寧ろ今までベルがこなしてきた理不尽の中では一番楽なレベルと言える。

入り口での利用を許可するという言葉故に、開拓の為の攻撃は入り口からのみに絞られる為、何十何百のモンスターから火力の主を守ればいいだけだ。未開拓領域が存在する場合、そこを攻略するという手間が一つ増えるだけで。

「まあ私の勘とベルの構造の重ねが合致する以上、ほぼ確実に存在していると言つてもいいが」

「……今まで、こういういった手段でクラネルさんを成長させてきたんですね?」

「ああ。こうでもしないと一つのランクアップに何年掛かるか分からん」

「では納得はしましょう。ですが私の判断で彼が危険だと判断すれば、即座に助太刀に入ります。構いませんか？」

「ふむ……良いだろう。私もその邪魔はしないと誓う。ただ私の推測……いや、これは『勘』かな。これが正しければ、貴様の助太刀は邪魔にしかならんよ。【疾風】」

「階層主と同等以上の厄介さを誇る闘技場では、レベル5一人など力量が不足していますか？」

「物理的な意味ではないとも」

「とうか寧ろ、一度倒したモンスターに対して補正が掛かる【狩人】の発展アビリティがある以上は、対多数という戦闘において大きなアドバンテージとなる事は容易く予想出来る。決して力量が不足している訳ではない。」

「流星にそこまで実力を舐めているつもりはない、と。両目を閉じながら笑うアルフィアはそのまます言葉を紡いだ。」

「一つ、英雄の作法を教えてやろう。理不尽とは英雄の常であり、それは越えようが超えまいが在るべき要素だ。大事なはその理不尽にどう立ち向かい、糧とするか。故に私はベルに理不尽を与え続ける。……貴様がやろうとしている事は、糧の横取りとその価

値を理解出来ないが為の放り投げだ」

「つ……だから、助太刀が邪魔になると?」

「そうさな。後一つ大きな理由がある」

アルフィアは、早速と言わんばかりに闘技場に入ってから動きの意見を交換し合っているベルと輝夜を視界に収め、深層を超特急で突破した割には身体が軽い二人の様子を観察し、もう一つの意見を口に出した。

「これは経過の確認だ」

「経過の、確認……」

「ベルは既に成長の種を得ている。後はそれを自覚出来るか否かだ」

「……分かりました。ではせめて道中の対処は私達が——いえ、恐らくしない方が彼の負担にならないですか」

「察しが良くなつたな。ああそうとも。神アストレアが私を行きに同伴させなかつた理由はそこにもある」

アルフィアは、自身に張り巡らされた付与エンチャント【静寂の園シレンティウム・エデン】を解除する。両目を薄く

開き、強気な笑みで告げた。

「ベルが居れば、ダンジョン内で私が全力を出せる。神の言葉で言えば、ヌルゲーになる……といったところか」

◇ ◆ ? ◇

通常、アルファイアの魔法は下層以降の階層では使用禁止が基本だ。階層主やその場に大量のモンスターがいる場合を除けば近接戦が主体となる。

何せアルファイアの魔法は「音」であり、発動時に相当な範囲へその音を轟かせてしまふ為、下層より下の階層で発動してしまえば、モンスターを魔法で倒すと寄ってくる。魔法で倒せば寄ってくるの悪循環で、いくらレベル8の短文詠唱でも精神力はすぐに限界を迎える。

それは「静寂の園」シレンティウム・エデンの効力を上げて魔法威力を下げたとしても大きい変化がある訳ではなく、逆に素の威力へと戻していくと更に広範囲へと音が広がってしまう。対人では最強クラスの能力だが、ダンジョン内では産廃していると云ってもいい。才能の権化と言われるだけあってその程度では何の問題もないのだが。

しかし一つ条件が合えば、アルフィアはダンジョン内でも魔法の使用が可能となる。それがベルの存在だ。

ベルの魔法は少々特殊で、攻撃性能が皆無と呼んで良い代わりに精神力の効率^{マインド}は並外れており、付与対象が自由自在だ。発動位置の調整が上手く扱える程に使い勝手が良くなる。ベルの知覚範囲は魔法の対象となり、それは最早一種の結界だ。

そしてその効果は、当然魔法によって発生する音すらも対象となる。
つまるところ。

「【福音】」

ゴスベル
シャット
「【遮断】、【増幅】」

インフレクト

アルフィアの発言通り、ダンジョンの深層入り口付近——厳密に言えばアルフル^{レベ}の魔力でダメージが通る相手ならばヌルゲーと化す。

純粹な魔法威力だけでなく爆音さえも攻撃力と化すそれは、生物である限りは魔力への耐性が高い敵さえも一掃してしまう。その上ダメ押しに、アルフィアの音さえも増強させてしまう付与。ここから更に「強化」による魔法威力そのものも上昇させる事が可能だ。

周囲に音を漏らさず、ただでさえ強力なレベル8の魔法を更に強化。あまりに相性が良すぎる組み合わせ。ダンジョンでの扱いづらさを克服するどころかあまつさえ強化をも施してしまうという、“音”という属性への適正値が高すぎる付与魔法。

その様子を眺めていたライラは、ついで胃痛を感じる事なく悟を開いて呟いた。

「訂正。こいつら二人でいいんじゃないかな」

ベルの時は冗談半分。アルフィアの時はマジ。二人揃えばガチもガチ。

この時ばかりはアストレア・ファミアの中でも生真面目な部分が目立つ輝夜とリユードさえ、ライラのこの発言には同意せざるを得なかった。

ダンジョンへの適正能力が高いベルとダンジョンへの適応力が桁外れであるアルフィアは、お互いに単体でもパーティーで行うべき事を可能とする。言わば万能性の二人が揃っていると考えても良い。それによるメリットはお互いの不安のある部分を補い合えるという点。

アルフィアは何と言っても“音”だ。前述の通りダンジョンでは産廃となりかねないアルフィア最大の武器を、ベルの存在により扱えることが出来る。

ベルはスキルという特性である以上欠点らしい欠点というのは無いが、“継続性”と

“実力”ではアルフィアに遥かに劣るだろう。一度体験すれば覚えられる経験の短縮化はあるにせよ、魔法利用の索敵による精神力の断続的な消費は、幾ら通常の魔法に比べて燃費が良いからといっても回復薬が無ければ一時間で終わりを迎える。

ただしアルフィアは大体の事を直感でこなせる為、索敵による精神力の消費が全くないのだ。まずそれによるベルの継続時間の大幅な上昇。そして何より実力。ベル単体では時間を掛けねばならない敵を瞬殺出来る以上避けて通る必要もなく、モンスターが存在が少ないルートを選ばずに最短ルートを行ける為、基本的な効率の良い選択というのをアルフィアに任せられる。

ベルもアルフィアも単体で考えられる最大限以上をこなせるようになるから、元よりダンジョンに於ける万能性というのが強化されて本当の意味で「二人だけで良い」となっているのだ。

ヘラ・ファミリアの遠征時とかはこれ以上のペースだったのかな、と。末端のサポーターですら第二級、なんなら第一級の実力があつたと言われていたかつての時代を思い出したアストレア・ファミリアは一々驚くのも疲れたと言わんばかりに溜め息を吐いた。

アストレア・ファミリアはまだ良い。アルフィアもある程度ペースを調整しているだろうが、行き以上の超特急で階層を上っている現状、レベル2が基本的なサポーター組

は大丈夫だろうか。

「こ、このペースは流石に……!」

「これが最強冒険者の基本ですかっ」

「アルテミス様あ、アルテミス様アアっ!」

「……っ」

大丈夫ではなかった。

アルフィアは倒したモンスターの魔石を回収しつつ走りながらサポーター……道中の役割が無くなったためにアルテミス・ファミリア、ゴブニュ・ファミリアへの負担を減らそうとバックパックを背負うアストレア・ファミリアの団員に投げ渡し、そのついでに様子を伺いポツリと言葉を溢す。

「……まだ大丈夫そうだな」

大丈夫ではないのだが。言葉を発する余裕があるなら平気だろうと言わんばかりに、呟くアルフィアのその発言を聴いて、全員が声も出せずに絶句した。

ベルの正確な脳内時間では現在は昼前。出発したのは朝方。48階層から現在の38階層まで上るのに掛かった時間が半日も無く、もしかしたら階層移動だけを考えれば今日中にも地上に戻れるのではないかと思える程のペースだ。もちろんレベル2の体力では保たないので不可能だが。

やがて大して時間も掛からず37階層へと辿り着くと、漸く移動ペースがダウン。大きく息継ぎ、呼吸をサポート達は繰り返す。

ベルも呼吸を整えている中で、誰よりも消耗の激しい筈のアルフィアが涼しい顔をして告げた。

「ここまで急突進で来た理由は分かるな？ ローヴェル、この先は各員の総意で止まるか安全地帯へ向かうか決めておけ。今から行けば下層入り口辺りまでは戻れるだろう。戻るのであれば明日に再度リヴィラの街で落ち合うつもりだ」

「……んーん、このまま止まろうかしら。とは言えこれは私の個人意見。レトウーサ、貴方的にはどう？」

「はあ……はあ……つ、ええ、私も止まる方が宜しいかと……思います。……団員達も同意ですね」

「【疾風】が保険で残る以上、こちら側のレベル5は二人になります。戦力的にも、現在

の体力的にも、急がない方が吉でしょう。私も残る方に賛成します。それに」

レトウーサの意見にアリーゼが頷けば、その視線はこの場のレベル5の一人である
ヴィトーへと向かう。ヴィトーも頷いて同意しながら、自身の意見を述べた。

「もしかしたら、37階層唯一の安全地帯を発見出来る可能性もゼロではありません」

「万が一の確率。だが極東に灯台下暗しという言葉があるように、一番モンスターの多い場所に一番安全な広間がある可能性はゼロではない。」

そんなヴィトーの発言にも、アリーゼは頷いた。

「では、満場一致で闘技場付近で待機。なに、こちらに向かつてきたモンスターは私が対処する。……それで？ ベル、ある程度の方針は決まったか？」

「あ、うん。基本的には僕が音で誘導をしつつ、比較的安全な降り方が可能な場所を確認。そこをリユースさんに魔法で破壊してもらって形で」

「概ね予想通りだが、まあいい。しかしベル。今回も一つ縛りを追加だ」

「……ハイ」

「モンスターを最低20体倒せ。【大和竜胆】の力は借りてもいいが、あくまでお前が倒したモンスターのみをカウントする」

私としては良心的だろう？ と片目を閉じて告げるアルフィアに、ベルは空笑いながらも頷いた。確かに良心的だ。闘技場内でモンスターと戦うとなった時に輝夜が力を貸せるほどに余裕があるかどうかは兎も角として、と付くが。

基本的にアルフィアの強くする方針は、単身能力の向上だ。いざという時に一人でなんとかする術を身につけるといえるのは大変理にかなっているし、その結果の賜物が現在のベルと言える。が、だからこそ理解出来る。アルフィアのこの発言は「一人でなんとかしろ」と同義である事。

深層のモンスターをレベル3が一人で20体。とんだ無茶振りである。だからアルフィアがその条件を提示するということは、死ぬリスクは高いが切り抜ける方法があるという証明に他ならない。

残り短い闘技場までの道のりで、一生懸命にベルは考えた。

正義冒険⑦

技と駆け引きは冒険者の基本だ。下級冒険者と称されるレベル1にとっては一タスの上昇をこそ最優先と思う者もいるが、先に磨かなければならないのは『ギリギリを制する判断力』。つまり駆け引きだ。

ステイタスのゴリ押しは武器を痛めるし、下層へと下るたびにモンスター知恵は強化する。一見途轍もない膂力で押しているようにしか見えないオツタルやザルドの剣技も、その剛力による武器へのダメージをあたえないように繊細なコントロールをしている上に駆け引きも込めている。

技と駆け引きはステイタス——能力値に差がある敵であろうとも突き刺さる、格上を殺す為の手段。偉業を叶えるが為の絶対的手段であるが故に、その本領はレベルが高い冒険者ほど大事にしている。

が、ベル・クラネルはこと駆け引きに於いて秀でている訳ではない。完全記憶故の計画的な戦闘は他の冒険者と一線を画しているが、駆け引きの本領たる『ギリギリを制す

る判断力』に於いては第二級冒険者の中で下の中が精々だと呼んで良い。

何故ならベルの戦い方やスキルは、決して対多数の為に磨かれたものではないからだ。一対一……或いは2、3体程度ならば無類の強さを発揮する能力だが、数が増える度に発揮はできなくなる。

無論それはどの冒険者にも言える事だ。短文詠唱や移動砲台を除けば殲滅力の無い冒険者にとって、数の暴力というのは対処の難しい第一候補とも言える。だが幾ら数の暴力とは言っても、所詮守るべき肉体は人型程度の大きさでしかなく、モンスターが攻撃する為の的はそれほど多くはない。

タイミンクの取り方が上手い連携出来るモンスターでも無い限りは、ただの数の暴力というのは実のところ第二級冒険者でも経験を重ねれば誰でも対処が可能だ。

完全記憶スキルの補助もあって把握能力に長けている筈のベルがそれをできないのは、純粋な経験不足。故郷の問題。そしてアルフィアの独断だ。

故郷は特別モンスターが大量に出る場所では無いから、それ故に経験を積む事が出来ない。しかしアルフィアの脚があれば多少遠くとも日帰りは余裕をもって行えるだろう。ともすれば、何故ベルは対多数を磨けていないのか。

“技”だ。ベルはオラリオに来てからこそ技を磨く事が出来たが、アルフィアとの訓練では“基礎”のみを磨き続けたが為に持ち合わせている技が少なかった。駆け引き

とは本人の判断力、そして技の保有数に左右されるもの。ともすれば対多数の為の駆け引きを磨かないのは必然とも言える。

ましてベルは、その計画的な基礎の動きだけでモンスターを倒せる。膨大な知識から推測する能力が高すぎる為に、格上の為、及び対多数の為のギリギリを攻める能力というのが必要なかったのだ。

そしてアルフィアの場合、己の戦闘には必ず魔法を前提とする部分がある。近接戦の対多数に關してもステイタスの影響が大きい。ベルが参考に出来る部分が少ない故に、教える事が出来なかった。

だから遠征というこの場で「技」を沢山覚えたベルに、対多数への駆け引きを持ち掛けている。

——が、しかし。

「んんっ、こ、のお……っ!!」

躲し、躲し、躲し——躲し続けるだけ。反撃に転ずる事はなく、ただただ攻撃を避け続けている。カウンター狙いで相手の剣を滑らせてはいるが、流した後は即座に移動して攻撃をしない。

余裕はほんの少しだけあるように見える。だが攻撃への意識を全く見せようとしない。

危なくなれば助太刀に入るとは言ったが、現状危なくはない。だが同時に攻め入ることもない。

どうしたものかと立ち往生しているリユーに、アルファイアが話し掛ける。

「不思議か、【疾風】。何故ベルが攻め入らないのか」

「……ええ。レベル3のステイタスである事を加味しても、攻撃へ転ずる隙は幾らでもありました。彼の観察眼ならば把握していると思いましたが……対多数の戦闘に慣れてない影響ですかね」

「逆だとも。見え過ぎているんだ」

「見え過ぎて……？」

対多数に慣れてない影響もあるだろう。しかしレベルの差はあれど、把握能力や思考速度は個々の特性が発揮される。レベルに依存する部分もあるが、それ以上に当人の素質や練度が大きくなる部分だからだ。

把握能力だけで言えば、ベルのそれは第一級冒険者に劣らない。視野に入る全てが鮮

明に記憶されるからだ。それはリユーも理解している。ならば思考速度の問題か。

「ベルはかの英雄に憧れている。その意味が分かるか？」

「……強くなりたいたいという訳ではありませんか？」

「違うな。言い方を変えよう。ベルは誰も死なない物語に憧れた。つまり」

「……！ ならば、自分が死ぬ訳にはいかない……ですか」

誰しも死ぬという事には忌避を覚える。それは冒険への覚悟を決めている冒険者も同じで、死ぬかもしれないギリギリを攻めても死にたく無いというのは生物が抱く当たり前の本能。

ベルはその上に英雄譚の本質を継続する為に、まず自分が死ぬ訳にはいかないと、死ぬ可能性があるならば飛び込まない。

「そしてもう一つ。ここはコロシヤム闘技場だ。俯瞰視点で見ているお前ならばすぐに気付くだろう」

「——なるほど、モンスター同士の殺し合いの場。他のモンスターもろとも冒険者を殺してしまえばいい。見え過ぎているというのは、他のモンスターの挙動の事ですね」

コロシアム

闘技場に好んでくる冒険者はいない。だから普通ならば気付かない事も多かつた。かつては強化種が生み出される場所とも称されたように、ここではモンスター同士の殺し合いが行われている。とは言え深層ともなればモンスターも知恵がある。無意味に同士を殺すのではなく、有効的なタイミングのみで行うのだろう。ベルに攻撃を放つモンスター達はモンスターごと貫こうとする動きを見せはするが、実際にはしない。

だから視点を変えた。ベルの行動ではなく輝夜の戦闘を視界に移し、モンスターの行動を見る。輝夜に二対諸共叩き切られてはいるが、背後にいたモンスターはモンスターごと輝夜を貫く姿勢を見せていた。それによりアルフィアの言葉の意味をリユースは理解する。

輝夜は刀という性質上、長さは短剣より格段に長い。仮に二体来ようとも纏めて切り払える。しかしベルの持つ短剣ではリーチが足りず、二体倒すならば2回以上の攻撃をしなくてははいけない。

ベルの速さを考えれば、その間に他のモンスターが寄るのは明白。ましてやここは闘技場。倒したところですぐに湧くのは明白だ。そこまでの対処を考えるとベルは逃げが最善であるのは間違いない。

が、しかし。『20体を倒せ』という縛りがある以上は倒さない限り終わらない。死に

かけても今がダメなだけで次は大丈夫と同じように放り込まれるだけだ。そも、乗り越えられるとアルフィアが判断した以上は乗り越える為の手段を既にベルは得ている。

それは何だ。逃げの最善ではなく討伐の次善か。

「では、アルフィアは冒険の覚悟を決めろという事を教えるつもりで？」

「……いいや？ 死に誰よりも近かった私だから言えるが、死と隣り合わせというのは怖いとも。未だに私の病が相殺を上回ったらと怯えている。だからベルに何よりも生きる事を優先しろ——冒険者は冒険してはいけないと私が教えたんだ」

「貴方が……？」

死は怖い。幾度となく偉業を成し遂げた世界最高の冒険者が溢す弱音を聴き、思わずリユーは驚きを隠せない。だが同時に納得はある。ベル・クラネルという義理の息子がこの世にいる中で、死が残す結果は己の損失だけではない。ベルという唯一の家族から離れる事になる。

一度は失われて、また取り戻した家族愛。しかも自分は病を克服した身。離れる絶対的な理由が無いのだ。わざわざ一生離れ離れになる事もない。

だがそれ以上に、もう一つ。

「冒険者ならば冒険しなくてはいけない時はある。だがしなくていい冒険をする必要もない、という意味でな。何せ冒険をせずに偉業と呼べるくらいの実績があれば……：……：それこそ、絶対的に強い者だろう？」

「なるほど」

要は、冒険をする必要がない程に強く在れ。冒険者という枠組みで、かつては何人もの死人を出したダンジョン探索という舞台。それで冒険をするなどという方が無茶に近い。

だが、本当にそれを成し遂げられるならば。自身の命を決して脅かさずに、他人の命をも救える者となれるのならば。

それこそ、自身の命を賭して暗黒期を終わらせた英雄以上の——。

「甘いのか、厳しいのか。時折分からなくなりますね、貴方は」

「甘いとも。この世を簡単と思っている者の発言だ。厳しいとも。それが無茶と分かっているながら押し付けるのだからな。だが、【大和竜胆】の故郷にこんな言葉があったらどう？」

敵しいし甘い。どっちでもあるんだという発言の後、アルフィアは片目を閉じて告げる。

「『飴と鞭』、とな」

「……それはまた、意味が変わってくるかと思いますが」

「む、そうか？」

リユーもうろ覚えだが、その慣用句は間違っているとリユーは微妙な表情で呟いた。後でベルに意味を聞いておくかとアルフィアは溢す。

天然なのか、馴染みやすくしているのか。……まあ前者だろう。ベルの血筋、及び彼女の妹の話を少し知っているリユーはそう判断した。

微妙な空気漂う二人を他所に、ベルは表情は冷静ながらも内心どうするべきかと思考を加速させる。

（ねら——えないっ、一步遅れた。事前のパターン解析が無意味、把握してもまた別の把握が頭に入って対応が出来ない）

一体一体の動きは見えているのに、それが三体四体と積み重なる毎に思考が圧迫されてしまう。完全記憶故の弊害。取れる手段が多過ぎて、咄嗟の状況で何を選択するかを数瞬考えさせてしまう。

今でこそ音の誘導と、輝夜自身が気配を薄くする技術を使わずにいるから、モンスタの意識はベルよりも輝夜の方に向いている数が多い。お陰で逃げるだけならば可能となっている。だが攻撃に転じようとする瞬間に視界に入るモンスタの挙動がベルに一瞬思考を与える。その一瞬の思考が判断を遅らせ、攻撃への転じを封じているのだ。

中層を自分がメインにほぼ単独で攻略できたのは、ステイタスの差が明確に出たのだと思わされる。一対一ならば確実に勝てるであろうモンスタ相手にも、やはり数を増やされては無意味だ。

体力に余裕はある。精神力マインドもまだ余裕だ。脳もまだ疲れていない。身体の負担も大きくない。だが逃げに徹するしかない現状、20体の縛りをクリア出来ないから継続の一択になる。それでは課題のクリアが出来ない。

しかもこのままでは輝夜の負担が大き過ぎる。ならば――。

「…………つ、
【増幅】」
インフレクト

大きく息を吐き、詠唱一つ。輝夜のいる場所を中心的に引き上げていた音を元に戻して、己の足音を増音させる。輝夜に向いていた意識が少なく、だが確実に幾つかベルの方へと向かう。

（まずは輝夜さんの体力を整える。多少増える程度なら逃げに転じてる今、攻撃は喰らわない筈。輝夜さんに余裕を持たせてからまた思考を整えて——）

瞬間。視界の端に映る鈍い刃の煌めき。自身の増音に意識を持つてったが為に外れた索敵の隙を突く一撃に、ベルは逆手に持つ刃を振り上げる。

（間に合わ…………なつ、ら攻撃…………つ！）

コンマ数秒間に合わずに通り過ぎる刃を見送り、即座に刃先を転換させて魔石に狙いを掛けて指先で振るう。切り離されるまではいかずとも、深く腕を斬られるだろう。だが判断を誤った以上は取り返しはつかない。ならば最大限の結果を。

そうして放たれるお互いの刃。
やかて刃は――

「つ、あ………ツ？」

お互いに当たりもせず弾かれる。思わず後退してベルは腕を摩る。怪我はない。意識を前に向ければ、そこには輝夜の姿。

「馬鹿者っ！ 急にデコイ囷になるな！」

叫びながら、体を捻りながらモンスターを切断。だが息継ぐ暇もなく攻め入るモンスター。輝夜は言い放つ。

「これは私への罰も含めての攻略だ！ 私にどれだけ負担を掛けても構わん！ 貴様はまずモンスターを倒す手段を探れ！ 私の負担を減らすというのであれば、早く20体を倒せ！ 貴様の矜持を捨てずにだ！」

「け、けど………！」

「貴様が言ったのだろう、アルフィアが与える試練は、既に自分が得ている『種』を開花させる事で攻略出来ると！今の自分が出来るのにやっていない事はなんだ!？」

出来るのにやっていない事。出来ないかもしれないから、やっていない事。

「貴様が覚えた技はただ発揮するだけか！そこから発展させる事をしないのか！」

「……！」

「技に至る過程を一つと決めつけるな！分かったな!? ならば掛け直せ！」

ベルは深呼吸一つ。自身の周囲にいるモンスターを輝夜が斬り払うと同時に自分に
シャット【遮断】を掛け、輝夜にインフレクト【増幅】を掛ける。

明確に輝夜へと向いたモンスターの意識。この数瞬で考えられる限りを頭に浮かべる。

(技の発展——矜持を捨てず、種を開花。明確に倒せる手段。思考の簡略化。考えられる全てを、矜持を捨てずに身体に命じる方法)

だがモンスターはその瞬間を逃すほど甘くはない。先程に比べれば間違いなく少ないが、それでもベルの現状では対処できない程の量のモンスター。逃げるだけならば可能。しかしそれでは逃げに意識を持っていかれて、今の思考が途切れてしまう。

故に、ベルは逸らす。出来るだけ大きな武器を持つスパルトイの攻撃を逸らし、周囲のモンスターを巻き添えにする。倒せはしないだろう。だが明確に考えられる時間ができた。

(技の過程、僕だから出来る技の進化。いや——過程の簡略)

カチリ、と。歯車が噛み合うイメージが湧く。だがまだ何かが足りない。問題なく動くには足りないものがある。何だ。何が足りない。

その視線は、輝夜へと向けられる。

——あ

輝夜から学んだ事。その一つに気付くと同時に、ベルは動きを止める。腕は垂れ、呆然とする様に力が抜けていた。

突然の動きの停止に驚愕したリユーは、対処に動くまでに数瞬遅れた。モンスターの前にしてあり得ない行動だ。リユーの困惑は当然と言える。しかし危険に陥れば助けると言った身でありながら、この状況では助けられない。

刃が届きそうになり。

「……え」

刹那、ベルの身体はブレる。否。動きの速さに違いはない。リユーが今まで見ていたベルの速さと何ら変わりはない。

だがその手に持つ短剣は、気付いた時にはスパルトイを切り裂いていた。

第二級冒険者が持つには過剰性能とも言える第一等級武装の「リアライズ純紅の刃」ならば、多少技量が不足していても切る分には問題ないだろう。ましてやベルは基礎的な動きに關してはレベル8も認める領域に達している。持つ資格はあると言っている。

だとしても、本人の動きに差異が表れる事はない。短剣という特性上ならば尚更だ。

そんな中で、先程とは別種とも呼べる動き。技ではなく、技に至る過程の速さが段違いに増した。

「予備動作を極限まで少なくする。それだけで技の出が段違いに早くなるのは明白だ」

驚愕するリユーを端目に、アルフィアは続いて二体目のモンスターを狩るベルの動きを見つめながら話を続ける。

「だがベルの場合、スキルの影響で推測できる範囲があまりにも広い。その選択の多さ故に行動が遅くなり、結局は武器を振るうまでに時間が掛かってしまう。スキルの影響で絶対そうなるのであればやるべき事は一つだ。思考を身体に反射させる」

「思考を反射……」

通常ならば人は、認識して思考し行動するという工程を踏む必要がある。認識しなければ取るべき行動は思考できず、思考せねば行動に反映させられない。暴れるのは認識も思考も要らない行動だが、それは状況の把握が出来ないのと同義。

ともすれば、どこかのプロセスが欠けては人の行動というのは成り立たない。

だがその中で唯一、「思考」というプロセスは簡略化出来る。言葉を変えれば、「思考」ではなく「直感」という形に変化させる事が可能になるのだ。

そう、フィンやアリーゼとは違い、アルフィアと同種の「直感」に。

「……可能なのですか？ そんな事が」

「出来るとも。思考を身体に染み付かせる程の努力をすればな。私たち冒険者の勘の発
展系とも考えていい」

経験による身体に染み付いた反射的な勘を意図的に行うのが、現在アルフィアやベル
の行なっている直感だ。だから言ってしまうえば、誰にでも出来ることをやっているに過
ぎない。

それを理解しているリューは、アルフィアの発言に首を振る。

「いえ、意図的な思考の簡略は理解できません。問題は、クラネルさんにそれを身体に反射
させる事が出来るのかという事です。彼の元の戦闘方法は駆け引きよりも計略といっ
た方が正し——」

「ああ、そうだと。今ベルが行っているのは間違いなく計略だ。計略と駆け引きを両
立させ、それを簡略化させている」

「……なるほど」

自身の発言を振り返り、ベルの行動を振り返り、そして理解に至る。

「それ故の脱力ですか」

3体、4体、5体……6体目のモンスターを斬り伏せるベルの姿を注視して、攻撃に至るまでの身体の動きに気付き、答えを呟く。

そう、ベルの元々の戦闘法である完全記憶を利用した動きの推測。駆け引きとは別物とも呼べる戦闘スタイルは、決してなくしてはいない。それ諸共簡略化しているだけだ。

本来なら「直感」で動くにしても別の可能性を過らせて硬直してしまうのが当たり前だ。普通の人間の「反射」ならば兎も角、ベルの完全記憶はそれだけの把握能力があるから。ならば何故、決して止まる事なく動き続けられるのか。

その答えが『脱力』だ。

「全身から力を抜き、どんな「直感」を過ぎらせようとも全てに対応できる状態へとする。何せベルは、予備動作をほぼ必要なく技を繰り出せるのだからな。元々どんな状況にも対応出来る潜在能力はあった。硬直しては意味のない事だが……」

「脱力する事で予想外の事態に於ける硬直を避け、その上今までとは比にならないほどの技の冴えを披露出来る。……しかし、脱力という手段をどうやって考えたのですか。クラネルさんは」

「何を言ってる？ その答えはベルの近くにあるだろう？」

「……輝夜？」

アルフィアの指差す方向に目を向ければ、そこにはモンスターを倒しているベルを見て笑みを浮かべたる輝夜の姿。しかし輝夜の何がその考えへと導くのか。確かに彼女の技は脱力を使うものもある。

しかしそれだけで至るには要素が薄い。

「今朝ベルと会った時に、異様に身体が軽いと感じたんだ。疲れがあまりにもなさすぎる。精神的疲労は兎も角、肉体的な部分に疲れが見えなかった」

「『整体』ですか？ 受ける分には何ら不思議はありませんが」

「ああ。私が言っているのは『整体』そのもの。受けたという事実のみ。……私も詳しい訳ではないからな。断じる事は出来んが……【大和竜胆】の行う全体の過程には、疲労の溜まった部位の脱力は基本となる。それは力の入らないフラットな状態を作り、最適

を生み出す為と私は解釈している。きつとベルも同じだろう」

「……………なるほど、最適を生み出す行動。それが脱力であったという訳ですか」

脱力し、思考を反射させ、レベル3とは到底思えない程の速度で技を出す。『直感』
という部類に於いてはオラリオ内でも類稀なる存在と化しただろうベルに、リユーは感嘆の意を示した。

このままなら手を出さずともいいだろう。アルファイアの判断は正しかったと認識し、リユーは得物を帯刀し直して問い掛ける。

「直感で言えば、貴方と同じ領域に達しましたか？ アルファイア」

「……………神アストレアといい、お前といい、みな随分と私を『怪物』に仕立て上げたい様な。些か傷つくぞ、私も」

「えっ」

15体目。変わらぬ速度で、決して疲れを見せずにモンスターを討伐し続けるベルを見つめながら、アルファイアは苦笑気味に呟いた。

「世界最速の座を奪われた様に、未だに世界最強のレベル9へと到達していない様に。」

『才禍の怪物』などと称されようとも、何もかもを誰よりも強く在れるという訳ではないよ、【疾風】

「え、と……」

「完全記憶を反射させた直感だぞ？ 私とは比にならない強さだとも。その一点は私を上回っている」

元のステイタスが左右する『行動』という面があるからこそ、仮にこのベルの直感を相手にしたところで後手に回る事はないだろう。本気でやれば勝つ事など容易いと断言出来る。

しかしベルと同レベル帯であるレベル3で比べれば、技と駆け引きがあまりにも別格すぎる。元々汎用性の高いステイタスに加え、時間が経つ事に戦闘が優位になる完全記憶、人間という生物である以上は大ダメージになりかねない音の操作。

「恐らく今のベルならば、格上の対多数だろうと戦えるだろう」

「……一度、本気の手合わせを試みたいですね」

「格上と言っても一つ上相手に限るとも。まあ神タケミカツチの技を扱えば、身体が持

つ限りはお前の本気にも耐えられるだろうがな」

「アツハハ、とんでもない会話だね。まだ第二級冒険者なのに、期待値が第一級冒険者並みに至ってないかい？」

ベルを見つめながら互いに薄く笑みを浮かべて会話をするアルフィアとリユーの後ろから、その会話へ混ざる様に一つの声が横切っていく。

女性特有のキーの高い声とは違う。男性故の低さを持つ声音。少し離れた場所で、だが視界に入る程度の距離にいる今回の遠征メンバーの男組には居ないその声。しかしよく聴く馴染みのある声に、二人は決して警戒はせずに振り向く。

そこには身長の高いながらも自信満々に溢れる少年の姿をした、かつての英雄譚で英雄に次ぐ活躍を記された『勇者』の姿があった。

正義冒険⑧

「^{プレイヤー}勇者」、何故ここに？」

「何故とは酷いなあ……五日間くらいリヴィラの街から行ったり来たりを繰り返してたから、厳密には僕の方が先にここに居ただけだね」

「……………」

「ンー、何か思い当たる節があるのかな？ 【静寂】」

「いや、なに。ロキ・ファミアリアの団長ともあろう者が随分と長くファミアリアを空けるのを許されたなと思っただけだ」

「ロイマンから直接依頼されたら、流石にね。ほら、ちょうど君たちアストレア・ファミアリアの遠征開始日にあっただろう？ 地震。ああ、アルフィアはダンジョン内に居ただっけ？」

「……………分かってるのならば直接言えば良いだろう？」

「ン？ 何がだい？」

リユースの問いに【勇者】^{ブレイパー}——フィンが苦笑気味に返し、視線の先をアルファイアへと向ける。黙るアルファイアに今度はフィンが笑顔で問い掛け、やりとりを続けた。

ニコニコと笑顔で、だが淡々とした声音。その小さな身体から発せられるとは思えない庄に、アルファイアでさえたじろいだ。

「私が原因だ。申し訳な——」

「アツハハ、ごめんごめん。別に謝らせるつもりはないよ。寧ろ感謝してる。こうして羽を伸ばしてダンジョン探索なんて滅多に出来ないからね」

「……」

この野郎、とても言いたげな表情でフィンを見るアルファイア。そんな視線をもととせずに受け流すフィン。かつての彼らの闘いを見た事のあるリユースは一触即発の気配に緊張が走る。

咄嗟に話題を転換する様に、リユースは再び問い掛けた。

「五日もの間、ファミリアを空けて大丈夫ですか？」

「基本的な対処はヴァレッタに任せてあるよ。彼女が悪巧みしない様にリヴェリアも見張っているしね。……不思議とリヴェリアの前だと大人しいんだよね、彼女。何でかな」

「リヴェリア様の御威光には逆らえぬのでしよう。王族故の威厳……流石です」

「そういうのじゃないんだよなあ」

胸を張って手を当て誇る様に告げるリユウ。それに対して、小綺麗になったヴァレッタの姿と腕を組むリヴェリアを思い浮かべながら再び苦笑気味に笑うフィン。アレを威厳というか、『母の圧』と言うか。

弛緩する空気の中で、フィンは視線をベルへと向けた。

「ロキ・ファミリアはレベル7を二人抱えている。そのどちらでも無い者……レベル6の僕が団長を務めるのって、意外と肩身が狭くてね」

「……そういう玉か、貴様は。レベル7へと至る器は既にあるだろうに」

「厄介だなあ、ヘラ・ファミリアに居たが故のその観察眼」

アビリティ問題の資格までならば分かる。だが表には出ない上位経験値という面を
観測するのは不可能に近い。可能なのは成した偉業をその目に映す事。

それを可能とするアルフィアの、かつて最強派閥に所属していたが故の勘に呆れ果て
様子でフィンは呟いた。

「……事実である、と？　ならば何故あなたはレベル7へとランクアップしていないの
ですか？」

「ただの意地だね」

「意地、ですか」

「そう。アイズが示した限界突破のアビリティ。彼女がレベル5へと至った時の速さか
ら推測するけど……かの英雄は、限界突破を繰り返していた。今のアイズの様だね」

ステイタスの推測。既に居ない者であるし、追及ではなく推測だから規則違反には当
たらぬもの、他者のステイタスの憶測を行うフィンは思わずリユーは眉を寄せる。

「英雄の正体を探るつもりはないよ」と示すように手を振り、フィンは続きを紡いだ。

「レベル5初期のアイズと、レベル5初期と報告された英雄の速さは、本来ならばアイズ

の方が上回る筈だった。ところが実際に観ている僕からすると、明らかに英雄の方が速かったんだよ。例のスキルは関係なくね」

リユーは英雄の過去のステイタスは知らない。そもそも話として、未来から来たと言う彼の話に詳しくない。主神であるアストレアは多少聞き及んでいるだろうが、少なくとも眷属の彼女達は英雄の事は知っていても、英雄の「事情」には詳しくなかった。故にそれが事実であれ、フィンのための妄想であれ、真実を確かめる手段はない。リユーの意外そうな表情を見たフィンは、探るのは本当にここで止めだと一泊置いて話を戻す。

「……まあこの観点で必要なのは、英雄がアビリティの限界を突破していたと言う事実そのものだよ。アイズと同じ様なスキルを持っているにせよ、Sが限界とされていた壁を突破出来るのは紛れもない事実。だから俺は、その壁を破ってみたい」

「珍しいな。そこまで感情を剥き出しにする貴様は」

一人称が変わる程の強い想い。拳を握り締めて真剣な表情で語るフィンは、アルフィアの指摘に「おっと」と言葉一つ溢して笑顔へと戻る。

「前例があるんだ。自分の目指す英雄へと至る為なら、自分の器を超^壁える程度は出来ないとね。それこそ僕がランクアップをしない理由さ。納得したかい？」

「何と言うべきか。貴方は聡明であるのに、クラネルさんと出会ってから、こう……」
「賢い馬鹿という奴だな」

「そ——いえ、その」

「アツハハ、リヴェリアやガレス、それにザルドなんかからも言われたなあ、その言葉。一族の復興なんて企みがあるんだ。今更な話だろう？」

淡々とした笑みとは違う。どこか少年の様な、それこそ『英雄になりたい』と語った少年^{英雄}の様に笑うフィンに、違いないとアルフィアは両目を閉じて薄く笑みを浮かべながら頷いた。

何とか良い空気に戻ったかとリユーは一息。だが一つ間が置かれ、一人の少女の叫び声が響き渡る。

「——フィン様ああ！ サポーターを置いて突っ走るのは流石に酷くないですか!?
というかこつちつて闘技場^{コロシアム}のある場所……つてええええ!? 【静寂】!? 【疾風】もい

らっしやる!？」

「団長く！ 勝手に着いて来た私にこの子を任せるって事は承諾って事でいいんですよね!？」 ふふふ、余計なのが一人いるけど団長と二人でハネムーンダンジョー——って、あら？ 【疾風】 じゃない」

「え、ええ。どうも。……今日は【大切断】^{アマゾン}は一緒じゃないのですね」

「双子だからっていつも一緒って訳じゃないわよ。英雄譚だってテイオナが引き摺ってでも連れて行こうとするから聴いてるだけだし」

「……貴方も大変ですね」

「お互いにね。……ってそんな事より団長！ 私と一緒のダンジョン探索！」

到着すると同時に二人の姿を見て驚愕する、声の主であるフードを深く被った栗色の髪をした、これまたフィンと同じ小人族^{パルウム}の少女。そんな彼女を護衛する様に後から迫るアマゾネスの妄想から帰ってきた後の発言に、リユーは問う。

お互いに労っていたが唐突に叫ぶアマゾネスの言葉に、フィンは苦笑しながら返事をした。

「テイオネ、僕はリリルカと一緒にリヴィラの街に戻る様に言ったと思うんだけど……」

「私が折角の機会を逃して団長と離れるとでも!？」

「清々しいなあ……」

「———おいおい、闘技場の目の前でいつまでも騒がしくすんなよな。あの兎が気を利かせてなけりや今頃集中砲火だぞ。……つかあの状況でこっちの対応出来るのかよ。倒し始めた事といい、何を理解したんだアイツ……」

倒し続けるベルを目端に近付く、もう一人の小人族であるライラ。

フィンは察した。この場に居てはいけない奴だと親指が疼く。震える様な、何か因果関係を思い出させる様な直感。だが避けては通れぬ道かと悟ったフィンは、取り敢えず視線を逸らして返事を返す。

「そうだね」

「ん? ……ん? おいフィン、このアマゾネスは分かる。フィン大好きクラブ行動マツハな頭アマゾネスだからな。勝手に着いて来たのは分かる」

「あ?」

「このチビ助はどういう魂胆だ? おい、こつち見ろよ。おいフィン? 最近私への許容距離感が狭くなって来たと思つたら新しい嫁候補登場かあ?」

「ち、チビ助とは何ですか！　というかりりはフィン様のオンナなんかじゃありませんから！　断じて！　一切！　……ファミア脱退の手助けは感謝してますが！」

「しかも様子的に随分前からファミアに所属してるみたいだが、私に隠してたって事だなあ。ん？　英雄色を好むと言うがハーレム狙いか？　おうコライいい御身分じゃねーか勇者様？」

「そういうのじゃないんだけどな……」

「こつち見て言えよオイ」

だから知られたくなかったんだよな、と。前世的なアレでそういう関係と結びつかれた瞬間に強気に出られるし、尻に敷かれそうというのは分かっていた。いやまあフィン自身の決断が遅いのもあるが、それにしてもフィンが隙を見せた瞬間にイキイキとするライラに、フィンは思わず眉間に親指を当てた。

いつそのまま詠唱して理性を無くしてやろうかと考えを過ぎらせた瞬間、手助けのつもりか——或いはあまり時間をフィン達に取られたくないと言う現れか。ライラののにんまりと悪い笑みをどうしたものかと頭を悩ませるリユーに、アルフィアは声を掛ける。

「疾風」、ベルの方はとつくに20を過ぎていゝぞ。今は……ああ、丁度34体目を倒したところか。直感の会得で大量の脳内麻薬が溢れているからかまだ動いているが、早めに対処せねば未開拓領域の為の体力が残らんぞ?」

「そ、それを早く言つて下さい! 私の火力では中心部を破壊するには何度か放つ必要があるのに、まだ一度目の詠唱の開始すら——」

「それ、もう35体目だ」

「~~~~~っ! 【今は遠き森の空——】」

予め決めていた筈の、20体を倒したら即座にリユウの魔法を発動して地面を破壊し、未開拓領域への道を作る話を無視してフィン達の会話に没頭していた。分かっていたのなら教えるつもりは詰め寄るが、肩を竦めながら次々に告げていく討伐数に時間が勿体無いと判断し、即座に詠唱を開始する。

アルフィアの言葉に詠唱を開始したりユウは、フィン達の会話に気を取られて逸らしていた視線を闘技場内へと戻す。脳内麻薬のエンドルフィン効果で極限の集中状態に陥っているベルは兎も角として、一方の輝夜に関してはベルの討伐数に気付いていたのか、はよろろやと言わんばかりの形相でリユウを睨みつけていた。

輝夜は白兵戦ならばファミリア内随一だが、地面を破壊する程の破壊力に長けた手段

は持ち合わせていない。それこそ武器を用意でもすれば可能だろうが、今この場で装備しているのは刀と短剣のみ。火力の頼みはリユールだけだ。

だが叫べばモンスターの方が馬鹿にならない。現時点では技の冴えこそベルよりも勝るものの、流石に反射という部類では敵わない。例えレベル5のステイタスでも数に押されてしまえば殲滅力のない輝夜には致命的。もちろんベルがその辺りはカバーするだろうが、少しでも負担を減らせればという気遣いの現れだ。

だからはよしと、と。鬼の形相で睨む輝夜に、すまないと身振りで伝えてリユールは詠唱を加速させる。事前に音の反響でベルが魔法を打ち込むべき場所を教えていたし、此度の魔法発動は平行詠唱ではない。詠唱のみに集中出来る分、その詠唱速度は普段以上だった。

「……未開拓領域？」

「ああ。私の勘と、ベルの擦り合わせが行われた結果、この下に未開拓領域が存在すると判断した。元よりこの遠征での目的はベルのダンジョンへの慣れ……だが、ギルドにはそんなの関係あるまい？ 本来ならば到達階層を伸ばす事、ダンジョンの未知を解明して欲しいのが本音だ。それを押し切って目標階層を抑えた。ならば、手土産の一つは必要だろうか？」

「それで深層の未開拓領域か……。深層のモンスターは対一ならばレベル3でも相手に出来る。だがその数の多さからステイタスの到達基準はレベル4、アビリティDが基本とされている。パーティーを前提にして、だ。まして闘技場コロシアムなんて、感知エリアに入った時点で六層段差の全てのモンスターが反応を示す。レベル5ですら死にかねない」

仮にもし、同じように闘技場コロシアムを真正面から突入したとして、これがアリーゼやリユーならば同じ結果にはならなかっただろう。アリーゼは対一の強さならばファミリア内でも圧倒的であり、リユーは汎用性が非常に高い。

だがここまで数の暴力で押されてしまえば、ベルを気にしながら対処しては保つて数分。ベルの直感が完成するまでには恐らく死んでいるだろう。

常に一対一で逃げを心掛けられる把握能力の長けたベルと、白兵戦に優れているが故に対処するだけならば長期行える輝夜だからこそ、このギリギリを制する事が出来る。

「攻略手段はあっても、気付かなければ本当に死ぬるギリギリだ。愛する義息子むすこにしては随分と厳しいね、アルフィア」

「……ベルの運命力と言えばいいか、幸運と呼ぶべきか」

「……？」

「神曰く、ベルの魂は純真であるらしい。心の底から想いを発した時、『運命』とやらは奴に味方をする」

「一種の恵まれた素質だね」

「だが、今のベルはそれが薄い傾向にある様だ」

「へえ……」

リユーは闘技場の入り口から魔法を放つ。距離が遠い。速度と継続を重視して放っている上に、中心部に届くまでに威力は軽減しているだろう。故に放つ魔法は一度では足りない。

一度目の発動。光玉は入り口から六層段差の接続部を悠々と駆け抜け、五層、四層と颯爽とモンスターの上を抜けていく。中心部に到達した光玉は地面へと接着すると同時に暴発。一度の魔法で放たれた巨大な光玉は十三。本来ならば五十にも届く光を放つ魔法だが、継続性と威力の都合上、リユーはこの形状と数が一番望ましいと判断。あまり多くを放ちすぎると、ベルや輝夜でさえも巻き込みかねないからだ。

地面に亀裂が走る。だがまだ足りない。何より亀裂の範囲がまだ狭い。

放たれている間にリユーは再度詠唱を開始しており、魔力の兆候を見せている。

その様子を眺めるアルフィアとフィンは会話を続け、ライラもこの状況では流石に押揃いはしない。何が起こっているのかとオロオロする栗色の髪の少女——リリルカと、先程頭アマゾネスと種族名を蔑称とする様な発言を受けてライラを睨みつける褐色の少女——ティオネ。

「発動してない訳ではない。さり気ない日常で舞い降りる幸運は恵そのものだ。しかし、神フレイヤ曰く、『もう少し魂が成長してから堂々と奪い取るわ』との事だ」

「……一応聞くけど、神フレイヤは無事だよね？」

「代わりに【猛者】をボコった」

「オツタル……」

「傷は七箇所ほどつけられたがな。私対策の魔道具があるのだから、諦めて装備すればいいものを……いや、それは置いておこう」

神、ましてや最上級の力を持つ美の神を直接攻撃なんて手段を取る筈がない。だがやりかねないから恐る恐る聴いた結果、その眷属の団長をボコったという。代わりで行うスケールが規格外だ。

再び鳴る魔法の破壊音を耳に、アルフィアは話を続けた。

「魂は本質を示すもの。ベルの本質が運命へと干渉するものだとするならば……想いの減少は致命的だ」

「……ああ、なるほど。死地へと追い込む事で、その本質を輝かせている訳だ。けど」
 「ああ。あくまで死地に追い込まれた瞬間でしかその輝きは見えない。かの英雄の普段の輝きですら今のベルよりも格段に優ってたとの事だ。つまるところ、継続している想いの強さが違う」

41体目——繰り返される直感が更なる加速を齎して、縛りの倍以上の数をベルは屠っている。闘技場の異質な空気の中で冷静でいられる胆力と、レベル3のステイタスを余す事なく活用出来る強さ。

詠唱を口ずさんでこまめに魔法の調整を行うベルを見て、先程までライラに詰め寄っていたティオネは思わず呟く。

「や……つばいわね、あの子。団長が気に掛けるのも分かるかも」

「……ティオネ様、リリの目がおかしくなったのかもしれませんが。情報が正しければ、ア

ストレア・ファミリアの新人はレベル3だった筈です。白髪紅眼なんてそうそう居ないですし……。なんか、レベル3が闘技場コロシアムで無双している様に見えるのですが、幻覚でしょうか？」

「バツチリ現実よ、リリルカ」

アルファイアやリユーと言った名高い冒険者がいる中で、戦っている割には静かな闘技場内に目を向ける事は無かった。しかし一点を見つめる彼女達に釣られてリリも視線を向けて、その光景を漸く目にする。

今更ながら驚く様子の様子の二人に、フインはニコニコと笑みに戻りながら問い掛ける。

「どうだい？ 彼がウチのファミリアに欲しいと思つたかい？ ちなみに僕は今でも諦めてないつもりだ」

「フイン様アツ!? そこにつ、そこに般若がいます！ あまり挑発しないで！ 都市最強の血筋を都市最強の前で奪う発言はやめて下さい！」

「いえ、私は別に。というかあの子がウチに来たら色々危ういと思うんですよね。アイズ的な意味で」

「アイズが動詞になつてないかい？」

アマゾネスの勘は凄いなと、フィンは思わず感心した。彼らの関係は知らない筈なのに修羅場というものに随分と敏感だ。他のアマゾネスならば嬉々として飛び込みかねないが、テイオネは変な所で理性の働く。

多分この返答は「男の子でも団長は渡さないわ!」の私情が八割を占めているだろうが、アイズ関連で嫌な予感を覚えたのも事実。

——三度目。巨大な亀裂が地面に奔るのを見たアルフィアは、次の魔法発動で闘技場の中心部が破壊される事を理解する。リユートの破壊系統の魔法に限らず、アルフィアの魔力の奔流でも充分だ。

視線をライラに向けて言葉を発した。

「スライル【狡鼠】、恐らく次の魔法で地面が崩れる。ローヴェル達は……」

「ん、準備完了。あの兎が倒し始め時から荷物は整えてたぜ」

「よし。……【ブレイバー勇者】、折角の未開拓領域だ。一緒に来るか?」

「んー、そうだね。君達と探索するのも一興だ。共にしよう。まあでも——」

コロンナム 闘技場に到着する前は疼いていた親指が、今はピクリとも動かない。未開拓領域の話

に至つても尚、だ。

本来であれば危険地帯の闘技場に反応するのは必然。ともすればそれが消えたのはベルが問題なく倒す光景を目の当たりにし、彼の「音」により入り口付近が保護されているからと理解する。しかし未開拓領域はまた別。少なくとも入り込んだ瞬間はモンスターの対象と化し、決して安全とは言えないだろう。

にも関わらず指が反応しないという事は、この指の直感を信じるのなら。

「ダンジョン探索らしい探索にはならないだろうけど、ね」

先程までは少し離れた場所にいたが、間近に来て闘技場の異質さを再認識した今回のアストレア・ファミアの遠征メンバーは息を飲む。ベルよりもレベルが一つ上のレベル4さえも、ここには入りたくないとい内心で思ってしまう。ましてやその下にある未開拓領域など。

しかしフィンの発言を聴き、その勘をよく知る者達は構えていた緊張を微かに解き、安堵の溜め息を零した。

「……………では行こうか。【福音】ゴスペル——サタナス・ヴェーリオン」

音の嵐。エンチャント付与を解いて放たれたレベル8の短文詠唱による魔法が闘技場コロシウムの入り口から三層までの円形を飲み込んでいく。ただの音の嵐。ただの魔力。それが放つ暴力は理不尽の塊で、その場にいる大量のモンスターは一瞬にして塵と化した。

とは言えここは闘技場コロシウム。一定の数までは無限増殖を繰り返すダンジョンの神秘の塊だ。例え倒そうとも直ぐに復活してくるのが当たり前。しかしアルフィアが探索を積み重ね、本気で魔法を放ち続けた末に導き出した答えがある。

ダンジョンは生きた迷宮で、モンスターを生み出す存在だ。ともすれば何かしらの論理ロジックはある。例えば人間で言う体力など。

一体一体の討伐に対して一体を生み出すスピードは決して劣らないだろう。ならば、それが数十を越えれば？

もしダンジョンが討伐されたことを「認識」し、冒険者を死地に追い詰めんがために「思考」して、「行動」を起こすのであれば。

生み出すための力も、生み出す為の考えも、何もかもが遅れる。ともすれば――。

「ハハっ、ホント規格外だなあ……」

数十のモンスターを一掃されたその場にて、モンスターは数秒経った現在でも新たに生み出される事はない。

「ダンジョンにズレを生じさせたのか。本来なら無限湧きを繰り返すダンジョンの一時停止……思考の次元が違う。それだけじゃないみたいだし」

「……フィン様、さつきあのお方の息子を奪うって言ったんですよ？」

「アツハハ」

「ズレと言っても、一分は保たない。行くなら今のうちだ。ローヴェル」

「——はいはい！ 呼ばれて飛び出てじゃじゃーん！ さあ皆行くわよ、未開拓の領域へ！」

先導は団長の仕事だと言わんばかりにアリーゼの名を呼ぶアルフィアに、彼女は元気よく答える。本来であれば大量のモンスターがいるこの場では愚かしい返答。しかし一掃されたモンスターに動揺を隠せないのか——否。明らかに何かに怯える様子で立ち竦む闘技場内のモンスター達を目の当たりにしているから、普段のアリーゼの感じを表に出しても大丈夫なのだ。

本来ならば無数の観劇が鳴り響く領域で、異常なまでの静寂。響くは冒険者の足音の

み。

「ここから先は落下直行よ！ 全員着地用意！ 耐久が不安なら衝撃耐性のフードを巻き付けて！」

【福音】
ゴスベル

三層まで突き進んだ各員を横目に、アルファイアは再び静止しているモンスターに向けて魔法を放つ。中心部まで突き進む魔力の奔流は地面を抉り、亀裂を肥大化させる。広がる傷はダンジョンと言えど容易に直す事は出来ない。

モンスターの鳴き声はなく、静寂の空間で一際大きい音が鳴り響く。確かな破壊音は地面を崩壊させ、その場の全員は穴へと落ちていく。

「リリ、行くとは言っていないんですがあツツ!!?!」

「ほら暴れない！ 大丈夫よ、団長の言葉を信じなさい！」

一人、乗り気でない少女の悲鳴を轟かせながら。

◇◆?◇

「——やっぱり、モンスターがない」

視界の全域に広がる状況。モンスターの居ない、本当の意味で静けさに陥る中で、魔法を発動させたベルの声が響く。

極限の集中状態は途切れ、脳内麻薬の途切れた身体は地面に膝を着き、そのまま座り込む。だが精神力には余裕があるので索敵の為に魔法を発動し、耳に届く音を把握して安堵の溜め息を零した。

「ベル」

後ろから届く声に振り返り、ほっと笑みを浮かべて言葉を発した。

「おぼ——」

「警戒を解くのが早い」

「さっ、いっくッ!？」

力が抜けたまま座り込んでいるから避ける事が出来ない。直感も働かせていないから反応すら許されなかった。頭に叩き込まれた手刀はベルの脳を揺らし、疲れた身体には相当なダメージを与える。

いつも通りの呼称への罰が九割、発言した内容故が一割だろう。とは言えその一割の内容が致命的なのは確か。ベルは甘んじて攻撃を受け入れ、頭を摩った。

「幾ら事前に確認してモンスターが居ない可能性が高かったとは言え、視認するまでは警戒を解くな。ダンジョンには気配を消せるモンスターもいる。……まあ、この辺りの深層には居ないがな。精々は姿を消す程度だ。が、それを含めての『イレギュラー』。分かっているな？」

「は……」

「……まあ、良くやった。実際のところ今回の件は五分五分だ。私にないモノを教える以上、推測で出来るかどうかの判断しつかない。脱力で完全記憶の反射へと至れるかは正直賭けだった。……お疲れ様だな」

自身の手に着けていた手袋を外し、アルファイアはベルの頭を優しく撫でる。こういう

“試練”を乗り越えた後のお約束だ。気恥ずかしさを感じながらもベルはふと顔を綻ばせ、片目を瞑りながらその手を受け入れる。

身を任せて数秒。ほんわかした空気に誰も口出しせずに居たが、アルフィアが手を止めて手袋を装着し直すのと同時にリユーが話し掛けた。

「モンスターの生息しない場所だと気付いていたのですが？」

「ん、ああ。ベルが闘技場^{コロシアム}を調べた時に言い淀んだだろう？ アレはモンスターの存在を感知できない故の困惑だ。とは言え一匹も居ないとは断言できない。だから伝えるのは止めた。しかし少ないのは間違いない。そうでなくては必要以上の疲労まで戦わせないと」

「……」

「結果オーライ、などとは言わせんぞ？」

「……そう、ですね。クラネルさん、申し訳ありませんでした。手筈通りに進めば貴方がそこまで疲れる事は無かったですよ」

「い、いえ！ 元々はモンスターに隠れて数えられないかもしれないからって、僕が魔法で合図する決まりだったのに、集中し過ぎて倒す数を数えてなかった僕の落ち度ですからー！」

「何か、お詫びが出来れば良いのですが……」

「お詫びだなんてそんな……!」

お堅いエルフト、推しに頭を下げさせてなるものかと言わんばかりの少年の頭の下げ合い。リユーは立ったまま腰を曲げて謝り、ベルは膝を地面に着けた正座の状態で頭を下げる。

あーだこーだと謝罪しあう二人に、一人の男の声がその場に響く。

「お詫びになるかどうかは分からないけど、「疾風」は彼を仲間と認めている事を形にしたら良いんじゃないかな?」

「私とはつくに認めています……」

「アハハ、意識の問題じゃなくてさ。性差が原因なのかどうかは知らないけど、君は彼の事を他の団員とは違う呼称で呼んでいるだろう? ま、他の派閥である僕が口出しする事じゃないかもだけどね」

「呼称……呼び名、ですか。まあ確かに。しかしこの程度がお詫びになりますか?」

「それは彼の反応次第じゃないかな?」

ニコニコと、いつも通りの笑顔。だがいつもより感情の乗ったようなそんな笑み。ほんの微かな違いだ、普通ならば気付かない程度。当然リユーが気付く筈もなく自然と視線はベルの方へと向く。

ベルはベルでその発言に思考がフリーズして、「こしょう……コショウ？ 故障？」と壊れた機械のように眩きを繰り返していた。

「……ベル？」

「……………」

「ベル……。ええ、馴染んでいた呼び名とは違いますが……これはこれで心地の良い呼び方だ」

「？ ……っ!? くくくくッツツ!?」

「ベル、貴方が宜しければこちらで——ってベル!」

繰り返すように眩かれる名前。かつて英雄の背負ったと鐘の名。たった二文字で紡がれる、落ち着いた声から発せられる名前。

ベルは誰の名前だろうと数秒硬直。繰り返される呼び名と向けられる視線に場を認識し、自分の名前だと理解を示す。それに至ると同時に驚愕と赤面を露わにして、体が

疲れている事も合わさって目を回して倒れ込んでしまった。

湯気を出して倒れ込むベルを咄嗟に支えて頭を膝の上に乗せ、名前を叫びながら意識を取り戻そうと頬を何度か叩くりユ。その様子を見つめてアルフィアは呆れた溜め息を吐き、やがて視線をニコニコと笑っているフィンへと向けた。

「お前という奴は……」

「ふふつ、アハハッ……やっぱり彼は面白いね、アルフィア。うん、やっぱり暫くは保留だ。どうもアストレア・ファミリアに所属している方が面白い光景を観れるらしい。ちなみに彼のアレは【疾風】限定かい？ それとも他のエルフも可能かな？ レフィーヤは少々気難しいが、アリシアと会わせるのも良いかもしれないね」

「……義息子の性癖に付けいられる私の気持ちを考えてくれ」

「最高だよね」

「今から貴様の限界突破に付き合ってもいいぞ？ ただし耐久しか上がらないと宣告はしてやる」

「へえ？ 残念ながら僕の最低アビリティだから、超えるまでには年単位で必要になりそうだ。いいのかい？ 都市最強様がレベル6程度にそこまで時間を掛けて」

あつちはコメディ、こつちは一触即発。空気感の全く違う二つの空間に、その場の全員がどうしたものかと思う。アルフィアとフィン以外での最大レベルは5。実力で収められる筈もなく、かと言って言葉で制する事が出来そうなアリーゼはベルの方に寄つてるし、言葉巧みなヴィトーは興味が無いのか眺めているだけ。

他はおいそれとこの中に入っていく事は出来ないし、テイオネはテイオネで「そんな時間使うなら私と一緒にいませんか!？」と空気感前無視で己の欲望を曝け出すだけ。

結局、ベルが起きたのと同時にアルフィアが「そこまで付き合いきれん」と折れて、一度りヴィラの街に戻る事となった。

デートという名のパトロール

「……………」

「どうかしましたか?」

「……………いえ、大丈夫よ。はいベル君、今回の更新後のステイタス」

神秘の一端に触れる恩恵の更新。背中に刻まれた人々の可能性が^{イコル}神血により進化を遂げていく。

深層の未開拓領域発見後、一度リヴィラの街へと戻り一夜を過ごし、その後地上へと帰還した。最短一直線により昼過ぎに到着し、疲れた団員達は安心できるホームでベッドに伏す。

合計で一週間程度の遠征。深層まで行ったとは思えないほどの短期移動。予定していた十日よりも三日ほど早く到着した。その為あらかじめガネーシャ・ファミリアへと依頼していた十日プラス二日の都市警護により暇な時間が出来てしまい、一同はホーム

・音属性／付与属性。

・三種統括魔法。

・付与対象は音の在る場所全て、及び自身の把握領域。

・詠唱式【増幅】【強化】【遮断】

《スキル》

【完全記】

キャパシテイ

・脳許容量の超拡大化。

アクティブトリガー

・任意発動

マインド

・極微量の精神力消費により、身体が感じとる全ての脳内永久保存。

・脳内保存した記憶の意図的消去。及び消去容量に応じた精神力回復。

—————

トータル280オーバー。三週間ぶりの更新という事もあつて合計の伸びはなかなか高い。ベルは一瞬声を出しかけたが、ゼウスの時とは違って毎日更新していた訳ではない事を思い出して「確かにこれくらいか」とすぐに落ち着いた。

そして落ち着く事で見えた一つの違和感。

「……手元でも狂いましたか？」

スキル名が欠けており、説明欄に余計な空きがある。不自然な空欄に思わずベルが問い掛けると、アストレアは苦笑混じりに答えた。

「ええ。男の子の背中って結構凸凹してるのね。アリーゼ達と違って驚いたわ」

「ア——」

アリーゼ達の背中。恩恵の更新。自身との比較をされて一瞬イメージが湧くが、「消え去れ煩惱！」と頭を枕に叩きつけ、ついでに一度覚えてしまったイメージを完全記憶の効力で消し去る。

本当にごく僅かな精神力マインドの回復。常時発動させているお陰ですぐに消費されてしまう程度の差異を感じつつ、ベルはすぐ近くにいるアルフィアへと視線を移した。

「……上位経験値の方はどうだ？ 神アストレア」

「ええ、それはもうバツチリ。闘技場コロシアムをたつた二人で行かせるなんて、帰って来て聞いた時にはもうびびつくりしたわ」

「そう言うな。攻略とまでは行かずとも、対処程度ならば出来ると判断した結果だ」

……五分五分だとは言ったが。

とは言え、アルフィアの言葉も嘘ではない。五分五分と言ったのはあくまでベルが「直感」を会得する可能性の話。20体を倒せと言う縛りをクリアするだけならば、ベルならばもつと簡単な方法で倒せた。

音の誘導というのは非常に優秀で、本来ならば自分の居ない場所へとモンスターを誘き出す事が可能になる。「開拓に必要なならば入り口での仲間の利用を許可しよう」という言質がある以上、偶々集まったモンスターを開拓の為にリユーが魔法を放つついでに倒し、偶々残ったモンスターをベルが狩ればいい。たったそれだけの話だ。

別の対処法という意味では100%出来る。五分五分なのはあくまで直感の会得。何も嘘は言っていない。

敢えてその手段を取らなかったのはベルの判断だが、それにしても口の回り方が上手いのが何とも言えないと、微妙な表情で会話を聞いていた。

「でも、ランクアップするかどうかはベル君に任せるわ」

「だ、そうだ。どうする、ベル？」

「じゃあ、保留で」

「……一応聞くが、あの勇者に影響された訳ではあるまいな？」

「パル……フィンさんの事？ 影響って、何に？」

「いや、お前なら聞いている可能性も捨てきれなかったからな。知らないならばいい」

アビリティの限界突破。本来限界とされていた評価Sの壁を越えるという【勇者】の発言を思い出し、アルフィアは思わず問い掛ける。だがふと思い出せばあの時は極限なまでの集中力を見せており、必要のない音は耳に入っていなかっただろう。

ベルの返答を聞いて頷いたアルフィアは、ベルのステイタスの用紙に視線を向ける。

（アビリティSの壁……【英雄】と【戦乙女】が例外なだけで、本来ならば目指すのが間違いとも言える恩恵の規約）

だが、と。

（想いの強さが限界突破へと至るのは既に何度も目にしている光景だ。ましてベルは英雄へと変わった者と同一存在。目指すのが絶対に間違いとも言えない）

「……ままならんな」

「へ？」

「いや、何でもない。ベル、上げたいアビリティは事前に言え。重点的に上げてやる。無
論、耐久は強制的に行うがな」

「あはは……はい。現状は魔力かな。ダンジョンで使用して分かったけど、魔力の相乗
効果が思った以上に強い。今後お義母かあさんも遠征に着いてくるのを考えると、到達階層
を伸ばすなら手っ取り早い手段になる」

「ああ。だが無論」

「うん。〃音〃は動きと並行して発動するから、可能な限り常時発動はするつもり。だ
から次点で力かな」

「了解した」

深層——特に闘技場に行つて再確認したが、耐久は重要だ。攻撃の受けだけでなく
過度な使用になる身体的な疲労までの強度、体力の向上。

だから〃強制〃と言われてもベルは服を着直しながら嫌な顔せずには頷き、自身の伸ば
したいアビリティを言う。アルフィアは目を閉じて同意を示した。

「さて、要件が無いならもう行っても大丈夫よ、ベル君」
 「あ、はい」

笑顔でそう告げるアストレアの指示に従って、そそくさと立ち上がりベルは部屋から出て行く。ここはかつての英雄が神アストレアと秘密の話をしていた場所。防音効果がある部屋だ。

扉が閉まると同時に足音は消え、暫く音が消える。数秒の沈黙。アストレアは笑顔を崩して困った表情でアルフィアに問い掛けた。

「……これ、どういう事かしらね」

その視線が示す先は一枚の紙。先程ベルに渡した紙とはまた別。同じベルのステータスが書かれたそれを見る。

—————

ベル・クラネル level 3

力：F 348 耐久：E 445 器用：C 642 敏捷：B788 魔力：C

スキルが新たに発現するならばそれは喜ばしい事で、特に困惑する事もなくベルにありのままを伝えただろう。だが既存のスキルを上書きするように変化するスキル名と追加されたスキルの効果。

人々の可能性を広げる以上、変化というのは必ずあるものだ。だが一度刻まれたスキルに変化を及ぼすなど聞いた事もない。

どういふ事なのかとアルフィアに同意を求めると、意外そうな表情を見せながらも、直ぐに納得して言い放った。

「言つてなかつたな。ベルのスキルの変化は今回で二回目だ」

「え」

「スキル名の変化こそ前回は無かつたが、効果の追加は一度だけあつた。まあ神聖文字ヒエログリフですら明確に示さずボヤけるのは初めてだがな。……そもそもの話、完全記憶にも関わらず記憶を消すなどという効果が最初からある訳がなからう？」

「……完全記憶はレアな部類だけど、発現例がない訳じゃないわ。それと同時に、同じスキル名でも効果が違うスキルというのも存在してる。そういう類だと思つていたのでけれど……そう。記憶を消す効果が追加されたつて事は、つまりはそういう事ね？」

「ああ。ベルは一度だけ精神的に壊れた。それを消すついでに完全記憶の細かな効果も

忘れたようだな。好々爺の祖父が「最初からあつたけど隠してた」と言うだけで受け入れてくれたよ」

ベルが精神的に壊れた原因はプレッシャーだ。英雄と同じ特徴、同じ容姿。脚色があつたりで完全な姿を伝えられて来た訳ではないにせよ、象徴というのは大きな部分を示し、細かな所は気にしないものだ。特徴が合うだけでも「幸運」の証となる。

田舎に居たとは言え近隣に村がない訳ではない。冒険者の存在も皆無ではなく、ましてや都市最強が過ごす場所ともなれば近場に訪れる者も出てくるものだ。広まった英雄の話が、ベルに重圧を掛けた。

そして、「このプレッシャーを消したい」という思いがスキルに変化をもたらし、記憶を消した。

まあ記憶はなくても心に残る為、重圧を感じた時には精神的に壊れた時を身体が思い出してしまい、無意識にプレッシャーとなる言葉を記憶から消してしまう。

にも関わらず、本人は英雄を目指しているのだ。逃げながら、在りたい姿から目を逸らしながら、強迫観念の様に『全てを救う英雄』の姿を。

故にこそ、「逃げてる今では開花しない」。プレッシャーと向き合えという、遠征前にアリーゼと共に訪れた孤児院でのエレボスの言葉。

だがベルはその言葉自体を忘れていた。記憶から消してしまったから。

「大丈夫なの？ それ……」

「どのみち、ベルが英雄へと至るならば向き合わなければならぬ事だ。それは今ではないというだけ。私が出るのは英雄へと至る道筋を示す事。英雄へと至るならば、ベル自身がどうにかせねばならぬ問題だ。それにな、神アストレア」

アルフィアは両目を開き、翡翠の瞳と紅色の瞳を見せながら告げる。

「私はあの子が英雄に至る必要がないのなら、それで良いと思っている。いや、英雄になつてほしくないときえ思う。あの子が英雄へと至つたのなら、やる事は『引き継ぎ』で、たった数週間の全救済ではなく、何十年もの間の継続する救済装置だ」

「……そうね。最初の英雄の存在が、どうあつても彼に影響を及ぼしてしまう」

「そんな英雄が辿る末路を忘れたとは言わせんぞ。なあ、神々よ」

「アルフィア、瞳」

「……ああ、すまん。感情が昂るとどうもな」

「気をつけてね。貴方のスキルは病気を相殺してるけど、扱いを間違えれば自分の体を

滅ぼしかねない」

アルフィアは一度目を閉じ、左目だけを開く。そこにあるのは間違いないく、髪と同じ灰色の瞳。眼の赤い色が抜け落ちると共に、微かに白みが強くなっていた髪も灰色へと戻る。

アストレアは一度頷くと、先程の会話の続きを放とうとする。

「もちろん、エピソード——」

「ベル君は居ますか——」

が、その声は大きく元気な声に阻まれた。ドアが開くと共に放たれる言葉。

音は消せても建物の揺らぎまでは抑えられない。決して古びている訳ではなく、人が走れば当たり前のように起きる振動だ。それを感知していたアルフィアは特に驚きもしなかったが、アストレアは別。思わず目の開閉を繰り返していると、その様子を見た声の主。アリーゼは問い掛ける。

「あれ、もう行っちゃいました?」

「……ローヴェル。恩恵の更新をしていた事は分かっているのだから、不用意に入るのはやめておけ」

「うん、それはごめんなさい。一応他の子達の時間経過から考えて、そろそろ良い時間帯かなって。でもそっか、完全記憶があるなら見るのは一瞬で済むもんね」

「ベル君ならさつき出て行つたばかりだし、帰つて来たばかりの貴方とすれ違っていないなら、多分ホーム内に居ると思うわ。何か用だったの？」

「ありがとうございます！ えつとですね」

アルフィアの言葉に謝罪し、納得し、アストレアの言葉に感謝を示して笑顔で告げた。

「デートでも誘おうかと思ひまして！」

ニツコリと、満面な笑み。そこから放たれる純粹好意マシマシな言葉に、思わずアストレアは笑顔のまま固まった。恐る恐るアルフィアの方に視線を向けると、どこか悩ましい表情で考える仕草を取っている。

「ローヴェル、まさか装備で出掛けるとは言わないな？」

「出掛ける前に身体は綺麗にして私服で行くわ！ アストレア・ファミリアの巡回じゃなくて、普通のデーターだもの！」

「よし。ならば構わん。無論私の許可など必要はないが……身支度を整えるならば口出しはせんよ。好きに過ごせ」

「分かったわ、お義母様」

「誰がお義母様だ、たわけ」

真剣な表情で頷きアルフィアを義理の母呼びするアリーゼに、アルフィアは「あまりふざけるならゴスペルぞ」と言わんばかりに軽く手を前に突き出した。アリーゼはそれを見て逃げる様に部屋から出て行く。

そんな様子を見送ったアルフィアは溜め息一つ零し、呟いた。

「毒気を抜かれたな。すまない神アストレア、何も貴方を責めるつもりはなかった」

「いえ……神々の負債である事は紛れもない事実。祈るだけだった無力な子に力を与え、人生を壊し、それを見送るだけだったのも、また事実よ。貴方の怒りは間違いなんかじゃない」

「話は終わりだ。私を陰湿な女にしないでくれ、神アストレア」

「……そうね、ごめんなさい」

アストレアは深呼吸一つ。陰った表情は消えて、いつも通りの聖母の笑みを取り戻して、アルフィアへと問い掛けた。

「それにしても意外だったわ」

「何がだ？」

「アリーゼとベル君のデート。私としてはアオハルな光景を覗けるのは満足だけれど、貴方も認めるのね」

「アオハ……？ ……まあ、意外でも何でもないよ。アマゾネス共に喰われるならば兎も角、ベルが望むならばそれを妨げる真似は出来るだけしない。忘れたか、神アストレア。ベルは妹の子だぞ？」

「可愛い甥っ子である事には違いないと思うけれど」

「そうではない。奴の生い立ちを忘れたか？ 好々爺セウナスのこのベルバの父カがメーテリアを孕ませたのだぞ？ まともに動けない妹を、だ」

「ああ……」

聞き返すアルフィアに対して、その意味を説明する。神特有の言葉に困惑しながらも、アルフィアは首を横にゆっくり振ってその理由を紡いだ。

ベルの生い立ちを改めて聞き及ぶと、アストレアは思わず苦笑をこぼした。アストレアは正義を司る『星乙女』と呼ばれる女神ではあるが、決して処女神である訳ではない。貞淑を司る訳でもなく、人々の営みには寛容だ。

だが、それでもベルを宿すまでの過程には流石の女神も苦笑せざるを得ないらしい。一度聞いた覚えはあるが、二度目でも思わず一度目と同じ反応をするくらいには。

「それすらも見送っている私が、今更むすこ義息子の男女関係を認めないほど頑固なつもりはないとも。あまりに軽い気持ちでなければ、な」

「フレイヤは？」

「町娘の方ならば兎も角、女神の方では玩具にされるのは目に見える事だ。軽い気持ちで来られるよりも厄介だぞ、女神の執着は」

「否定出来ないわね」

「いずれにせよ、将来を考えるのであれば私も自然と関与する事になる。その時はまあ

——」

アルフィアは、両目を薄く開いて笑みを浮かべながら呟いた。

「嫁の作法を教えてやろうか」

◇ ◆ ? ◇

「ベル君、デートしましょう！」

——そんなセリフをホームのリビングで叫んだアリーゼと、アルフィアと出掛ける時に「なんじやデートか、儂も混ぜてよ」と祖父に言われ続けて軽率に了承したベルに、若干一名が動揺のあまり木製のカップを握り潰した約二時間後。

犯罪抑制がされてると言っても皆無ではないオラリオでの武器無しはアストレア・ファミリアの人物である以上は不安要素が強い為、流石に短剣一本忍ばす程度は武装しているが、普段の装備とはかけ離れた服装で二人は出歩いていた。

「……うん」

買い物だったり喫茶店だったり既に何箇所か巡り、アリーゼは一度頷いてカツと目を見開く。街中なので叫ぶまではいかないが、それでも普段通りの元氣な表情で言葉を発した。

「普通のお出掛けってまだした事なかったからオラリオの案内でもしよつかなって思っただけで、普通にエスコートされてるわね」

案内らしい案内と云えば、初日と二日目のギルド案内と豊穣の女主人程度だろうか。しかも初日には即座に深層特攻という真似もして為、空いてる時間はあまり無かった。

その後はほぼ毎日巡^{パトロール}回だ。それ以外で個人で自由に出来る時間というのは殆どをギルドのダンジョン資料漁りに使っていたので、遠征以前の二週間ではオラリオを巡る暇など無かったと言える。だからこそアリーゼは街の案内を目的とした「デート」をすすつもりだった。

が、ベルは自身より微かに背の高いアリーゼをエスコートする様に店の案内をしている。服飾はしっかり質が良く値段もアストレア・ファミリア各員の個人資金に合っているものだし、喫茶店の軽食やドリンクも美味しいものばかり。

ギルドの資料漁りと同時にオラリオの案内地図でも見たのだろうか。それ以外に思い当たる事と言えば、巡回時に耳に入る噂話で判断したのか。完全記憶を持つベルならばどちらも可能だろう。

だが人の好みは千差万別だ。ただの噂程度で細かな情報が聞き取れる訳でも無し。確信している素振りで案内してる以上は相応に何かしらの証拠がある。

ベルの「勘」はこういう所で働くタイプではない。では何故だろうかとアリーゼが呟けば、ベルは苦笑して答えた。

「本当はこういういった場で使うべきではないと思うんですが……魔法による聴力強化でそれぞれ聞き取ってるんです。なので近場の店だったら何となく店の良さっていうのが分かるんですよね」

「服飾系は支払いの時のお金の音。喫茶店は調理中の音って事？ あれ、でも服の質も良かったけれど……その辺りはどうなの？」

「個人資金に余裕があるから比較的高級な所を選んでるっていうのもありますが、その辺りは「運」ですかね？ 流石に服の質感を音で判断するのは難しいので、現物を見てみようかなって気持ちでしたから」

ベルはスキルの関係上、どういう過程を辿るから良いものが作られるのかという判断が人並外れている。発展アビリティやスキルの有無が試される鍛冶仕事、冒険者の装備を一級品に鍛えるなどという真似は出来ないが、ステイタスが関わらない技術に関しては、一度目にした物をトレース出来る。

とは言え、道具の違いだったりもあるので差異は当然出るが……その辺りは保護者が流石の都市最強。アストレアの方針で遠征以外での依頼金、及び個人宛の強制任務ミッションの報酬は個人資金として蓄えられる為、全てが最高級の品を集められる。

現状では近隣の村で作られる品だったり、料理や裁縫ならばアルフィアが最高峰ではあるものの、こういった街中探索が増えるほどに目利きや耳利きは上達するし、自身の技術として蓄えられていく。

アルフィアの「才能」の強さも流石だが、こうして改めて聴くと完全記憶の汎用性の高さを改めて認識した。もちろん、器用のステイタスやアルフィアの教えもある故だろうが。

「うーん、流石。何年もいる私も知らない隠れ家的な喫茶店だったからなあ」

「獣人の方がいらっしやる事が多いとマスターも言っていたので、もしかしたら五感の鋭い獣人の人達が敢えて噂しない様にしてるのかもですね」

「ネーゼ、もしかして知ってて黙ってたりしてたのかしら？」
「カウンター席しかありませんでしたし、ファミリア単位で行くと占領しちやいますからね。知ってたならネーゼさんも気を遣ってたんだと思います」

幾らアストレア・ファミリアが少人数の規模の派閥と言えど、流石に十人そこらをカウンター席に座らせれば他のお客が入らないし、立場上休みの時は大体一斉の時から大半なので個人の時にどうしているのかを探る輩も現れる。実害はないからと大体はスルーしているが、こういうあまり明かされてない店とかは繁盛より趣味寄りの傾向が高いので、迷惑になる可能性は高いだろう。

幸い今日はベルという少年がエスコート音誘導しているので付き纏う連中はいないが、視線は向けられる。ままならないなあ、と。恩恵更新時の義母と同じ感想を呟きつつ、出来るだけ表通りでのエスコートを優先しようと思案した。

そんな悩む様子のベルを微笑ましそうに見つめるアリーゼ——の、更に後方。無駄に卓越した技術で足音を無くし、気配も極限まで消している冒険者が三人。

リユ、輝夜（付き添い）、ライラ（強制付き添い）の三人は、二人の様子を見て呟いた。

「普通に仲睦まじい男女のデートで御座いますね」

「クラネルのエスコート力高すぎな。どっかの最初の英雄様に見せてやりたい」

「デート……デート……？ まだ付き合ってもいない男女がそんな蜜月な行動など……
破廉恥なっ」

「……デートって、普通に仲の良い男女で出掛ける場合も使われるぜ？ むつつりエル
フ」

「むつつ……?!？」

声は潜め、気配は薄く。だが普通にバレてる三人の尾行中の会話。苦笑気味に会話を進めているベルを見て、ライラは思わず呟く。

「つか、これ絶対にバレてんな。いやまあ普通に考えりや会話してる時点でバレるけどよ。魔法的に」

「護衛です。なので問題はありません」

「……コソコソしてんのに？」

「護衛です」

「……………レベル5とレベル3（異次元）なのになに？」

「護衛です」

「……」

「護衛です」

「何も言つてねえよ」

「主にアリーゼの貞操の」

「聞いてねえよ？　つかクラネルがそんな事出来る玉に見えるか？」

「ベルの貞操も」

「どういふ事？」

「二人の貞操は来たる伴侶との契りまでに護つておかねば……」

護衛ですbotと化したリユーと、聴き飽き果てる輝夜。律儀に突つ込むライラ。

見守るよりやべー奴相手にしちまったかもなどライラが強引に逃げるべきだったと後悔していると、リユーは突如としてハッと表情を驚きに変えて、偉大な事に気付いたかのように呟く。

「二人が伴侶となるのであれば、契りを交わしても問題ないのでは……？」

「問題大有りだよ。主にお前の頭のな」

「私を愚弄するか?」

「うん、正直これは愚弄したくなるポンコツっぷりだわ。っていうかそもそも前提としてな? このデートはマジでただの男女のお出掛け以上の理由はないと思うぜ?」

「ただのお出掛けで契りに至ると!?!」

「もうダメだこのエルフ、早く何とかしないと」

むつつりどころかがつつりだ。がつつりドエロフだ。何を言ってもナニに結びつけられる。なるほど、アマゾネスと英雄譚の話で長年触れ合ってきたエルフの奇跡の瞬間を垣間見た気がした。輝夜は思わず痛ましそうに目を背ける。そしてこっそり会話を魔法で聞いていたベルも居た堪れなくなつて魔法を解除した。

ライラは胃を労る様にお腹をさすりながら菩薩の様な表情で考え込む。そして結論に達した。そうだ、あいつらの人間性を説けばいいじゃん。

「おいポンコツ、ちよつと聞くぞ? あの二人の性格はどんなだ?」

「……お人好しでしょうか?」

「だよな? 片方でももちろんだが、二人とも正義のファミリアらしき根っからのお人好しなんだ。それを省みて考えてみる。そんな二人のデートが淫らな男女関係に発展

するとでも?」

「……思いません」

「うんうん。けどまあ不安なのは分かるぜ。だから普通に見守ろう。男女の契り云々は兎も角として、タダの仲の良い二人である事を願うのは悪い事じゃねーだろ?」

「……はい」

要するにこのエルフ、自分が初対面で触れる事を許せた二人が同時に遠ざかつてる感覚に混乱してただけだ。ならばまず二人の人間性を再認識させ、故のこのデートの結末を自身で推測させて落ち着かせる。そして最終的には意見の提示。あわよくば帰りたい。

そんな会話のやり取りでうんうんと頷いたライラは立ち去ろうとするが、目敏く輝夜は首根っこ捕まえて引き止める。これの相手は私には無理だと首を振る輝夜に、ライラは遠い目で「あたしの休暇……」と呟いた。

——結局その後の二人のデートは、概ねライラの予想通りと言うべきか。人助けを交えながらのお出掛けだった為、ほぼ巡回パトロールをしているのと変わらない日常になった。

ひったりくり犯の耳元の音を増幅させて三半規管を揺らし捕らえるのを知らぬ存ぜ

ぬのスタイルで手助けしたり、**【強化】**^{イコスター}で声音を猫に変化させて探してる猫を誘き出した
りして輝夜が思わず悶えたり。逆に今度はアリーゼが迷子の子を送り届けたり。

デートという形を崩すほどの時間は掛けていないが、困っている人が居たらスルーせず
に全部手助けしているの、普段の巡回とあまり変わらない光景。

「……なんか、すみません。アリーゼさん」

「いやいや私の方こそ！ どうしてもスルー出来ないのよね……シャクテイの所が見
回ってるし時間が経てば解決するってのは分かっているのだけれど、つつい」

「分かります。けど」

どれだけ犯罪抑制が敷かれようとも、魔がさす人物は少なくないし、例え平和であつ
ても困る人が居ないわけではない。どうしても解決したくなってしまうのは職業病な
のだろうか。

根っこから染み付いてしまってる正義感のお人好しというか、お節介焼きと呼ぶべき
か。

ベルはありーぜの「ついで」という言葉に同意を示しつつも、先ほどまで助けた人たち
の笑顔を思い出しながら呟いた。

「笑顔になる人を見るのが好きなんです。優越感とか、感謝される快感とかじゃなくて、自分の意思というのが他人の為になっているのが良く分かるから」

「……そっか」

行動とは常に自分勝手な都合が付き纏う。仮に他人の為を思ったとて、それは他人を思った自分の為の行動に過ぎない。結局、人というのほどこまでいっても自己中心エゴイスト的である事には変わりはない。だからこそ正義と悪は表裏一体と言われるのだ。

それを、ベルはもう分かっている。かつてリユーが難儀し「英雄」に問いた「正義」というものの在り方を、もう理解しているのだ。

ああ、やはり本質は同じなんだとアリーゼは再度認識した。

「……？　この音」

「ん？」

魔法を使うまでもなく耳に響くひとつの音色。崩れた様な酷く鈍い音の鳴りと、「おっかしーなあ」という困ったひとつの声。

アリーゼは納得の表情を見せたが、特に何も言わずにベルの方へと向く。彼は既に音の主の方へと歩き出していた。苦笑気味にベルの後を追いかける。

音が鳴る場所へと到着すると、其処には子供に囲まれて無邪気に「どしたのー？」やら「音なんてなくてもいいから聴かせてー」と言われている、フードを深く被った人物が楽器を見ながら首を傾げていた。

見るからにして詩人だろう。持っている楽器……ハープはあまり大きなものだったりこだわったりしなければ、それほどメンテナンスの必要ない弦楽器だ。壊れた時の直し方を知らなくても無理はない。

「えっと、大丈夫ですか？」

「やー、全然大丈夫じゃないわ。めっちゃ困ってます」

……正直な感想だ。ここまで直球に困ってますと言える人物は存外少ない。ベルは頬を掻きながら申し出る。

「えっと、宜しければ見ましようか？ 体質上“音”にはかなり自信がありますので、恐らく直せると思います」

「ホント？ それなら助かるなあ。あ、ごめんね君たち。もう少し待ってて貰っていい？ このお兄ちゃんが楽器を直してくれるそうなんだ」

「喉が渴いちやうよー」

「ふふふ、ちゃんと用意してありますとも。冷えてるジュース。君たちお楽しみその他国産だよつ」

飲み物の無償提供。詩人というナリの割には随分と客層が幼く、また距離感が近い。旅人じゃなくてオラリオの住民なのか。

というよりは、冒険者か。力みを薄くしてるので一般人は分かりにくいけど、多少経験を積んだ三級冒険者ならば気付くくらいに気配が強い。ベルが不思議そうに眺めていると、声の主——— 声音からして女性は、ハーブを手渡した。

受け取ったベルが魔法を発動しながら音質のチェック。弦、ボディの確認を淡々と進めていると、子供達を撫でながらもフードの奥でジッと視線を向ける女性。

そういえばアリーの姿が見えない。後を追ってきたからすぐ近くにはいるだろうし、はぐれる程に道は混雑して無いはずだ。ベルが早歩きだったにしても、かなりルーズな歩みな気がする。

色々と動揺が重なって思わず問いかけた。

「ど、どうかしましたか？」

「んー？ 何というか、似合わないなあって」

「えっ」

「でも妙に様になつてゐるんだよね。あ、ごめんごめん。こつちのイメージがちよつと噛み合わなくつてさ。君、随分とオラリオの英雄と瓜二つだから」

「あー……確かに、それだとイメージが合わないですよね」

口ぶりから察するに六年前の英雄譚の話を直に見た人なのだろう。白髪紅眼という特徴的な部位の指摘ではなく、このオラリオに訪れた時の様に容姿そのものがそっくりだと言われて、ベルはそう推測した。

そんな思考を浮かべながらも、音は聴き取っている。ベルは一度弦を弾くと、頷いて女性へと手渡した。

「もしかして、弦を切ったりして張り替えとかしましたか？ ここと……ここですね」

「わ、凄い。一回弾いただけで分かるの？」

「音の質がかなり違うので。単体で聴くとあまり違和感は無いんですが、連続して弾い

てると邪魔する音色になってますね。多分粗悪品です」

「ふふふ、マヌケは見つかつた様だね。私も含めて。よしつ、買った場所に行つてとつ捕まえよう」

「あー、楽器系つてオラリオでもあまり浸透してないので、詳しく無い人が知らずに仕入れている可能性もあるので、程々に……」

つていうか、捕まえる？ 個人制裁だろうか。にしては言い慣れてるといふか、何とも言えない違和感。ベルが首を傾げていると、女性は残念そうに呟いた。

「でもそつかー、それだと今日は音無しになるかな。他の弦の替えが無いし」

ハーブはこれ一つ。今から買いに行くには少々時間がかかり過ぎる。……詩人ならば自由に来る時間が多いので、いつ弾いても良い様に思えるのだが。またも違和感。やはり強さの気配も考えてどこか有名なファミリアに所属している冒険者だろうか。ここ最近でやっていたのはダンジョンの資料漁りだから、冒険者の情報はさほど詳しくない。

考えても仕方ないことは考えなくて良いか。ベルはその結論に達し、残念そうにして

いる女性に優しく笑みを浮かべながら語った。

「一応手段としては二つほどありますよ」

「え、マジ？」

「はい。一つ目は買い換えた弦に合わせて調律する事。これは弾く側も大分違和感を覚えてしまうので、慣れるまではオススメ出来ませんが……あともう一つの手段として、応急処置が出来ます。この場に限りませんが」

ベルは「強化」イコスターを粗悪品の弦に付与して音を変化させ、他の音色に合わせた調律を行った。

女性がフード越しにも分かる困惑を見せながら弦を弾くと、途端に明るい雰囲気を出しながら声を出す。

「わっ、凄いい！ 元に戻ってる！」

「永続する訳では無いので、付与エンチャントが切れたら音も戻りますけどね。この場でなら取り敢えずは大丈夫です」

「うん、ありがと！ 良かったらお礼に君も聴いていく？」

「あ、えっと……」

アリーゼを放つてこの場に来てしまったのでおいそれと同意は出来ない。しかし後ろに居たはずなのに本当にどこ行つたのだろうかと魔法を発動して索敵しようとする
と、女性の背後に見覚えのある赤髪の女性。

居た、と。認識すると同時に赤髪の女性、アリーゼはフードの女性へと抱きついた。

「こんな所でサボリかなあ？　アーデイ」

「びっくりしたあ……今日は休みだよー、アリーゼ」

女性……アーデイはアリーゼの顔を認識すると、フードによって纏まっていた長い髪を下ろす様に顔を晒す。蒼や空色の様な青を強調するほどの濃さはなく、灰色混じりの青髪に蒼い瞳。アストレア・ファミリアには居ない色をイメージさせる姿。
仲良く抱き合っている二人を見て、ベルは思わずアリーゼに問い掛けた。

「お知り合いですか？」

「うん、ガネーシャ・ファミリアの団長の妹さんだよ」

「アーディ・ヴァルマです。噂は鐘々と共に聴いてるよ、ベル君？」
「あはは……すみません」

正確には鐘の音は自分のせいではないのだが。しかしまあ朝訓練の時に以前までは迷惑を掛けていたのは事実。都市警護に尽力するファミリアの言葉ともあつて思わず謝ると、良いよ良いよと言う様に笑顔で手振りする。

「いやー、にしても意外なお二人さんで。デート中かな？」

「そうだよ」

「わっ、即答。大丈夫？ アストレア・ファミリアの中で取り合いになって血みどろになつたりしない？」

「……？ なんで？」

「唯一の男の子だし……つてそうか、【静寂】が居るならその辺の制御は出来てるか」

あの義母を前に好き勝手に弄るなど出来まい。アーディか都市最強の姿を浮かべながら苦笑していると、周りの子供達はアリーゼを見て「スカートハル【紅の正花】だ！」「私服姿珍しー！」と燥ぐ。やはり第一級冒険者。正義の派閥というつつきやすいファミリアで

ある事も相まって子供にも人氣だ。

その様子を見て、アリーゼはベルをチラ見して抱きつくのを止め、アーデイに問い掛ける。

「一つ聴かせてくれるんでしょ？ 私も良いかな？」

「ええ、友人に聴かせるのは恥ずかしいなあ。良いよつ！」

「恥ずかしがつてる様に見えてノリノリだ……」

アリーゼが聴くと言つてる以上、ベルも否定する要素は何処にも無い。オラリオに属して、かの英雄譚の最中にも居ただろう女性の語り。

やはり【大鐘楼の英雄譚】^{グクラシンド・ベル}だろうか。それとも冒険者の王として有名な大英雄アルバートの【迷宮神聖譚】^{ダンジョン・オラトリア}？

或いは、彼女が今まで見てきた偉大な冒険者の軌跡か。遙か古代の英雄譚なのか。どんな話でも楽しみに違いはない。

美しく、凜とした表情から語られるは、一人の男性冒険者の話。

「——これは、己の人生を残り三年と称しながら、偉業を遂げて器を昇華し、五年の月

日を過ごした……とある老兵の英雄人生だ」

風の様な笑顔

まず前提として、アストレア・ファミリアは多忙である。その中でも都市最強と名高いアルフィアは特に多忙で、病をもともしない身体となった彼女の「才」はあらゆる面にて役立てていた。

だがアルフィアが突出しているだけで、アストレア・ファミリアに所属する人物は例外なく多忙である。第二級以上で構成される冒険者達だ。

少数精鋭のファミリアであるが故に、個人依頼というのが非常に多いのも理由の一つ。

また、依頼がない時は巡回にて都市警護をガネーシャ・ファミリアと共に行うのも理由の一つ。

はたまたその人気性から客寄せ看板にする為に休むついでと店に引き込まれるのも理由の一つ。

そんなこんなで、事実上身体を休められるのは睡眠時や食事中程度。故にこそそのファミ

ミリア入団条件の厳しさだ。他の探索系ファミリアであればギルドからの強制任務や主神の気まぐれでも起きない限りは自由に出来るのだが、基本的に自由時間というものが無い。

とは言え、例えばリユー・リオンというエルフの女性が己の故郷に帰るとでも言うのであれば、当然その件は了承される。別にファミリアそのものを辞めてもいいし、都市警護中でも自身の巡回範囲という名目から外れない限りは動き回れる。

書類上は探索系ファミリアと記入されているから、ハツキリ言ってしまうとアストレア・ファミリアの行動は『自己満足』でしかない。

だがその自己満足も長く続けば習慣となる。受け入れるオラリオにとっても、行うアストレア・ファミリアにとっても。だからこそガネーシャ・ファミリアと共にギルドからの支援を受けられ、都市警護は義務となった。

だから、こうして何日もの休みが出るというのは貴重だ。それは周りからの認識も同じで、普段ならば迷惑にならない様に挨拶程度のやり取りしかしない人物達も本人達が嫌がらない程度に会話を望んでいる。

例えば一人は酒場の手伝いを。例えば一人は他派閥の団長にちよつかいを。例えば一人は医療派閥の手助けを。例えば一人はお気に入りの店へと。

そんな風に各々が行動をしている中で、新人冒険者³は。

「……アイズさん。どうしたんですか？」

「……………」

「いえ、その……エルフ耳」

「ベルの好みらしいから。ロキに連れてって貰って、買ってきた。こすぶれ……？ つて言うらしい」

教会の地下隠れ家にて、アイズと過ごしていた。

あの時かあ、と。目を逸らしながらアルフィアとの訓練時のやり取りを思い出していると、むふふと満足そうに笑ってアイズはベルの心臓の上で手を滑らせる。

「心拍が上がってる。顔も少し赤いよ。やっぱりこういうのが好きなんだ？」

「……………はい」

「でも、ロキみたいにはならないね」

「ロキ様が何か……………」

「えつと……………」

「エルフ耳アイズたんマジ神秘的！ つ、次はこれ着てくれへん？ これも着けて？ エルフ耳メイド服メガネっ子アイズたんになってくれへん！」と、鼻血を出して息を荒げてコスプレ用のグッズを大量に用意していたロキの様子を伝えてベルは苦笑する。緊張気味だった表情は和らげに、微かに加速していた心拍は平常となる。アイズがそれに気付くと耳当てに触れながら呟いた。

「やつぱり、本物との差異がある？」

「そうですね。作り自体はいい出来だとは思うんですけど……やつぱり当人の意識の問題が表れちゃうんだと思います。生業にしてる人なら『成り切る』というのが出来るみたいなんですけど……アイズさんの場合、着けてるだけと言いますか」

アイズさんって大根役者だから意識すればする程にドツボにハマっていくんだよなあ、と。言葉には出さなかったが意識は伝わったのだろう。不満気にエルフ耳を外すアイズを見て、ベルは外す時に微かに乱れた横髪を撫でながら優しく笑って言い放つ。

「アイズさんにはアイズさんの良さがありますから。無い物ねだりをしても良い。無駄を極限まで熟している。ふとした拍子に自分の欲しいものが浮かびますから、その考え

は捨てなくていいと僕は思います」

無い物ねだりをしてもし方がない。

自分の求めるモノの為に無駄は削ぎ捨てる。

強くなる為に突っ走って来た今までを溶かす、いつも違う内容の言葉で、それでもいつも同じ声音で語られる優しい言葉。

「試したい事は何でも試して、自分に合うと思った事を手探りで探っていけば……いつの日か、自分の在りたい姿になります。その時までには僕と一緒にいますから。寄りかかって、頼って、そして思い浮かぶ事を何でもして下さい」

「……すげこまし」

「え」

「天然ジゴロ。人たらし」

「えっ!?!」

——かの英雄の、かつての決戦の時の言葉を思い出した。彼は愚直に己の想いを告げて、アイズの欲しかった言葉を投げ掛けてくれた。

そして今のベルも。アルフィアの英才教育が施されている分なまじ賢いから言い回しが上手く、それでも変わらない自分の想いと相手への思いやりがある。アイズの心を幾度となく溶かす。

側に居ればそれで良い。離れていけないならば何をしてもし一緒にいよう。何時だつて近くにいる様に感じ取れるのだから、これ以上の高望みはしなくていいんだ。

その気持ちは今も変わらない。五年前の「はじめまして」の時から、何も。

でも、ベルがアイズの想いを尋ねるから。アイズは自分の想いとは何なのかと思考する。こうして自然と出てくるベルとのやり取りもまた本心。側に居ればそれで良いと思える気持ちもまた本心。

それでも、寄りかかって良いからアイズの良さを教えてくれと言われた。

良いのかな。離れていかないかな。自分の求めた英雄が忽然と消えていったあの日の様に、ふとした瞬間に消えて無くなるなんて事にならないかな。

そんな気持ちを抱いて塞いでいた記憶が、ただの記憶^{ユメ}だった過去が思い出される。

まさかアイズにそんな言葉を投げられるとはと本気でショックを受けているベルに、アイズはかつての記憶を重ねた。

英雄^{ちち}に寄り添っていた母の姿を。

「お母さん、みたいに」

そして、無意識に言葉が放たれる。

「お母さんみたいになりたい」

あの風のような人に。

誰にでも笑顔を運ぶ、優しい風のように。

大好きだった母のように。

「……」

「——っ!? っ、ごめん……流石に無茶……」

呆然とするベルに、アイズはハッと我に帰りながら謝る。言葉通りの無茶振りだ。ベルは己の母を見たことがない。知るはずが無い。そもそも自身の記憶すらあやふやだ。臃げに楽しい思い出があるだけで、鮮明な記憶なんかじゃ無い。

何を口走っているのだろうと表情乏しく落ち込むアイズに、ベルはふと笑みを溢しな

がら言葉を紡いだ。

「これは、受け売りの受け売りになるんですが」

「……………」

「奇跡は在るべきだ。でも奇跡はない方が良い……………らしいです」

かつてアルフィアが己の主神——神々の女王^ヘから受け継いだ言葉を、実感を持つてベルに投げかけた。そして今度は、ベルからアイズへと。

どういう事かと首を傾げるアイズに、ベルは言葉を続ける。

「奇跡というのは魅力的で誰もが惹かれる言葉です。でも、履き違えちゃいけない。奇跡というのは起こり得ない事が起こるからこそ存在している言葉なんだと」

英雄譚に力の覚醒や逆転劇というのは付き物で、それらを総称して運命と呼ぶ。言い換えれば運命を破る者……………奇跡、とでも呼ぶのだろう。

なんて事のない物語のありふれた一端で、それこそオラリオの英雄は存在そのものが「奇跡」とでも言える。

「奇跡なくして起こせる事象に奇跡はいらない。理想は誰もが奇跡の無い、全てが順調に運ぶ事です」

「……無理、だよな?」

「はい。理想としては奇跡なく解決できる事。でもかつてオラリオが奇跡に救われた様に、奇跡は在るべきなんだ。もう自分の力ではどうにもならなくて、他人の力にも頼れなくて。それでもその状況を打破してくれる奇跡は、きつと在るべきなんだと」

全てが順調に事柄を運んでくれるならば奇跡なんていらぬ。でもどうしようも無いなら奇跡は在るべきだ。

要らないと拒みながら、いざという時には在って欲しいと言う。

非常に我儘で。

自己中心的で。

ご都合主義で。

でも、それこそ我々の本質だろう? と。自身の母——メーテリアという女性が病に伏す影で、治す術を探っていた女神の言葉を。それを受け継いだ義母アルフィアの言葉を、アイズへと伝える。

「そして、これは『人の想い』による小さな奇跡の積み重ねで、必然なんだと僕は思います」

「べ、ベルっ？」

「アイズさん、魔法を発動して下さい」

ベルは立ち上がり、アイズを抱き上げて自身の膝の上に座らせる。困惑した様子で問うアイズに、ベルは微笑みを絶やさずそう告げた。

目を開いて閉じて、何度も繰り返し、やがて力を抜いて背を預ける。身長差なんて全く無く、それでも体格に性別の差を感じながら、心臓の位置を合わせながら、慣れた詠唱を口にした。

「……………
【風よ】」

テンベスト

柔らかく二人を包み込む透明な優しい風。出力を調整して魔法威力を皆無に、ただ靡く風のように魔法を継続させる。

二人を纏めて包み込む風。風の如く静かな空間。それでも確かな温かい、息吹よりも

遙かに大人しい空気の揺らぎ。

ベルはそれを感じながら、ふと目を閉じる。風を感じるこの身体に染み付いた、全てを覚える【完全記憶】へと身を任せた。

魔法から意思を感じ取れる特異な体質スキルである事。通常魔法と違って、アイズの風が精霊から受け継いだが如く優れている事。

二人に確かに宿る意思が齎した必然は、確かな小さな奇跡となって現れる。

「――」

揺れる木々の影に座っている二人。精霊の様に儂く、それでも確かに存在していた笑顔。

感じ取れるのは「意思」だけだ。記憶そのものでは無く、アイズが想う記憶の感情に触れるだけ。

でも、きつと。それだけ大事な記憶だったのだろう。小さい頃の臃げな記憶でも、強い感情はその光景を鮮明にイメージさせる。

儂く、でも強く。弱く、でも不朽で。

色褪せても尚、染み付いた想い。

時間にして何秒だろう。永遠にすら感じ取れるイメージの中で、目を開こうとする。膝の上に、腕の中に居座るアイズを感じ取って、いつまでも想いの中に囚われてるわけにもいかない、ふと先までの光景へと戻ろうとした。

そんなたつた一瞬の刹那。視界の奥で、自分と同じ様に少女を抱き抱える女性が、自分を見つめて口を開く。

——— ありがとう。

ただのイメージで、捏造や干渉など出来る筈もない。知らない記憶に願望を抱く事なんて出来ない。

なのに、ベルの存在を認知したかのようにその言葉を発する女性に驚愕する。

啞然と現実に戻り、先までの光景が蘇った。ふわふわとしていた感覚は確かなものとなり、あまりの鮮明な情景にベルの思考は停止していた。

「……」

ふと、腕の中に居座る年上の少女に目を向けた。イメージの中の女性と似ていて、それでいて違うと断言できる在り方。きっと彼女がアイズの母親なのだろう。まるで精霊の様な存在なのだろう。

我に帰り己の目的を思い出して、ベルはアイズを抱き抱えて立とうとする。だが微動だにしない少女に、思わず声を掛けた。

「……アイズさん？」

そして、手の甲に零れ落ちる雫。生暖かい水滴に、ベルは立ち上がろうとする足の力を抜き、背もたれに背を預ける。その手は、アイズの美しい髪を優しく撫でていた。

「……………」

ドバドバと溢れる事はない。悲しくはないから。

ポツリポツリと、感極まって涙が溢れる。懐かしい感情と思い出と、確かな母の“想い”に触れて、嬉しさが結晶となって目から溢れる。

奇跡は在るべきなんだ。そして、奇跡は確かに在ったんだ。実感を持つてその言葉を心に灯す。

ベルを感じ取るそのスキルが共鳴して情景をイメージさせ、色褪せた記憶を鮮明にした。ベルと同じ光景を、ベルとは違う視点から感じ取った。

アイズは目元の涙を拭い、体の向きを変えてベルに笑顔を見せる。

「ありがとう」

「……………どういたしまして」

ああ、これは。

今のアイズは。

“お母さん”みたいになれているのだと、そう確信した。

意思から感じ取って化粧を施し近付けようとしていたが、そんな必要なんてないのだと、この風のような笑顔を見つめて理解する。

心は高鳴り、顔は蒸気して、思わずその視線から逃れなくなってしまう。何て魅力的な笑顔なんだろうと。アイズがそれを感じ取れる事を分かっている、逃げ出したくなってしまう様な強い感情。

壊れた人形なんて其処には居ない。

寄り添う必要も無くなった。

でも、あるべきではないと思っていた感情が同時に込み上がってきて。

——複雑だなあ、と。ベルは天を見上げながら、己の感情を理解して苦笑した。

傍に寄り添っていなきやいけないという義務感から、傍に寄り添いたいと想ってしま
う、自分の感情に。